
ペルソナ3 ポータブル 《異邦人の記憶》

架榎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ3ポータブル《異邦人の記憶》

【Nコード】

N8360Q

【作者名】

架椰

【あらすじ】

ペルソナ3ポータブルのヲタク学生が、いきなりポータブルの世界にお呼ばれ！？

ドタバタ・シリアス・ギャグ・もう何でもアリ！

佳織を呼んだ者の思惑とは一体…！？

無事に元の世界には帰れるのか！？

原作沿い、オリジナル設定あり。《トリップ》

こんな体験ってアリ！？（前書き）

初めまして！架椰といいます！

遂ににやっちやいました…！

覚悟をした人から、どーんと来ーい！

ちなみに、アト〇ス様や、実際の地名などは全く関係ないです。

こんな体験ってアリ!?

ー救いたかった。

大切な人達を。皆を。

もし、やり直せるなら。

ーお願い。最悪の結末だけは、どうか…。

『んじゃ、またー!』

「うん、忘れないでよ!

佳織は、すぐに忘れるんだから!」

『はっはっは!流石に、ソフト1本はキツいっつてば!』

真夏の日差しが暑苦しい事この上ない、7月の初夏。

1学期最大の敵、通知表を見て敗北感に打ちのめされた女子高生が1人。

『あああああ、通知表…シュレッダーに掛けちゃ駄目かなあ…?』

うっー… だらああああ！と街中で奇声を挙げて街行く人達の視線が悪い意味で釘付けになっている少女は、高瀬佳織。

青春満喫中の、花のJKである。

（本人談）

ちなみに、成績は中の下ギリギリ。
かなりヤバいが、本人は

『まあ、済んだ事はいいか！』

全く気にしていなかった。

この赤点ギリギリ学生が1人で百面相しているのには、訳があった。

『発売から2年！やっと、うちにも運気がまわってきたー！』

くっう、プレイ動画だけで悶絶してた日々も終わりだーい！』

ひゃっほーい！と体中で喜びを表現する彼女の手には、1つのパツケージがあった。

『《ペルソナ3ポータブル》！遂にプレイ出来る！』

『最初は名前か…』

性別は女の子として、どうしようかなー。』

自宅のリビングでソファから転げ落ちない程度にゴロゴロする。

『うーん、どうせなら《月》で始めたいし…かと言って…ああ、でもなあ。』

考え始めて、はや3時間。キッチンから良い匂いがしてくる。

それに、母親の怒声もオプションで。

「ちょっと佳織！皿並べるの位、手伝いなさい！」

『うー、…分かったよ！』

「あんだねえ、ゲームなんかしてないで勉強しなさいよ！」

『してるよ…！』

「じゃあ、あの順位は何なの!？」

そう言って目の前に出されたのは、1学期末試験の結果表。

11360人中、290番。絶望的な順位である。

『うー（…ヤバい。このまま…じゃ噴火する!）』

あ、宿題があつたんじゃん！』

やってくる！とリビングのPSPを引つ掴み、急遽退散。

『はあ…鼓膜が破れるつつの。』

自室の勉強椅子に座り、ギシギシと揺らしながら溜め息。

(まあ、あの順位はヤバいとは思っけどさあ…。)

ブツブツと呟きながらも、仕方なく参考書を開く。

『まあ、先に主人公の名前、決めちゃいますか！』

しかし、10分で断念。

『うん、仕方ないよ。…よし、この中から決めよう！』

紙に書かれた名前は、ざっと20〜30。

『うーん、これ違う。これも、これも。』

悶々としながら名前を選出して、はや1時間。
『よし！これにしよう！』

意気揚々としながら満足感に浸っていると――

《先輩達！逃げて！》

《馬鹿を言うな！キミを置いて逃げれるか！》

《――無駄だよ。》

《美鶴！》

《な、しまっ…！》

《っ、美鶴先輩――！！》

『……っ！？』

ガバツ！と身を起こす。

(な、何…今の！？)

《キミは知っているはずだよ。》

『誰！？……！！！！』

いきなり聞こえた声に背後を振り向くと、視界を埋めたのは、少年の手。

『……』

名前を呼ぼうとする。

だが、言葉が口から出る前にその手は額に触れ、同時に佳織は意識を失った。最後に聞こえたのは、

《キミの力を、貸してあげてほしいー。》

どこか切なそうに紡がれた、青年の声だった。

こんな体験ってアリ！？（後書き）

お気に召して貰えました？

「ふざけてる！」とか思われた方は少なからずいると思います。

頑張って更新します！

なので、石は投げないで下さいっ！m（）（）m

文句は感想で、お…お願いします。逃げ腰

へ、じゃ…マジ!? (前書き)

ペルソナアアア!

…すみません、一度やってみたかったです。

…えと、では本編、どうぞ!

へ、これ…マジ…？

『…頭痛い…。』

ようやく意識が戻り、痛む頭を抑えて、なんとか立ち上がる。

『いだだだ、…！そういえば！』

グルッと周囲を見回す。だけど、あの少年は見当たらず代わりに視界に収まった光景は、

『…はあああ！？』

自室とは全く異なった様式の部屋だった。

自室でなければ、よく目にしていた《あの寮》でもない。

3LDK位の、1人部屋だった。

(……、ど…！?)

混乱する頭を整理する。

『アイツ、のせいだよ…間違いなく。』

とにかく、外に…と思い、ドアノブに手を掛けた瞬間。

「くんばんは。」

『——！』

そのままの姿勢で、軽く首だけを回す。

視界の端に映った人影は、モノクロとしか判別出来ないが、誰だか佳織はすぐに分かった。

『アンタ…何の用？』

背後の人物と向き合い、慎重に尋ねる。

モノクロの服を身に纏った少年は、その幼い顔に微笑みを浮かべる。

「くんばんは、佳織。

こんな形で招いてごめんね？」

『…あのさ、人の質問ガン無視しないでくれる？』

「酷いなあ、無視なんかしてないよ。

用ではないんだけど、キミの顔が見たかったからね。」

『（…胡散臭い。）ふーん、じゃあね。

うち、忙しいんだ。』

「いいの？今は…」

『これ見りゃ分かる。』

それだけ言って、佳織は腕時計を示す。

24:00

針は、《その時間》を示していた。

「フフ、さっき外に出ようとしてたけど、出られないよ。」

『は…？』

すぐさまドアノブを回す。

しかし、ガチャガチャとしか音が鳴らず、扉は開かない。

（っ、なんで…！？）

「キミには渡したい物があったんだ。」

『…なんか、上手く詰められた気がする。』

ムスツとしながら扉に寄りかかる様にして、腰を下ろす。

(まあ、今は情報収集かな。)

『で、渡したい物って何？』

「目、閉じて。」

『…ん。』

言う通りにするのは少し癢だったが、言われた通りに目を閉じる。

しかし瞼の裏に暗闇は無く、代わりに見えたのは、ぼんやりとした人影。

『……《アース》？』

気がつけば無意識に口が《彼》を呼ぶ。

「キミの鎧。大切にしてね。」

もういいよ。促されて目を開けると、今度は目の前にハッキリと見えた。

蒼い体に、黒の長髪。瞳は薄い金。

細身の剣を右手に携え、左手には大樹のような形をした斧を持つ。しっかりとした体は、すぐに男性と判断出来る。

紛れもなく、彼が佳織の《鎧》。

《彼》は強い意志を持つ瞳で、佳織を見つめる。

『まさか、うちの《ペルソナ》…？』

「うん。キミの中の《彼》は随分と強情だ。上手く付き合ってね。」

『ちよ、ちよっと待て！』

背を向けた少年を引き留めようとしたが、その前に彼の姿は闇に紛れた。

同時に、アースも。

『言うだけ言って消えないですよ…』

窓から差し込む緑の月光が、1人になった佳織を包み込み、照らしていた。

『今度会ったら、根こそぎ聞き出してやる。』

へ、これ…マジ!? (後書き)

今回は佳織のペルソナ習得です!

ちなみに、アースの斧は、世界樹ユツゲドラシルのつもりです!
名前違っていたらすみません!

主人公より高待遇！（前書き）

今回は、会話が殆どです。

トリップ最強！ 馬鹿か

主人公より高待遇！

ー チュンチュン。

ー ジリリリリ！

『…くるぞ。』

手探りで枕元の時計を止める。

『ふあゝ…、さて、今日からどうしよー。』

(昨日はあれから寝ちゃったし…とりあえず、月光館学園の高等部に入らないと始まんない。)

ー ジリリリリ！

『だから煩いつつの！』

ー ジリ、ガチャン！

『…あ。(ヤバ！時計壊れた!?)』

あまりに煩かったのでチョップを繰り返したら、見事にディスプレイがひび割れた。

『…まあ、新しいの買つかない！』

無理矢理ポジティブ思考に持っていく、改めて部屋を散策。

『ベッドに勉強机、風呂？簡易キッチンに…トイレまでついてる…』
寮にしちや豪華すぎるなあ…とぼやきながら、とりあえず扉を開ける。

ガチャ。

『あ、開いた。』

(これは、マンションかアパート…だよな?) 『』

「あら！おはよう！」

外に出て、表札を確認していると横から声が。

『(誰！？)お…おはようございます。』

困惑する佳織に構わずに、話しかけてきた女性はニコニコと何かを差し出した。

『あ、ども。(って、これ…鍵?)』

「昨日はいきなりで大変だったわねえ。

全く、この子のご両親は何をなさってるのかしら？

あ、おばさん、このアパートの管理人の《森本加代》よ。」

宜しくねえ！といきなり手を握られて握手。

『あ、え！？

よ、宜しく願います！』

慌てて笑顔を浮かべるが、内心は

（何なんだこの森本さん！自由すぎる！

というか、モブキャラ！？モブキャラなのか！？）

超焦っていた。

「アナタ、昨日突然入居してきたから勝手が分からないんじゃない？

あ、学校は、月光館学園の高等部よ！」

（ーよし、月光館学園k t k r！）

『分かりました！それと…。』

「なあに〜？」

『（森本さん、どんだけ？バツクに花が見えるんだけど！超ユルい
んだけど！）

えっと、これから宜しく願います！

名前は高瀬佳織と申します。』

「あらあら、そんなに畏まらないで。こちらこそ、《安息庵》へようこそ。

自分の家なんだから、気楽に過ごしてねえ。」

深々と互いにお辞儀。

それから30分。佳織は安息庵に関する説明を受けた。

ついでに、学園の事も一応聞いてみると…

『大丈夫よお、おばさん、全部準備したから!』

なんて答えと、いきなり制服を渡された。

(はあ、すごい管理人さんだったなあ。)

溜め息をつきながら一旦部屋に戻る。

(さて、忘れそうだし…アパートの説明を纏めよう。)

- 1、基本は自給自足。
- 2、鍵は自分で開閉。
- 3、このアパートは、《彼ら》のアパートとすごい近い。
- 4、たまに森本さんがご飯のお裾分けをしてくれる。
- 5、このアパートには学生は殆どいない。
- 6、今は春休み。よってうちは、4月から学園に通う。

7、但し手違いにより《2年生》に進級。

『こんなもんか。』

(問題は、春から2年生って事だよ…。)

《向こう》から喚ばれたのが7月の終わり。

なので、佳織は実質、1年生の過程を終了していない。

『ヤバい。勉強とか、どーすんの?』

むづづ…と唸る。

『…まあ、まだいいかな。』

制服試着して、散策しに行こー!』

気楽だなオイ!

『やって来ました!ポロニアンモール!』

あー疲れた。と愚痴る。

ちなみに、安息庵を出たのが午後2時。

『着いたのが4時で、何の冗談?』

ゲームでは一瞬、実際はグダグダ。

『あ、そうだ。』

春休みなので、結構いる学生の間を縫って路地裏に。

『確かこの辺に…あつた!』

佳織の前には蒼い扉。

言わずもがな、ベルベツトルームへの扉である。

『入れるのかな…いや、《契約者の鍵》持ってないから無理か。』

あー、残念。呟いて踵を返した時だった。

『…ん。あれ?』

携帯の着信を告げるバイブ音。

『……はあ!?!』

メールが一件。その内容は、

《主がお待ちです。》

(なんつー、あり得ん内容!)

その場で何度も携帯と扉を見比べた佳織だった。

主人公より高待遇！（後書き）

ご飯のお裾分けとか良いなあ。

こんな管理人さんがいたら、つつい頼りすぎちゃいますね。

どういつ展開？（前書き）

今回は、ベルベットルームでの会話です。

どういう展開？

ゲームでは聞き慣れた歌声、見慣れた2人の姿。

(まさか、こうなるとは…。)

目の前に悠然と座る老人を軽く睨む。
ついでに、隣のエレベーターガールも。

『んで、なんでこの部屋にうちを招いたんすか？』

あの後、勝手に扉が開いて気がついたら椅子に座っていた。

『用件があるんなら、短くかつ簡潔に宜しく。
無いんなら帰る。』

「フフ、そう言われるな。」

「佳織様、貴方はご自身のアルカナを存じていますか？」

『…？分かんないよ。普通。』

そう言うと、突然、うちの隣に《彼》が出て来た。

『わ、アース？(出て来れるんかい！)』

「そのペルソナのアルカナは…かつて無いアルカナ。」

「非常に興味深いアルカナ…そして佳織様。」

『…ごめん。一体、何が言いたいの？2人して。』

「アルカナの総数はご存知ですか？」

『んなの知ってるよ。』

魔術師から死神の13個でしょ。』

そう言うと、老人…イゴールは首を振った。

(…どういう事?)

「これを…。」

エレベーターガールのエリザベスから手渡された、1枚のカード。

表裏を見て、目を見張った。

『これ…どういうこと!?!?』

裏面は問題無いが、表はそうではなかった。

(アルカナが記されて無い!?)

それに、この数字…)

表は本来、アルカナの在る場所が空白。

そして、その上に記された数字は…

『《??》…まさか、14番目のアルカナ!?!?』

(んな筈…アルカナは13までしか存在しない筈！)

訳が分からず混乱していると、肩に、何かの重みを感じた。

『…アース？』

《彼》の瞳は強い意志で、主を見ていた。

まるで《心配するな》と言うかのように、剣を鞘に収めた右手が佳織の肩に乗せられている。

(ああ、そっか。コイツはお見通しって訳なんだ。)

『…サンキユ。』

アースの瞳を見返す。

すると、彼は1度頷いて消えた。

『イゴール、教えて欲しい。』

うちはどうすれば良いのか、うちのアルカナを。』

「…分かりました。貴方のアルカナは《混沌》。』

『…混沌？』

ええ、とイゴールは頷いた。

『なんか、《ワイルド》に似てるけど。感じが。』

「それは、ワイルドと似て非なるアルカナ。』

『ワイルドと似る…っていう事は、うちも複数のペルソナを扱える？』

「少し、違います。」

佳織様の混沌は、簡単に言えば《使い捨て》のような物です。」

『使い捨て…？』

「さよう。ワイルドは私共の所でペルソナを合体、消去する事が出来ます。」

しかしながら貴方は、合体のみです。」

「混沌は、ペルソナの複数所持は可能ですが、戦闘で使用したペルソナはその場で消滅します。」

「…私の持つ《ペルソナ全書》からペルソナを引き出し、合体する事は出来ますが。」

『…やっぱり、お金いる？』

「はい。」

(…ケチ。)

ふてくされて、足をブラブラさせる。
俗にいう、貧乏揺すりだ。

「…おや、些か長居し過ぎましたな。」

『マジっじゃあ、そろそろ帰るよ。』

「またのご来訪をお待ちしています。」

『それにしても、14番目のアルカナ…かあ。』

…ストーリー、変わったたりしませんように。』

安息庵に帰る途中で呟いた佳織の言葉は、夕暮れに溶けて消えた。

どういつ展開？（後書き）

エリザベスにお金取られる…きつと、家計簿とかけます。絶対。
家計が火の車とか、嫌ですもんねWWW

今日から月高生！（前書き）

遂に月光生！

まずは、あの2人との会話。

佳織が冷たいですWWW

今日から月高生！

桜が咲く、安息庵の玄関前。

「良い感じじゃない！可愛いわよ、佳織ちゃん。」

『あ、有難う御座います。』

「記念写真、撮って良い？」

『あ、あの、そろそろ行かないと…』

「あらやだ、こんな時間！

じゃあ、行ってらっしゃい、佳織ちゃん！」

『行って来ます、森本さん！』

『ふー、やっと乗れたよ…。
今日から月高生か…。』

（影時間、今日から動き始めるとするかな。）

今、うちはモノレールに乗って月高に向かってる。

春休みの間は、特に動かないでアースのスキル確認とか、あの2人の所に行ったりしていた。

（ちょっとエリザベスと仲良くなったし。）

キーンコーン、カーンコーン

『ヤバイヤバイ！遅刻するー！』

予鈴が鳴る中、うちは猛ダッシュで校門を駆け抜けた。

なんでこうなったか？話せば長くなるよ…うん。

「コラそこ、早くしなさい！」

『（うわ鳥海先生！いきなり！？）
分かりました〜！』

（災難だー！）

『ハアツ…、ギリギリセーフ。』

その後、なんとか滑り込みで教室に入った。
掲示板でのクラスは、2-E。
席は、最前列の左端。

(なかなか良い席…。ここなら！)

と、そこに見知ったヒゲが見えた。

「よつす。大丈夫か？今朝、全力疾走してたけど。」

『(順平！)うん、ギリギリだったよ。』

「あの走りは良かったけど、ちょっと止めた方が良いぜ？」

(…なんか、言いたい事が分かった。)

しかし、素直に頷くと面白くないので、ちょっと冷たい視線を送る。

『……………。』

「あ、自己紹介まだだったな！
俺は伊織順平。宜しく！」

『(空気詠み人知らず確定。)
うちは、高瀬佳織。』

「佳織な、じゃあ、佳織ツチと「コラ、順平！」わ、何だよゆか

リッチー！」

『あ。(なんかデジャヴ。)(』

「新学期早々、絡むの止めなさいよ！」

「いや、ゆかりリッチ、絡んでんじゃなくてさ」「言い訳無用!」「…。」

(おお、ゆかりって怖いー。)

『全然、大丈夫だよ。えっと、岳羽さんだよな?』

「…!うん、私は岳羽ゆかり。宜しくね。」

『うん、1年間仲良くしてくれると嬉しいな!』

「…俺、置いてきぼり?」

順平を完全に無視して話はゴールデンウィークに。

『(もうすぐ、…あの子の覚醒イベントか。)

あ、ごめん。今日は用事があったんだ!』

「そっか…。じゃあ、また明日!」

『うん、また!』

『ごんちわーす！エリザベス、いるかー？』

「ようこそ、ベルベットルームへ。今日はどのような？」

放課後。うちはベルベットルームに来ていた。

『うん、ちょっと聞きたい事があるんだ。』

今日から月高生！（後書き）

ゆかりって、目の前で怒ったら怖そうですよね。

障らぬ神に、なんとやら。

ぞうじて、じつなるの…!?(前書き)

いよいよ、影時間に入!

主人公が初めて喋ります。

どうして、こうなるの…!?

『…だはあー!、疲れた。』

ベルベツトルームから帰って来た佳織は、制服のままベッドにダイブ。

(くそうく、なんであんな場所で真田先輩に出くわすかなあ…。)

ベルベツトルームから出て、10分後に偶々、神社でランニングしている真田と衝突したのが始まりだった。

『うーん…今回のイベントに関しては、《特に関与するな》…か。』

うーん、と思案に暮れていた佳織は、視界の隅から走って来た人物と衝突した。

ドンッ…!

『…!』

「なっ、すまない!」

『いったあ…いえ、大丈夫で…』

「ん、どうした?」

(さ、真田先輩!?)

「とにかく、ほら。」

『あ、どうも。』

「月高か?」

『(見りゃ分かるじゃんか、普通。)

はい、2年の高瀬といます。』

「ひょっとして、岳羽と同じクラスか?」

『え!?!はい。』

(…なんのつもり?)

「…いきなりで悪いが、岳羽には、どんな印象を持った?」

『っと、元気で頼りがいのある子…ですかね。』

「そうか。仲良くしてやってくれ。」

『ーあはっ。

言われなくても、ゆかりは大事な友達です。
ずっと一緒にいたいですよ。

（ーそれに、うちが支える。）『

「そうか、頼むな。

ところで、ランニング、付き合ってくれないか？」

『はい!？」

（何を言い出すかな、この人は!）『

それから、半ば無理やりランニングを30分させられ、へろへろで帰って来たのだった。

（シャワー浴びて、ご飯食べて寝よ…。。）

『お休み…。。』

静まり返った部屋で、佳織の鎧は、主をじっと見ていた。

『おはよー、ゆかり!』

「あ、佳織。おはよう。」

『今日も良い天気だね。』

…あー！』

「わっ、どうしたの?」

(しまった〜!昨日から動く予定だったのに!)

『あはは、ちょっと忘れ物したみたい。』

「ええ!?私、貸すよ?」

『いって、大した物でもないし。』

(ストーリー上でなら、今日の筈…)。

そう思い、チラッと後方の席を盗み見る。

携帯音楽プレイヤーを下げた、紅い目が特徴の《彼女》。

(…エリザベスからは《関与するな》って言われたけど、様子見く
らいは良いよね。)

そして、夜が訪れる。

ードオオオオン！！

『…来た！』

影時間になり、アパートの玄関前にいた佳織の耳に、その音は届いた。

それから、暫くして彼らの住む寮の屋上に見えた、黒い影。

『…アース、うちを運んで。』

背後に現れたアースは佳織を肩に乗せ、安息庵の屋根へとジャンプする。

『ありがとう。暫くは様子見だ。』

（ごめんね、ゆかりー。）」

友人に心の中で謝罪する。

と、その時。

《—————！》

『…！覚醒イベント…。』

ストーリー通りに進む事に少し安堵する。

しかし、尚も《死神》の雄叫びが夜気を揺るがし続ける。

『?おかしい…長すぎる。』

瞬間。

ーザァッ!

『…!?』

(なっ、…シャドウ!?)

佳織達の頭上を通り越し、鳥型のシャドウ《ブラックレイヴン》数匹が、寮の屋上に向かって行くのが見えた。

『マズい…今の皆じゃ勝てない!』

自分の分身を見上げると、承知したように彼は主を乗せ、目的地に向かって空を駆けた。

彼らが向かう先ー寮の屋上では1度は死神を呼んだ少女が、ゆか

りを背後に庇って武器である薙刀を構えていた。

「ハア、ハアッ…！」

目の前のシャドウを睨み付けろが、意識は朦朧として、力が入らない。

(っ…駄目、立ってられない…。)

「桜！もう無茶しないで！」

背中に庇った友人から悲痛な叫びが放たれるが、今の少女ー神崎桜には、それを聞き取るだけの体力は無かった。

「ごめん、岳羽さん…逃げて…」

微かな声で呟いて、彼女の意識は途切れた。

どうして、こうなるの…!?(後書き)

…暗いっ!話が暗い…。

もう少し、コミカルにした方が良いかな?

次では、初・戦闘です!

負けない…絶対に！（前書き）

初・戦闘シーン！

ちなみに、佳織の武器は未定です。
言い案があれば、感想からお願いします。

負けない…絶対に！

意識を失い、微塵も動かない友人に、ゆかりは必死で声を掛ける。

「桜！逃げて…桜つてば！」

（どうしよう、私、私になんとかしないと…）

そこで目に入ったのは己の分身を喚び出す道具である、《召喚器》。

「…っ！」

とっさに銃口を額に当て、引き金を引こうとする。

「（喚ばなきゃ…私が助けなきゃ…！）」

しかし、焦りと恐怖で体はそれ以上動かず、次第にシャドウがその鋭利な爪で桜を切り裂こうと迫る。

（やめて…！その子に手を出さないで！）

やめて、やめてやめてやめて！

「っ………桜——！！！」

『――生きて帰すな、アース！《利剣乱舞》――！』

《ギイイイイイ！！》

「……え……」

友の切り刻まれる瞬間を脳裏に描き、目を覆ったゆかりの耳に届いたのは、肉の切れる音ではなく、シャドウの凄まじい断末魔の叫びだった。

そして視界に映った姿は、新学期になってから出来た、新しい友人の後ろ姿。

彼女が倒れて、ゆかりも動けない。

そんな状況を目にした瞬間に、口からは勝手に命令が下っていた。

『ー生きて帰すな、アース！《利剣乱舞》！！』

攻撃を仕掛けるアースから飛び降り、ゆかり達に駆け寄りたかったけど、目の前の雑魚共が邪魔。

『…いい加減、さあ。消えてくれない？』

自分でも驚く程に声は低く、怒りが籠もっているらしい。
ゆかりが背後でびびってる気配がするしね。

（…って、今は考える時じゃないかな。）

ふと足元を見ると、うちが考えた名前の1つで、倒れている同級生
《神碇桜》の使っていた雑刀が転がっていた。

『よっ…と。（うわ、結構重い。）』

試しに持ったけど、ちょっと、うちには重い。

というか、刃物を持つのは包丁とカッター以外では初だから、少し緊張する。

『（けど、目障りなんだよね…。）』

「アンタらの罪は、半端無く重い。」

ぐるりと薙刀を回して構えるスタイルは、主人公と同じ。

「…地獄へ落ちろ。」

ダンツ、と地を蹴ってシャドウに向かう。怪我したら痛いし、恐怖が無いと言ったら嘘だけど、うちには味方がいる。

「アース！」

シャドウを相手に闘うもう1人のうちに呼び掛け、薙刀を構えて突っ込んだ。

一方、寮の4階にある作戦室では――。

「…！アイツ、高瀬か！？」

「明彦、彼女を知っているのか？」

赤い髪の女性が、銀髪の青年に声を掛ける。

「ああ、つい昨日、神社前でぶつかってな。」

「（アイツも、ペルソナ使いだっただのか…。）」

「ん〜、素晴らしいね。」

「理事長！」

「桐条くん、彼女達は《S・E・E・S》招くのかい？」

そう言った男性は、月光館学園の理事長を努める、幾月修司。

彼は口元に笑みを浮かべたまま作戦室のモニターを見続けた。

『これで、終わりっ！』

佳織の持った雑刀が、最後のシャドウを切り裂く。

同時に、屋上は再び静けさを取り戻していた。

（あーあ、やっちゃったよ…。言われたのになあ。
エリザベス、ごめんね〜。）

と、彼女の半身も役目を終えたようで、無言で佳織の中に戻った。

『…ハア。』

(間違いなく、ばれたな。うちがペルソナ使いだって事が。)

これから動きにくくなるなあ…とぼやく。

「…ねえ、佳織。」

突然、座りこんでいたゆかりが話し掛けてきた。
声に戸惑いの色を見せながら。

しかし、佳織は振り向かず、一言。

『…ごめん、帰る。』

それだけ言って、屋上から飛び降りた。

「フフフ…、どうされましたかな？

何か、悩みがあまりのようだ。」

その日、佳織はベルベットルームに招かれた。

「佳織様、先日私は申しましたね。《関わるな》…と。」

「…それに関しては謝るよ。」

少し罪悪感を感じる。

（まあ、あつさり無視したから怒るよな…。）

『けどさ、あの時にうちが動かなきゃ、どうなってたか分かんないよ。』

（序盤からストーリーが変わったんだから。）

『…あ、ところでイゴール。』

エリザベスからイゴールに視線を移す。

『《アイツ》が出たっていう事は、桜はここに招いた？』

「桜様は、先程お帰り頂きました。」

…ちなみに案内人は、私ではなく、テオドアです。」

『…そっか。』

すると、エリザベスが突然ペルソナ全書を差し出してきた。

『…？』

「中をご覧下さい。」

彼女に促され、全書を開くと。

『――《オルフェウス》？』

「どうやら貴方のアルカナは、私共の予想以上の力ですな。」

『…うちも、このアルカナに関しては何も分かんないんだよ。ペルソナ全書って、他人のペルソナも記録可能なの？』

「いいえ、それは出来ません。」

ペルソナは心の仮面。他人のペルソナを扱うという事は即ち、他人の全てを知る…という事です。」

（うちも桜と全く同じペルソナを扱える…。
チャンス、かな。）

蒼の部屋で、佳織は決意する。

（向こうで見た映像の通りにはさせない。
アンタの、思い通りには…！）

こちらに来た以上は救える命は救う。
否、救いたいと向こうで思った。

『（なんとなく、分かった気がする。）
…きっと、あの光景が《契約》だったんだ…。
そうなんだよね？』

影時間が明けて朝になり、いつの間にか戻った自室で、呟いた問いに答える者はいなかった。

負けない…絶対に！（後書き）

あああ、自分で話を書いてても、幾月には腹が立ちます！

今すぐにも、殴りたい…！

佳織も思っている筈。うん、きっとそうです。

病院かあ、注射嫌だなあ…。 (前書き)

今回は、覚醒イベントの後日談。

病院かあ、注射嫌だなあ…。

本日は晴天なり、しかし佳織の心中は荒れ模様。半径2メートル以内には無闇に入るべからず。

(あー！イライラする〜！)

寝不足+昨日のシャドウの一件があり、佳織は朝から機嫌が相当悪かった。

近くに人がいれば、冷たい空気にいたたまれなくなり、遠くに離れるだろう。

『…ファルロス……』

この世界に、うちを招いた張本人。うちは起きてから、ずっとアイツの事を考えていた。

(桜にも、会ってるんだらうな…。)

ゲームでは主人公としてプレイヤーが操作するが、ここでは違う。

『やっぱり、想定外の事態の対処方法とか、色々と考えないと…』

トーストを加えながら、学校の準備をする。

(今日から1週間、桜は来ない。)

しかし、その間は恐らくゆかりはもちろん、真田・美鶴といったS・E・E・Sのメンバーから声を掛けられる可能性が高い。

『もしくは、あの理事長から直接勧誘…とか。
(うわ、想像しただけで気色悪っ!)』

うがーっ！と頭を抱えて叫ぶ。

と、壁に掛けられた時計が目に入り、思わず石化。

『ち…遅刻ー！ー！』

朝から安息庵には、佳織の叫びが木霊したという。

キーンコーン、カー…ガラァッ！

『ゼエ、ハア…ハア。間に合った…!』

ヨロヨロと自分の席にたどり着き、机に突っ伏す。

「おー、佳織ツチてば、今日も全力疾走してきたのかよ?」

『…ああ、順平か…。今忙しいんだけど。』

「ちょっと!?!昨日はマトモに会話してくれたじゃん!」

ゴスツ!

鈍い音が教室に響く。

うちが分厚い辞書の側面で1発お見舞いしたんだ。

『そのニヤケ顔がムカつく。』

「何その理不尽!?!」

後、今のかなり痛かったんだけど!」

「コラそこ!授業が始められないじゃない!」

『す、すみません…。』

「伊織は後で反省文!」

『ええ〜!俺だけ!?!』

『(ごまあみろ。)』

午前中の授業が終わり、昼休みになった。

『…ふう。』

今日はコンビニで買った惣菜パンがお弁当。

(明日からは、ちゃんと作るうっつと。)

「あの、さ。佳織？」

『ふあ、ふうはあひい。』

(あ、ゆかり。)

『訳』

口一杯にパンを詰め込んでいるから、ろくに喋れない。

「ープツ、何その顔。

ハムスターみたいじゃない。」

深刻な顔をしていた、ゆかりの表情がほぐれる。

『(まあ、ちょっとネタのつもりだったんだけど。)

昨日は、ごめん。』

「…え？」

パンを飲み込んで、ゆかりに向き直る。

『暴れるだけ暴れて、先に帰って。』

「佳織…は、怖くなかった？」

周りには聞こえない程の小さな声で言っ、彼女は俯く。
握られた拳は、微かに震えていた。

「私は怖かったの。どうしようもなく、怖かった。」
「……………」

ゆかりの独白を、佳織は無言で聞き続ける。

「アイツを前にした時、震えが止まらなかった。あの子が戦っている時も、倒れた時も……。」

「…それが、普通なんだよ。」

その言葉に、ゆかりは顔を上げる。

佳織は椅子から立ち、握られた拳を両手で包む。

「ゆかりは、普通の可愛い女の子だから、あんなの相手にびびって当然。」

寧ろ、うちの方が異常かも。と、佳織は笑う。

「そだ。ゆかり、あの子は大丈夫なの？」

「うん。病院の先生の話だと、《意識が戻れば、後は体力の回復だけを考えれば良い。》って。」

「そうなんだ。ちゃんと話、したこと無かったから退院が楽しみ。」

(まあ、あの匂いと注射は嫌なんだけど。)

「何々、佳織ツチとゆかりツチ、なぐに話してんの？」

「あ、ちよつと順平！いきなり割り込んで来ないでよ！」

『まあ、いいんじゃないかな？』

(空気詠み人知らずだし。)

「佳織ツチ…！」

「佳織、アンタ、どっちの味方なのよ？」

『へ？中立。』

さらつと答えて、再びパンにかじりつく。

『ふおひいうか、ひゅんへい、ふあんふえひいひゅんふあ？』

(というか、順平、反省文は？)

「うげ…。」

『(ムグムグ…。)

その顔だと、書いてないんだ？』

その後、職員室では鳥海先生に小言をくらう順平がいたとか。

病院かあ、注射嫌だなあ…。 (後書き)

授業中って、どうしても眠くなります…。

某アニメみたいに、寝ててもチヨークは飛びませんけど。

うちはいつでも、猪突猛進！（前書き）

すみません！以前投稿したのがミス在りだったので、修正しました！

うちはいつでも、猪突猛進！

あれから、1週間。

無事に桜も退院して、今日から学校に来ている。

(ゆかりには、うちの事まだ伏せて欲しいって言ったけど。)

化学という名のオカルト授業を聞き流し、放課後の予定をメモ用紙に書いていく。

(とにかく、今日は速攻で安息庵に帰って適当に時間潰そう。もし桜と一緒に捕まったら……どうしよう。)

少なくとも、S・E・E・Sには入部だけはしない。

(監視カメラ付きの部屋なんかでゆっくり出来るかっての！)

寧ろ、今の安息庵の方が住み心地が良い。

それに今の時期に入部すれば、確実に予定が全て水の泡になってしまふ。

キーンコーン…

(よし、学校終わりっ！)

用具を鞆に叩き込み、ゆかりと桜に気づかれないように逃走した。

佳織が教室から出て、10分後。

ガラッ！コツコツ…。

「岳羽達、今日の夜、4階の作戦室に来てくれ。」

「あ、はい。」

「(桐条先輩…だったよね。何の用なのかな?)」

「…岳羽、高瀬はどうした?」

「佳織なら…、え…あれ?もう帰ったのかな…。」

友人の姿が見えずに困惑するゆかりだったが、それ以上に困惑して

いたのは、突然教室に入って来た美鶴にびっくりしたクラスメイト達だった。

『ただいまです！森本さん！』

「あらあ、どうしたの佳織ちゃん？凄く慌てているけど？」

『ちょっと夜まで、出掛けて来ますね！』

「あら、気をつけてね。行ってらっしゃい。」

『はい、行ってきますー！』

ーバンッ！

『うわっ！ーっ、危ないなっあ！』

不良の溜まり場である、ポートアイランドの路地裏。

現在、佳織は十数人の不良に囲まれて、ちょっとピンチになっていた。

『アンタら、最低だよな。』

『ーか、アホの極みじゃない？』

「んだと、このクソガキ！」

「テメエ、今の状況が分かってんのか！？」

(…あー、うっさいなあ。

弱い犬ほど、よく吠える、ってか。)

自分より20〜30センチ大きい不良達に怒鳴られても、佳織は顔をしかめるだけ。

そもそも、事の発端は下校の時に見た光景からだった。

(さつさと帰るっとな。

…ん?)

ブツブツ言いながら歩いていると、駅の周辺から男達の怒鳴り声が聞こえた。

(…カツアゲ?本っ当に、最近の不良は…!?)

「テメエ、ふざけんなよ!ああ!？」

「い、嫌です!貴方達も…いい加減、か、帰って下さい!」

壁際に数人の不良。

しかし問題はそこではなく、怯えた老婆を背中に庇っている少女。

(な…。風花!?)

だった。

呆気を取られていると、不良の聲がますます荒くなる。

(あ、マズいな。)

そして、足は無意識の内に走り出し。

「1度、痛い目見てみねえと分」とおーっ!』ぐああ!？」
思い切って、側頭部に飛び蹴り1発。

男は、完全な不意打ちを見事に喰らって、路面を転がっていった。

『おお、決まるもんだね。』

「なんだ！テメエ！？」

『あーハイハイ。騒がないの。』

うちは、ただの通りすがりの女子高生。』

「テメエ、潰すぞ！」

『…ハッ！やれるもんならやってみろ。』

思わず火に油を注ぐような事を言う。

結果的に、キレた不良達はターゲットをこちらに変更したらしく、その場はアースの力も借りて路地裏まで誘導。

『（で、一時的に姿を見失った隙を突いて用具だけ邪魔だから置きにいったんだよ。）』

繰り返される攻撃を見切りながら避けるが、多勢に無勢。

（ちよっと、キツくなってきた…！）

「ウラアッ！」

『チッ！』

ガラーン！ガラガラ…。

（…うわ、鉄パイプ！？なんつう、大人気ない！）

業を煮やしたのか、不良の数人が武器を持ち出してきた。

(これはヤバい。

…こっとなったら、アースの召喚とかしちやあつかない！)

「消えやがれ！！」

『…アー、』

覚悟を決め、拳を形作ったその時。

「何やってんだ…！テメエらは…！」

ドガアツ！！

「俺の後輩に、手を出さないで貰おうか！」

バキツ！！

『……………！！？』

(嘘、どうしてこの2人が…！！) 『』

——心臓の鼓動が、半端無く速い。

臙脂色のコートに、目深にニット帽を被った男。

短く刈られた銀髪に、赤いノースリーブベストを着た男。

「（荒垣先輩に…真田先輩…。）」

「チツ、女相手に獲物アリたあな…。」

「シンジ、行くぞ。」

突然現れた2人に、不良達にも動揺が走った。

「オイ、ヤベエぞ…！」

「月高の荒垣に、真田か！」

「びびんじゃねえ、こつちには何人いる！」

『（…確かに、この2人は強いけど、いくらなんでも…！）』

そこまで考えて、うちは気づいた。

荒垣先輩の、細い目が更に細められ、真田先輩の拳に、異様に力が込められている事に。

何も言わないけど、なんとなく分かった。

——今の2人は、怒っている。

（…負ける筈がない。

今の2人は最強なんだ。）

佳織が1人、突っ立っている目の前で、2人は不良を伸していく。

荒垣に背後から振り下ろされる鉄パイプを、真田が受け止めて相手を殴り飛ばす。

また、横からナイフで真田に迫る不良を、荒垣が頭突きでぶっ飛ばす。

（…すご。先輩達の独壇場じゃん！）

そして、うちの予想通り。

先輩達の凄まじいコンビンーションに、ただの不良が適う筈が無く、
下らない捨て台詞を残して逃げを行った。

うちはいつでも、猪突猛進！（後書き）

佳織は血の気が多い子なんですネ。

荒垣先輩達、格好いいです！

口は災いの元…？（前書き）

美鶴先輩って、キレた時とか怖いですよね。
ブフ系のスキルが飛んで来そう…。

あるいは、レイピア？

口は災いの元…？

「アンタ、本っ当に何考えてるのよ!」

『いや、気づいたら蹴り飛ばしてたの!あれは不可抗力!』

「だからって、なんで1人で相手しようとか考えるの!？」

『…ごめん。』

今うちは、カツアゲ騒動を聞いてご立腹のゆかりから、厳しいお説教を受けている。

なんでこうなったかって？

数時間くらい前のカツアゲ騒動の後に、怪我してたのを真田先輩に見つかってしまい、巖戸台分寮に応急処置って事で引っ張って来られてしまったから。

『平気だったのに…。いだだ痛いつて!』

「つつさいわよ!」

ベシッ!

『いдаあつ!』

「自業自得だぞ、高瀬。」

骨が折れていたらしい左腕を、添え木と包帯でギリギリとキツく巻かれる。

『うう、真田先輩まで冷たい……。』

完全に傍観を決め込んでいる真田に、佳織は非難の視線を送る。

しかし、送られている本人は、どこ吹く風である。

「帰ったか、明彦。……。！彼女は……。」

(あああ…マズい！なんかずっと先まで予測出来ちゃただけ！)

上から降りてきた美鶴先輩の驚きを含んだ声に、うちは思わず視線を逸らす。

「美鶴か。不良に絡まれているのを助けたついでに、連れて来たんだ。」

「…不良だと？」

『(…げ。)』

「先輩、聞いて下さいよ！」

佳織ったら『わーわー！何も無いです！無いですから！』佳織!？」

慌ててゆかりの言葉を遮るが、時既に遅し。

美鶴の後ろには、彼女のペルソナ《ペンテシレア》の姿が見え隠れしたとか。

「…お年寄りを助ける心は認めるが、何人もの不良達に単身挑む行動は感心しないな。」

「まあ、今日は遅いから、もう帰った方が良さだろう。」

「こんな真似、もうしないでよ！」

結局、ゆかりと真田先輩が全部事情を話してしまい、うちは美鶴先輩とゆかりの2人からお説教を受ける羽目になってしまった。

ちなみに、真田先輩に気になっていた《どうしてあの場所にいたのか》と質問したら…

「ああ、シンジに会っていてな…帰ろうとしたら、お前の声が聞こえたんだ。」

シンジが「変だ」って言うから行ったらあの状況だった訳だ。」

なんだとか。

ちなみに、解放されたのが午後7時。病院にまでしつかりと連行されたから、こんな時間になってしまった。

『帰りました〜。』

「あ、聞いたわよ佳織ちゃん！」

(…うわあ、お説教は勘弁して下さいいい！)

凄いい勢いで走って来た森本さんにまで説教されるかと、若干身構えるうち。

しかし。

「もう…！心配したのよ！」

女の子が、不良相手に蹴り入れたりしちゃ駄目じゃない！」

『森本さん…。』

うちは、森本さんに抱き締められていた。

声が少しだけ震えていて、心配させてしまった事に罪悪感が募る。どうやら森本さんは、うちが帰って来るまでの間、ずっと待っていてくれたらしい。

そして、唐突に森本さんは話し出した。

「おばさんね、子供がいたの。佳織ちゃんと同じくらいの娘だったわ。

休日の朝、《明日は大会だから調整しに行ってきます！》…そう言っ
って元気に部活しに行ったわ。

けど、娘は帰って来なかったの。」

『え…？』

「下校中、誘拐されそうになっていた男の子を助けようとして…犯人に…射殺されたの。」

後で、その男の子から聞いたんだけどね。」

『——！』

「…ごめんなさいね。」

おばさん、佳織ちゃんを、ずっと死んだ娘に重ねてたの。」

身勝手よね。と、森本さんは笑う。

『…じゃ、ないです。』

「え？」

『身勝手じゃないです…！』

「ごめんなさい。本当にごめんなさい…。」

やっと気づいた。

森本さんが、初めて会った日から、どうしてあんなに気遣ってくれていたのか。

（娘さんの事が、忘れられなかったんだ…。）

『森本さん…一つ、お願いしても、良いですか？』

「何？」

会って1ヶ月未満の子供がするには、おこがましい願いだと思う。

けど、《こっち》に家族のいないうちは今、無性に両親に会いたかった。

『もし、良かったら…うち森本さんの事を《母さん》って、呼んでも良いですか？』

「……………」

考える素振りの森本さん。

『あ、すみません！』

やっぱり、今のお願いは無しで「佳織ちゃん。」

うちが慌てて両手を振っていると、森本さんが笑った。凄く、優しい笑顔で。

「ありがとうね。」

私も、こんなに可愛い娘が出来て…嬉しいわ。」

『…森本さん…。』

ふわ、と森本さんの手が頭を撫でる。

小さい頃に、母さんに撫でて貰った時の感覚が蘇ってきた。

「これからも、宜しくね。《佳織》。」

『…っ宜しく、母さん！』

少し泣きそうな笑顔で、佳織は《母》に笑った。

口は災いの元…？（後書き）

少し間の空いた更新でした。

今回は、心配した人達との会話オンリーで。

森本さん、佳織の事は凄く気遣ってくれて…私も嬉しい限りです！

居眠りは、災いの元。(前書き)

うどんとラーメンと蕎麦。

皆さんなら、どれを取ります？

居眠りは、災いの元。

夢を見た。

だけど、夢だとは思えないほどリアルで、

恐ろしかった。

『っーあ…、うち…』

飛び起きて、数秒くらいは意識がはっきりしなかった。ただ、部屋だと分かると凄く安心する。

『夢…だよね？』

視線をさまよわせ、やっと頭が正常に働き始める。

(あんなの、…?)

しかし、思い出そうとすると霧が掛かったかのように曖昧になり、思い出せない。

『とにかく、学校…』

コンコン。

『…誰?』

扉を開けると。

「…佳織ちゃん、大丈夫? 顔色悪いわよ。」

『あ、森本さ…母さん。』

そこには、心配そうな顔をした《母さん》。

『大丈夫。寝不足なだけだから。』

「そう? 今日日曜日なんだから、ゆっくり休んでね。」

『(あ、そうだった。)

うん、分かった。』

と、母さんが、何か持っているのに気づいた。

『それ…』

「ああ、これ？」

うちに見せてくれたのは。

『《巖戸台駅大食い大会…?》』

そんなチラシ。

内容は

《5月の半ばに巖戸台駅でラーメンの大食い大会をやる。》
という物で、参加者の年齢は10代限り、最も大食いだと審判が降りた人には賞金5万円。

『なんともまあ…。』

ん…？母さん、チラシ持って来たって事は、まさか…。』

出ろって事？と視線で聞いてみる。

「興味あるかなって思って『うち出ないよ？』あら、残念。」

なんか、本当に自由奔放。

『フアアアア…眠い。』

「おー、わりーな〜、佳織ツチ！」

午後2時。

はがくれの前で大あくびしていたら、順平が来た。

『順平、今何時だと思ってんの？』

あの後、すぐ電話がきて

「佳織ツチ〜、朝飯まだだから奢って！」

とか言い出すから、

(何言ってるんだコイツ。)

って思ったけど、どうやら桜も来るらしいから、会いたくて来たんだけど…。

『待ち合わせから3時間…遅れ過ぎだバカ!』

横に桜がいるから、軽めにスパン！と頭を叩く。

「いでっ！佳織ツチきつい！」

俺の遅刻には、ちゃんと理由があるの！」

「…でも順平、完全に寝てたよね。お昼過ぎまで。」

ボソツと呟いた桜の言葉はしっかりと聞こえた。(同時に、順平が血相変えて慌てだした。)

『…ほっほっ、午前中に人を呼び出して、奢れって言って…良いご身分だねえ順平くん?』

自分でも分かるくらいの、黒いオーラを出してみる。

案の定、びびったらしい順平が

「うわ、悪かったって!」
とか言ってるけど知らん。

うちを待たせた罪は重いよ…順平?

『っぷはー、じちそつをまー!』

「……………」

「佳織って、よく食べるんだね。」

カウンター席に座ったうちの前には、はがくれの《特製ラーメン》
丼が5個重なっていた。

『あはは、折角順平が奢ってくれるんだしね!』

順平、サンキュー!と晴れやかに桜の隣に座る順平(燃え尽きてる)
に言う。

なんか順平が

「いや、おかしいだろ。俺以上に食い過ぎだよ…。特製の大盛り5
杯目って…。」

とか言ってるのは聞こえない。

ちなみに、順平の財布のHPは0なんだとな

桜と仲良くなれて、ご飯も食べれて、一石二鳥な1日だったね。

居眠りは、災いの元。 (後書き)

私は蕎麦派なんです！

ラーメンの醤油も捨てがたいんですけどね。

企業機密なんです！（前書き）

今回は、佳織のマシニングトークをお楽しみ下さい。
ついでに、順平のバカっぷりも。

企業機密なんです！

…いきなりだけど。

逃げてても良いですかっ！？

(ああ…。やだよ、何この複雑な空気は！)

順平と桜とラーメンを食べた後思いもよらぬ事態となりました。
遂に、S・E・E・Sに勧誘されちゃったんだよ。

はぐれを出た所で、待ち構えていたらしい真田先輩と美鶴先輩に
捕まって…巖戸台分寮の作戦室に。

全員が集まっていて、桜と順平は入部決定らしく(当然だよ)1人
でも部員が多い方が助かるとかで、かれこれ1時間は説明されてま
す。

「…という訳なんだ。」

私達にしか、影時間に巣くうシャドウは倒せない。

高瀬、協力してくれないか？」

『……………』

「美鶴くんの言う通りさ。我々には、ペルソナ使いとしての…《使命》がある。」

…キミにも手伝って欲しいんだよ。」

理事長―幾月が滅茶苦茶胡散臭い笑顔で言う。

すみません。その顔、切り刻んで良いですか？

『お話は、なんとなく分かりました。（嘘）

でも、シャドウ…ですか？あの日みたいなのと、戦えと？』

頷く美鶴。

『…（虫酸が走るなあ。）

誠にすみませんが、うちは正規の部員にはなりたくありません。』

そう言った瞬間、順平が立ち上がった。

「なんでだよ！話聞いただろ！俺達にしか『出来ない事だとしても、うちはやらない。』佳織…！』

表情を完全に消して、佳織は美鶴に向き直る。

（こんな事、言っちゃ悪いんだけどね。）

『うちが皆と同じだって言うのなら、それは違いますよ。

そもそも、ずっと戦ってきたけど、部員が足りないから手伝って欲しい？…随分と図々しい頼みじゃないですか。』

皆が（幾月以外だけど）

「信じられない。」

という顔をする中、佳織は更に言葉を紡ぐ。

まあ、そりゃそうか。

1年の後輩が、声にドスを効かせて、威圧的に喋りたい事喋ってるんだもんね。

『そもそも、あんな化け物と戦って命の保証はあるんですか？』

真田先輩も美鶴先輩も理事長も…随分と自分勝手な方達なんですね。会って間もない後輩3人に《命を懸けて戦え》なんて、普通なら言いませんよ？』

余りの言葉に、美鶴・真田・ゆかりが絶句する。

『それに、うちには《絶対にやらなければいけない事》があるんです。それが、最優先ですね。』

『どうしても駄目なのか…？』

『（駄目とは言っていないのに…ハア。）』

正規の部員にはなりませんけど補欠扱いでなら。けど、幾つか条件があります。』

佳織の言葉に、俯き気味の顔を上げる美鶴。

『1、必ず事前に連絡を下さい。』

2、勝手に正規扱いしないで下さい。』

3、現住居は絶対に変えません。

この3つが、補欠要員として先輩達の言う《シャドウ討伐》に協力する条件です。』

「いやしかし、それでは…「良いじゃないか、美鶴くん。」理事長…！」

(…まあ、交渉成立?)

『…理事長、忘れないで下さいね。

顧問の理事長がボケたら、話になりませんから。』

半ば睨むようにして、幾月に顔を向ける。

「勿論。では、これからは宜しく、高瀬くん。」

『(この狸…!)』

お願いします、先輩達。それに…桜達。』

「お、おう。」

「うん！宜しく、佳織。」

「…宜しく。」

「ちょっと、佳織！」

「ん…ゆかり？」

話も纏まり、さあ帰ろうと意気込んだ佳織を呼び止めたのは、ゆかりだった。

「どうして、桐条先輩達にあんなキツイ事言ったの！
幾ら何でも限度があるわよ！」

「…人の命は、軽い物じゃないから。」

「そんなの分かってるわよ。」

「ただ、ゆかり。何の為に戦う？」…え？」

玄関の前で、佳織は立ち止まる。

そして、問う。答えを知りながら。

「…うちには、自分勝手な理由がある。凄く重い、自分勝手な理由がね。ゆかりも、あるでしょ？」

「…私は、」

口を開いて、閉じる。

言葉を選ぶように、探し求めるように。

「まあ、今はいいからさ、気が向いたら教えて！」

じゃっあね。と言って、佳織は帰った。

企業機密なんです！（後書き）

守るって決めた以上、佳織はやりますよ。
誰が敵になっても。

初！タルタロス（前書き）

タイトル通りです。

初！タルタロス

『えーっと…どゆ事？』

「うん、だからね、桐条先輩が佳織にも生徒会に入って欲しいって、私も入る事にしたよ？」

『いやいや桜、うちが聞きたいのは、それとは別、というか、その前！』

「え？えーっと…ねえ。何だったっけ？」

（ガクツ！

この子のこれは天然！？）

『いやだから、タルタロス。タルタロスだって！』

「あ、そうだった。

それでね、佳織にも戦闘慣れして欲しいって。

今日の深夜11時に、寮に来てね。」

『ああハイ、さいですか。

了解しましたよ…。。』

（…肝心な事聞けてない。）

実は、うちが若干疲れてるのには、訳がある。

「《本日4月21日、晴れ。タルタロスで災難が起きるでしょう。》
「《》

なんて、悪戯メールみたいなのが今朝来た。

……エリザベスから。

《どういう事?》って返信したら、次はこつだ。

「《本日、タルタロスにおいでの際は、愚弟に会って頂きたいのです。》
「《》

なんてのが。

補足説明すると、エリザベスには弟がいる。

名前はテオドア。通称テオ。

姉もいるけど、それはまたの機会に。

(しっかし、変だなあ…。

テオに会う＝災難が起きるってのは、どうにも分からん。
(

なんでか聞いても、返信来ないし。

勧誘されて以来、なんか順平が態度変だし。

まあ、原因は分かるから良いけど。

そして、深夜11時。

「ああ、来たか！」

『はい。一応、武器(?)は持って来たんですけどね。』

寮の前には、真田先輩や他の皆が。

真田先輩なんか、目がキラキラしてるよ…。

「どれどれ、って、何これ!？」

『うん?金鎚。』

堂々と武器を部屋に置いてOKな皆と違い、そもいかない佳織が
持って来たのは、工事現場で使われるような大きな金鎚。

『切り裂くのは無理でも、撲殺は出来そうだし。』

「…いや、金鎚はどうかと思っぞ、高瀬。」

『そうですね？』

首を縦に振る美鶴先輩。

ちよつとシヨック。

「まあ、良いんじゃないか？

次までには、黒沢さんの所で武器を見繕えば良いしな。」

『真田先輩。うち、安息庵には持って帰れませんから。

あそこ玄関に金属探知機があるんですよ。

せいぜい、金錠くらいで限界です。』

なんか片手でシャドーボクシングしてる真田先輩にツッコミを入れる。

「まあ、高瀬の武器は今後考えよう。

とにかく、出発するぞ。」

11時59分、月光館学園正門前。

『…桐条先輩、ここって、どう見ても学校…ですよ？』

知っているけど知らない振り。意外と楽しい。

「ああ。ここが目的地だ。」

瞬間、針が深夜0時を指した。

——世界が、変わる。

《さあ、始まるよ…。》

『——！』

世界が薄暗い緑色に染まり、建物からは血のような赤い液体が流れる。

不気味な程に月が大きく見え、彼ら以外の生物の気配は途絶える。

校舎が、地に沈む。

沈むのと入れ替わってそびえ立って行くのは、複雑に絡み合った何本もの塔。

『うわ…。』

(前は気にする余裕無かったけど、これは確かに気味悪い。)

影時間に、タルタロスか。』

「学校が…沈んだよね？」

「う、うん。タルタロスを見るのは初めてだから、びっくり…。」

「んな事より、俺達の学校どこに行っちゃまったんだよ!？」

様々な反応をする佳織達。

すると、美鶴が

「心配しなくて良い。」

影時間が過ぎれば、元に戻るさ。」

「あ、そっすか。」

「よし、じゃあ行「明彦は待機だ。」なっ、分かっている…!!」

勇んでタルタロスに入ろうとした真田を、美鶴が諫める。

結局、タルタロスには美鶴が先頭で入った。

『ワオ、すげっ!』

「なんだか、違う世界みたいだね。」

「おお、中もすげえな…。」

「幻想的な感じ…。」

「皆、聞いてくれ。」

ここはエントランス、まだシャドウは出ない。

今日は、明彦は待機、私も待機となる。」

『先輩。つまり、うちらで行けと?』

「ああ、私も入りたいのは山々だが、タルタロスが入る毎に構造が変わるからな。

バックアップがないと、危険なんだ。」

「さしあたって、探索でのリーダーを決めたい。」

「リーダー?つまりは、班長?

ハイハイ、俺、俺!」

『うちは桜が良いです!』

隣でやかましい順平をチョップで黙らせて、桜をビシッと指差す。

「ええ!女の子だぜ!?」

『それが何か問題ある?』

少なくとも、うちらの中で1番状況整理とか出来ると思っけど。』

「ああ、私も賛成だ。」

「俺もだな。」

神崎、探索のリーダーは、お前がやれ。」

「あ、はい。」

『んじゃ、頼むね。』

(さって、扉は…あった、あった。)

未だに何かブツブツ言ってる順平とか他は置いて、蒼く輝く扉の前に立って、意識を集中させる。

ーギイ。

(あ、というか桜も来るのかな?)

「お待ちしておりました。ようこそ、ベルベットルームへ。」

『よ、イゴールにエリザベス。』

で、来たは良いんだけど、エリザベス…テオに会って欲しいってだけで呼んだ訳じゃないんだよね？」

「その通りでございます。

しかし、アレもいた方が、何かと御説明し易いかと。」

そう言ったエリザベスが、多数ある扉の1つに目をやる。

すると、キィ…と音を立てて静かに扉が開く。

(ワオ！って違う！)

コツコツと革靴の音を響かせてエリザベスとは反対にイゴールの横についたのは、意外と長身な蒼い服に身を包んだベルボーイ。

『初めまして、で良いのかな？テオ。一応全員の事は知ってるから、自己紹介は無くても良いよ。』

「こちらこそ初めまして、佳織様。姉上よりお聞きしておりました。改めて、テオドアといいます。テオ、とお呼び下さい。」

『うん、桜共々、宜しくね。』

それから、桜が来る直前まで話をし、一旦うちはエントランスに戻った。

初！タルタロス（後書き）

…あの3人の中で、最強なのは一体誰なんでしょうね？

ちなみに、私の予想は。

1位…エリザベス

2位…マーガレット

3位…テオドア

なんですよ。

初！タルタロス 2（前書き）

今回は続・タルタロスです。

初！タルタロス 2

《4人共、聞こえるか？》

「わ、美鶴先輩ですか？

大丈夫です。聞こえますよ。」

今、こちらはタルタロスの1階にいる。

通信機を通じた美鶴先輩の声に桜が返事をする。

（というか、暗い。

こんなんで戦ってたんかい。皆すげーな。）

気づかれないように、こっそりと辺りをうろつく。

実際にゲームで見たのとは違って、進んでも壁に激突！なんて事は無いみたいで、ちょっぴり安心。

《とにかく、このフロアにいるシャドウを全て討伐して来てくれ。それから散開して、転送装置を見つuckerんだ。》

「分かりました。」

『頑張りま〜す！』

「おっし、やってやるぜ！

へへッ、腕が鳴るっつーかペルソナが鳴る？」

「了解です。

ハア、なんか勝手だなあ。」

ゆかりだけが暗い雰囲気になりながらも、佳織達は探索を開始した。

《前方に1体のシャドウ反応だ!》

「ーオルフェウス!」

桜が召喚器を構え、オルフェウスを召喚する。

(そういえば、桜って髪を下ろしたら、あんな感じかな?)

竖琴でシャドウを瞬殺する彼女のペルソナを見ながら、ぼんやりと考える。

《よくやった!更に探索を続けてくれ。》

「俺もやってやるぜ！」

《ヘルメス》！」

進んだ先に見つけた影2つに、順平が意気揚々と動く。

「手伝って、《イオ》！」

『ちょ、うちの出番が無いじゃんか！』

スキル2連続でシャドウが片付いた為に、佳織だけは棒立ち状態。

《まあ、そう気を落とすな高瀬。》

『う…、なんか真田先輩の気持ちわかりますよ…グスン。』

「半べそかくなって。まだいるだろ！」

『サンキュー…。』

でも順平に慰められるとか明日は雪だね。』

「俺のペルソナで、全部倒してやるぜー！」

『人の話も聞かないし。』

ブイツとそっぽを向く。

(さっさと片付けて帰ろう。)

しかし、現実には甘く無かった。

……ジャラ、ジャラ……。

聞こえたのは、重い《死》を導く、死神の足音……。

『ー！？っ、嘘だろ！？冗談止してよ！！』

《な、何だこれは！？

神碇達、今すぐ撤退しろ！逃げ！！》

急に様子の一変した佳織と美鶴に、他の3人は困惑する。
いや、何が迫っているのか、理解していない。

「…え？どうしたの佳織も桐条先輩も…何かへ『そんな事はどうぞも良い！早く転送装置見つけて！！』…佳織？」

(…急がないと、殺される！)

『はやつ…！！』

嫌という程の、殺気。

否、殺気よりなお重い、死の気配。

全身が警報を鳴らす中で、《ソレ》は見えた。

「な、何アレ…」

「あ、あ…」

「聞いてねえよ…こんなん…！」

桜が石のように固まり、ゆかりは恐怖に顔を歪め、順平は壁際まで後ずさる。

『皆っ…！逃げろ…！』

そんな時、なんとか足の動いた佳織は、気がついたら死神に向かって走っていた。

自殺行為。

それしか頭に浮かばず、尚も全身が警報を鳴らし、恐怖で動けなくなりそうなのに。

(なんで言う事聞かないんだ！この体はっ…！！)

勝手に桜の薙刀を奪って、足止めに動き続ける。

《高瀬！撤退しろ！》

桜達がエントランスに帰還したと思われる頃になっても、佳織は死神相手に時間稼ぎにもならない足掻きをしていた。

『うち、だって逃げ、たいですよ…！けど、体が言う事聞かないんです…！！』

(うちは逃げようとした！したのに、どうしてっ！？)

まるで、死神に引き寄せられているかのように。

今の佳織の体は、自らの意志を無視して動く。

(っ…いい加減にしてよ！)

死にたくないのに！やられる訳にはいかないのに！)

——お忘れ無きよう…佳織様。 特異にも、限界はあります。

——桜様より尚…佳織様、貴方には《可能性》があります。

——ご自分を信じる事ですな。諦めなさるな。

『——！（そうだ、諦めたら駄目じゃん。）

…力を貸して、アース！』

一瞬で瞳に覇気が蘇り、自分を鼓舞して一旦後ろに下がる。
不思議と、体は動かせた。

ホルスターから召喚器を抜き取り、右こめかみを撃ち抜く。

『アース、時間…できるだけ稼いで！』

言っちゃ否や、佳織は声を張り上げる。

『桐条先輩、転送装置ってどこですか!?!』

《ここから通路を直進に、突き当たりを右だ!》

『了解! 帰還します!』

背後のアースを見やって、それから全速力で駆け出した。

『っ、あつた!』

転送装置を見つけて、走るスピードは殺さずに駆け込む。
視界が光に包まれ、再び目を開けた時には、エントランスにいた。

「か、佳織! 大丈夫!？」

平気だよね、怪我して無いよね!？」

「また無茶やって! アンタどれだけ私達に心配させる気!？」

姿を見せた佳織を見た瞬間に、桜とゆかりが駆け寄って来る。

『ごめん。自分でも無茶したとは思っ。』

ーパンッ！

『っ…桜…。』

乾いた音がエントランスに響く。

「あんなのに遭遇したから死んじゃったかもって…嫌な事しか浮かばなくて…薙刀は勝手に持ってくし…！バカッ…！」

涙声で半ば叫ぶように一気に言っ、俯く。

びっくりしていると、ギユ、と桜が抱きついてきた。

啜り泣く声が聞こえた佳織は頭を優しく撫でる。

「…確かに、な。

どうして撤退しなかつた？」

美鶴が歩み寄る。彼女は完全に目が据わっている。

『言い訳しか言えないですけど「高瀬、言っの方が身の為だ。美鶴を怒らせない方が良い。」「安心しろ。充分怒っているさ。」「はう

…。』

微妙にオルフェウスとペンテシレアの見える友人と先輩を前に、佳織はすっかり小さくなっってしまう。

「…信じらんねえ…」

シャドウに引き寄せられるとか、どういう事だよ…」

「だから私の薙刀を取った時、あんなに乱暴だったんだ…」

「今後は、高瀬の隣に誰か1人はつける。

命を落とされては困るからな。」

「すみませんでした…。反省します。」

仁王立ちする美鶴に、正座して謝る。

（まあ、あの時は死ぬかと本気で思ったし。

……怖かったあああ！）

それからも女子3人に説教されながら、佳織はなんとか安息庵に帰った。

（…しまった、タルタロスに金鎚忘れた！）

初！タルタロス 2（後書き）

どうしてタルタロスってあんなに大きいんでしょうね…？

人間関係って、大事だよな。（前書き）

最近の授業は7割を寝て過ごす私です。（笑）

佳織はそこまで寝ないんですけどね。

人間関係って、大事だよな。

）
）
）
）

『へっくしん!…眠い。』

えー、皆さん。お早う御座います。

朝っぱらからモノレール内で船漕いでた佳織です。

…眠くて死にそうです。

）
）
…

『あ、終わった。』

ピッ。

ん？何やってるかって？

ウォー○マンで音楽聞いてたんだ。

曲は《Danger zorn》。

ゲームでは女主人公をプレイすると、タルタロスの番人戦で聞ける。

ちなみに、コレは向こうのなんだけど…なんでかあった。

気にしたら負け。

『あー眠い。（もう授業で寝ようかな…。』

「ーだから歴史の流れは、こうなった訳。じゃあ今日はここまでね。」

早く戦国に入りたいよ…。」

『ーZZZZZZ…。』

「…佳織、佳織ってば！
もう授業終わったよ！」

ーガバツ！

『マジ！？…寝ちゃったよ…。』

案の定、昨日のタルタロスでの疲れからか、授業全部を寝過ごしたらしい。

「高瀬さん爆睡してたからね。」

ゆかりに起こされてポケットとっていると、えと誰だっけ？

『（…あ、思い出した。）
友近くん…だっけ？』

「おー、当たり前。」

に、話掛けられた。

「（ねえ、佳織大丈夫？昨日のタルタロスが祟ったんじゃない？）」

『あ、桜。』

（大丈夫、だと思っう。

寝不足なだけだし、うちは補欠要員だからね。）『

「（もう、しっかりしてよね！）」「

『（あははは、ごめんごめん。）』

「3人して何話てんの？」

『…内緒！』

「？」

首を傾げる友近に、うちは密かに笑った。

『よっしゃあ！フロストくんゲット！』

学校が終わってから、うちはポロニアンモールでクレームゲームに熱中していた。

取れたのは、ア○ラスの人気キャラ、《ジャックフロスト》のぬいぐるみ。

ふわふわのモコモコ。

…ヤバい。和むわコレ。

ムギユーっを抱いて頬ずりする。

『ついでに、もう1個だけ頂いて行きますか。』

結果的にクレームゲームに1、000円費やし、それでもホクホクしながら佳織は帰った。

『おいしー！母さん、コレ美味しいよ！』

夜7時、食事の栄養面を心配した母さんが1人でも手軽に作れるレシピを大量に持って来た。

…うちの分らしい、ホワイトシチューを鍋ごと持って。

「良かった。佳織の好み、まだ分からなかったからね。」

『でも、うちの好きな味だよ。

…うん、美味しい！』

とにかく腹ペコのうちは、只今おかわり3杯目。

勢いは止まらないよ！

『母さん、おかわり〜！』

シチューの皿を出すうちを母さんは凄く優しい目で見ていた。

『ぶはー、食べ過ぎた！』

ゲフ、とゲップが出る。

流石に調子こいての5杯はキツかった。

く
く
く

『んあ？電話？』

ピッ。

『はい、高瀬です。』

「《ああ、高瀬か？》」

『あれ、真田先輩、どうしたんです？』

「《いや、お前にも知らせておこうと思ってな。

医者から一時的に許可が下りたから、1度試しに付き合ってくれな
いか？》」

『…あのまさか、今日行くんですか？タルタロスに。』

内心、違って欲しいと思っても、真田先輩は見事に嬉しそうな声を
出した。

くそう、この戦闘バカめ。

『ハア、分かりましたよ。

けど、桐条先輩にも言っておりますか？』

「《…いや。》」

『じゃあ駄目です。

腕で済まなかったら、うちが大目玉ですし。』

昨日あれだけ怒らたんだから、もうゴリゴリだよ。

「《そうか…》」

そうだ、高瀬。明日は放課後、空けてくれ。《「

『え？なんでです？』」

「《美鶴が、お前に合う武器を選んでやれと言ってきたんだ。昨日話した、黒沢さんの所に行く。》「

『分かりました。』

「《校門前で待ち合わせだ。》「

『はい、では明日。』

「《ああ。》「

プツッ。

『武器、かあ…。』

確かに、金鎚は臨時だったから持って行ったんだけど…。

『やっぱり、刃物以外は無いよなあ…あそこ。』

もういつそのこと、真田先輩みたいに接近戦でボコ殴りにしようかな…。』

色々と考えながら、今日はベッドに意識を沈めた。

人間関係って、大事だよな。(後書き)

ジャックフロストって和みますよね！

ミックスレイドの《ジャックブラザーズ》はお気に入りです。

やっぱり日本人はコレでしょ！（前書き）

最近、気付きました。

銃弾って、単なる鉛だったんですね…！

やっぱり日本人はコレでしょ！

こんにちは、佳織です。

只今、先日の真田先輩からの約束通り、校門前で待機中。
なんだけど…。

(うー…気まずい。)

校門前でポツンと立っている女子がいれば、彼氏待ちで無い限り、当然目立つ。

ムズムズと、いたたまれなくなってきたので、真田先輩早よ来いや！と叫びたくなる。

「高瀬。」

『あ、真田先輩やっと来てくれましたね。』

視線が…ファンの女子からの視線が痛い！

…くそう、めげるな、佳織！

『桜の時も、似たような事になったんだろうなあ。…()
とりあえず早く行きましょう。』

「お前、元気無いな？」

『…()誰のせいだよ、誰の。()
いえ、気にしないで下さい。…』

そんなこんなで、ポロニアンモール、交番前。

「こんにちは、黒沢さん。」

コイツが、前に話した奴ですよ。」

『初めまして、高瀬佳織と言います。』

「ああ、俺は黒沢だ。話は聞いている。」

待ってる、と言われて黒沢さんを待つこと5分。様々な種類の武器が並べられた。

『うわぁ……。』

「好きなものを選びよ。代金は美鶴持ちらしいからな。」

『ええ！？うちだってお金くらい払いますよ！』

「良いから選べ。俺は外にいる。」

『はい……。』

『うーん、どうしようかな…』

「岳羽のように、弓は考えていないのか？」

『それも考えたんですけど、ゆかりは弓道部所属ですし…うちが付け焼き刃で弓を扱っても、意味がありませんよ。』

足手まといになりますし。と言って、再び武器を睨む。

『（うーん、剣とかも良いけど…順平と被るしなあ…。）
うーん？』

ふと、視界の端に置かれた武器が気になった。

『コレ…』

「ああ、最近になって入荷したんだ。それにするか？」

カウンターに置かれた中で、自然と惹かれた物を手に取ってみる。

『スゴ…じっくりっていうか、手の一部にしか思えない。』

うちが手に取ったのは日本刀。
結局被る事になるけど…。
まあ、いっか。

「それにするか？」

『はい。』

すると黒沢さん、うちの手から日本刀を奪って…ええ！？

「女性が扱うには少し長過ぎる。」

とか言っつて、奥に引っ込んでしまった。

『あの一、黒沢さん？』

待たされて、30分後。

「出来たぞ。」

渡された日本刀は、さっきより少し短くなっていた。

『え？なんで加工…。』

「持ってみる。」

『はい。つて、わぁ…。』

カウンターから取り上げると、さっきより軽く、腕や肩に掛かる負荷が少ないように思えた。

「それなら、キミでも扱える。」

『凄い…。有り難う御座います！』

思わず頭を下げる。

「いや、これくらいはな。特別課外活動部しかシャドウには対抗出来ない。

治安維持を目的とする本官は、キミ達が全力で戦う為の協力を惜しむつもりは無い。」

(か、かつこええー！)

『有り難う御座います！』

もう一度頭を下げると、黒沢さんから少し苦笑いが聞こえた。

「そう頭を下げないでくれ。当然だ。

…彼もあまり待たせるなよ。」

『はい！さようなら！』

「終わったか、高瀬。」

『終わりました!』

「選んだ武器は、日本刀か…。
扱えるのか?」

『大丈夫です。』

その為に、黒沢さんが加工もしてくれましたし。』

「そうか。」

そういえば、高瀬は安息庵には武器の持ち込みは出来ないんだよね?」

『持ち込もうとした所で、金属探知機に引っかかります。』

「よし。今日は俺が預かるとしよう。」

『あ、討伐の時だけ先輩が持って来てくれるんですか?』

「いや、美鶴に頼む。

金属探知機に引つかからないようなカバーでも付けて貰うぞ。」

『マジですか!』

「ああ。今度の探索時に、美鶴がアイツらに渡しておく。まあ、桐条グループなら、直ぐに作れるだろ。」

『有り難う御座います〜!』

それでは、うちは、ここで。』

「ああ。」

日本刀と真田に渡し、スキップしながら佳織は帰った。

『楽しみだなあ〜!』

やっぱり日本人はコレでしょ！（後書き）

そんなこんなで、日本刀に決定！

いやあ、持たせたかったですよ、日本刀。

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 1（前書き）

1週間ぶりの投稿です！

今回は長いので、いくつかに分けます。

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 1

（遂に、今日か…。）

4月が終わり、5月のゴールデンウィークが終わった。

ゴールデンウィークは、桜やゆかりと買い物したり、エリザベスの依頼を受けたりと忙しくも、充実した休みだったよ。

そして昨日…8日の夜。桜から連絡が入った。

「…満月の大型シャドウ討伐に、メンバーとして入って。」

返事は…当然、「承諾。」

電話を切った後、カレンダーに付けた《9日は大型シャドウ討伐》の印がやたらと強調されて見えた。

（とにかく、絶対に失敗は許されない。
シャドウはさっさと討伐しないと！）

「佳織、遅刻するわよ！」

『わわわわ、今行く！行くよ！』

「…行って来ます！」

この日の為に書いたシャドウ戦用のメモを握り締め、佳織は学校に登校した。

「佳織！お昼食べよう！」

『分かった。』

じゃ、ゆかりと桜の真ん中ピンポンパンポンあ放送。』

何が流れるかと思い、静かになる教室。

しかし、教師の声が聞こえる筈のスピーカーから聞こえたのは…

《2年F組の高瀬佳織さん。

生徒会室に来て下さい。》

静かながら落ち着いた、我らが美鶴先輩の…よりもよって、うちの呼び出しだった。

「「（佳織、何かした？）」「」

『（なんでハモるの！？』

うち何もしてないよ！？（』

「あら、佳織ツチってば何かしちゃったの〜？」

ギロツ！

ビクウツ！

『…ハア、してないよ。』

「そ、ソウデゴザイマスカ…。

（怖い！この人怖っ！）」

「まあ、桐条先輩が生徒会室に來いって言ってるんだし、行ったら
みたら？」

『うん、行ってくる。』

ガラガラ…

『失礼します。』

「ああ、来てくれたか。

突然、すまなかったな。」

『いえ、それはいいんですけど…呼び出したのは、どうしてですか

『?』

「それはな、「僕から説明するよ。「理事長…。」」

『(うげ、幾月!)』

『理事長、なんでいらっしやるんです?』

キーンコーンカーンコーン

「ゆかり、佳織どうしたんだろ…?」

「いくら何でも、あの子遅過ぎない?

(何かあったのかな…)」

ガラッ!

「席に着きなさい!授業を始めるわよ!」

「あ、鳥海先生!」

「何かしら?」

「高瀬さんって、どうしたんですか？」

「ああ、彼女ならー」

「本当に…いきなり、すまなかったな。」

『…いえ。』

() じゃあ学校に帰らせて下さい。『』

隣に座った美鶴には見えないように口を尖らせる佳織。

佳織がいるのは、先程までいた生徒会室ではなく、黒長い高級車ー
ーリムジンの後部座席。

『…なんだかなあ…。』

「ん？何か言ったか？」

『何も言ってますん。』

「そつか…。」

車内を沈黙が包む。

『(やる事無くて暇だよ…。)』

暫く、ボーッと窓から外を眺めていたが、高級シートの座り心地と揺れの無い静かな車内のせいで意識は睡魔にさらわれた。

― また、歌が聞こえる。

目を開くと、蒼が視界全体に広がる。

『…ベルベットルーム?』

「お待ちしておりました、佳織様。」

いつも通りペルソナ全書を携えてイゴールの隣に立っているエリザベス。

『エリザベス、どうして呼んだの?』

聞くと、彼女の持つ金色の目が少し細められる。

「貴方のアルカナについてお話を…と思ひまして。」

『ふうん、つて、あれ?』

ふと気づいた。

彼女の持つ、全書の《気配》が少し違う。

『ねえ、何かペルソナ全書違くない?』

強いて言うなら、ペルソナの数が。

「ええ、桜様が新たなペルソナを手に入れたので。」

『あ、そうなんだ。』

「《ジャックフロスト》・《ピクシー》の2体です。」

エリザベスは佳織に全書を渡し、納められたカードに手を翳すように促す。

言われた通りにするとーパキン、と澄んだ音がして、彼らが心に宿ったのを感じた。

『わあ……。』

「これで、桜様が新たに宿したペルソナは貴方も使用可能となります。」

それと、もう一つ……。」

『何?』

「以前、この部屋で初めて貴方のアルカナについてお話した時を、

覚えていますか？」

『うん、14番目の《混沌》でしょ。』

「何か、変わった事はありましたか？」

「―その言葉に、ハツとした。

思い出すのは、初めてタルタロス探索を行った、あの日の出来事。

（だけど…今ここで言っただけで良いのか…？）

迷ったが、思い切って口を開く。

『あるよ。

タルタロスに初めて入ったあの日の事…。』

「死神、ですね。」

『そう、いきなり出現した《刈り取る者》…いや、出現自体はいいんだけど…戦闘の事かな。

何か知ってる？知ってたら教えて。』

「申し訳ありません。

現時点では、なんとも言えないのです。」

『…《現時点では》？』

「ハッキリしているのは、満月のシャドウも、簡単には終わらない…ということですよ。」

その言葉に、違和感を覚える。

聞き返そうとした時、声が聞こえた。

「おやおや、どうやら長居し過ぎたようですな。それでは…。」

『ストップ、イゴール！』

『まだ聞きたいー』』

会話が強制終了させられ、意識は遠のいていった。

「高瀬、起きろ。」

『ん…、桐条先輩…？』

「着いたぞ、降りよう。」

『分かりました。』

リムジンのドアを開けてくれた運転手さんに、お礼を言って外に出

る。

最初は申し訳無いやら緊張やらで、お礼すら言えてなかったからね。礼儀は大切に！（お節介かな？）

『うわー…すごいな！』

（流石は、桐条グループ。パネエ。つか…ここってどこ？）

佳織が降り立った場所は、桐条の研究機関。

といっても、月光館学園の3分の2はありそうなバカでかい敷地面積に、重量がハンパない感じの鉄の門には圧倒される。

美鶴は門の横に設置されているインターホンに近づき、パネルに何か打ち込んでいく。

《こちら、桐条グループ、第2ラボです。》

「私だ。予定通り、彼女を連れて来た。」

《ペルソナ使いの、高瀬佳織様ですね。》

お待ち下さい、お通しします。》

門が開き、中から白衣の女性が現れる。

美鶴は女性と何か話しているが、佳織は思案に暮れて気づかない。

「高瀬！」

『はいっ！』

「…何を驚いているんだ？」

こちらだ、私達について来てくれ。」

『あ、はい！』

(桐条つて、どんだけ規模デカいの…?) 『』

美鶴と女性に連れられ、訪れたのは、どこことなく病院の診察室のよ
うな雰囲気、でも高級感漂う応接室だった。

『あのー…、桐条先輩？』

「来てもらった件はキミのペルソナ、そして体調を調べる為なんだ。」

「でも、うち至って健康なんですけど…?」

「いや、そうは言っても、やはり心配なんだ。

タルタロス初探索の時から気になっていた事もあるからな…。
とにかく、まずは一通りの健康診断だ。

その後、色々聞きたいからな。」

「分かりました…。」

(色々ってなにさ!?)

それから、うちを待っていたのは病院の精密検査まんまの健康診断だった。

「はい、では次はレントゲン写真です。」

『こゝ、ここまで調べるんですか。』

「お時間をかけて、申し訳ありません。」

しかし、美鶴お嬢様より、《しっかりと頼む》と言われましたから。

はい、結構です。と言われて、レントゲンを撮る為の台から降りる。

『疲れたあ……。』

一気にこなすから、ちよつと疲労が溜まり気味。ポキポキと、肩を回す。

ついでに、腕時計で時間を確認すると既に午後4時。

「失礼する。高瀬、終わったか？」

『後3つだそうです。』

「そうか。終わったら研究員に案内させるから、最初に行った部屋に来てくれ。」

頼むぞ。と近くの研究員に一言告げて、美鶴は出て行った。

――それから30分。

「これで、全ての検査が終了となります。
お疲れ様でした。」

『はい、どうもありがとうございました。』

(終わったあああ…！)

んー！と大きく伸びをする。

「では、御案内します。」

女性研究員について行き、最初の部屋に戻って来た。

「美鶴お嬢様、お連れしました。」

「ああ、有り難う。」

座ったらどうだ？

目線で促されて、向かいのソファーに腰を下ろす。

すると、さっきの研究員さんが紅茶を出してくれた。
カモミールティーらしい。

香りを楽しんで、一口飲んでみると、本当に美味しい。

なんていうか、高級感溢れすぎて飲むのが勿体無い。

(…てか、美鶴先輩は毎日こんな高いもん飲んでるの…?)
かなり羨ましくなったり。

「安物の紅茶だが大丈夫か？」

『(こんな美味しい紅茶が安物!?)
凄く美味しいです!』

そうか。優しく先輩が笑う。
不覚にも、本気で一瞬見とれてしまったり。

(ヤバい、今更ながら、超嬉しくなってきた…!)

頭の中がお花畑状態。

そんなうちの心境を、知ってか知らずか、先輩は何やらファイルを
取り出した。

見間違えていなければ、その時の先輩の表情は一瞬曇っていた。

「コレを見てくれ。」

そして先輩に指し示された内容の文章を見て、
うちは気を引き締めなければならなくなった。

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 1（後書き）

補足説明しますと、桜の入院していた辰巳記念病院と、佳織のいるラボは別物で、「職場」と「寄宿舍」みたいな感じですよ。

ラボから何人かは医師として病院に勤務しています。

今作品は、色々と訳分からん設定があるかと思いますが、ご了承下さい。今更かよ！

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 2（前書き）

基本的に、大型シャドウ戦は3話位の予定です。

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 2

「コレを見てくれ。」

『え、コレ、ヤバくないですか？』

先輩が指し示した物のは、さっきの健康診断。

心拍数だけが、異常に高い数値を示している。
本来なら、入院しなければならぬような数値。

「何か、体に異変は無いのか？」

『特には何も。』

今だって、体に異変は感じられません。』

「そうか…。」

しかし、何故こんな心拍数で異常が無いんだ…。」

数値を見て考え込む先輩。

試しに胸に手を当てる。

が、やっぱり鼓動の速さはいつも通り。

「これから先、体に異常があると思ったら、すぐに言ってくれ。」

『あ、分かりました。』

うちが頷くと、先輩は静かにファイルを閉じた。

『？もう終わりですか？』

「いや、まだ聞きたい事はあるさ。

時間、大丈夫か？」

時計を見ると、午後5時。

『（うーん、母さんに連絡した方が良いかな…？）
話って、長くなりそうですか？』

「ああ、すまないが。

ご両親には連絡するか？」

『はい、母さんに連絡を。』

「分かった。」

携帯を取り出し、アドレス帳を開く。

プルルルル…。ガチャ。

『あ、もしもし母さん？』

《どうしたの？電話してくるなんて珍しいわね。》

『うん、今さ、学校の先輩と用があって出かけてるんだ。
だから、帰りは遅くなりそう。』

《そうなの？》

分かったけど、先輩に迷惑掛けちゃ駄目よ。《

『うん、それじゃ。』

《帰りは気をつけて帰って来るのよ。》

『はい。』

ピ。

『終わりました。』

「高瀬、帰りは送ろう。」

『ええっ！？いいですよ！

自分で帰れます！』

「いや、送らせてくれ。」

キミが、また何か面倒事に首を突っ込んだりしないようにな。」

『（う…、痛い所を…。）分かりました、御願います。』

「…さて、ここからが本題だ。」

高瀬、キミはタルタロス初探索の時、あのシャドウに《引き寄せられた》と言っていたが…具体的に教えてくれるか。」

『具体的…と言っても、タルタロスで話した通りなんです。

体が、うちの意思とは別に動いて、あの死神を攻撃した…って感じ
です。』

いつの間にか、先輩は紙にメモをしている。

（報告書かな？）

「では、それはいつからだっただん？」

『えっと、死神が姿を見せた瞬間からだっただ感じがします。』

「……………」

『あの、美鶴先輩？』

ポーン、ポーン…。

壁際の柱時計が、7時を知らせる。

「もうこんな時間か…。

長時間、付き合ってくれて有り難う。送ろう。」

コンコン。

「美鶴お嬢様。ご要望の物をお持ちしました。」

「そこに置いてくれるか。

高瀬、明彦から聞いたが、日本刀を選んだんだな。」

『はい、1番相性が良いと思ったので。』

「頼まれたカバーを付けておいた。

受け取ってほしい。」

『おお、かつこいい！』

日本刀のカバーは、肩から提げるのが可能な専用の袋だった。特殊な素材らしく、手触りが気持ち良い。

『流石、先輩！凄いです！』

有り難う御座います！』

「気に入るな。

これから、頼むぞ。」

『補欠ですけどね。頑張ります。』

「（正規メンバーになってくれそうではないな。）
そくだ。今日の大型シャドウ討伐は、どうするんだ？」

『行きますよ。桜にも頼まれていますから。』

「では、前回のように入寮の前で神崎達と合流してくれ。」

『了解です！』

帰りも、リムジンで送ってくれて、8時に安息庵に着いた。

『ただいまー！』

1人だから、返事は無いんだけどね。

『さて、影時間直後に寮玄関前に行くとして、ご飯作るかな。』

薄い紫のジャージに着替える。

ゴールデンウィーク時にショッピングで買った、お気に入り。今日の討伐も、この格好で行こうと。

『メニューは、白米に味噌汁、後はほうれん草のお浸しに…豚肉の生姜焼きでいいか。』

夜が更けて、深夜12時が迫る。

『母さんに見つかる訳にはいかないから、影時間になってから行く。』

カチ、カチ、カチ…。

空気が変わった。

背中には、柄の出した刀を背負って、あらかじめ開けて置いた窓に近づき、棹に足を掛ける。

『アース、宜しく!』

2階の窓から飛び出して、アースに乗って寮に向かった。

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 2（後書き）

次回は女教皇編ラスト。

鮮明に戦闘シーンを書けるように頑張ります！

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 3（前書き）

女教皇、プリーステス編。

今回で終わります！

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 3

影時間、巖戸台分寮前

玄関前で待機していた桜達は、各々武器の手入れをしていた。

「あ、来たよ！

ほら、2人共準備して！」

『お待たせ。待った？』

「ううん、私達も今出て来たところ。

今日は宜しく、佳織。」

『任せてよね、リーダー！

(弱点とか全部分かってるし。)(』

「おーい早く行こうぜ！」

先に進んだ順平が、ウズウズした様子で呼び掛ける。

「もう、順平ってば速すぎるわよ！

行く、桜、佳織！」

巖戸台駅に着いた4人は、後から来る美鶴を待つ。

『大型シャドウ…デカいんだろ〜ね。』

「そうだね、ちょっと緊張するかも。」

「それにしても、桐条先輩いつになったら来るんだ？」

順平が持ってきたコーラを飲み干す。

と、全員の耳に何かの走行音が聞こえた。

『（…噂をすれば、なんとやら。）』

こちらに向かって来たのは大型のバイク。

それは佳織達の前で止まり、乗っていた人物がヘルメットを外す。

「遅れてすまない。」

バイクを運転していたのは美鶴だった。

（あれ？バイクの免許って18からだっけ？）

「バ、バイク…。」

ゆかりがびっくりしているらしい。

そんな彼女に構わず、美鶴は話を進める。

「いいか、要点だけ言う。

情報のバックアップを、今日はここから行く。

君達の勝手はこれまで通りだ。シャドウの場所は、駅から少し行った列車の内部。

列車までは、線路を歩いて行ってくれ。」

『先輩、質問です。

他の列車に牽かれる…って事があります？』

「いや、影時間中は機械は全て動かない。列車も例外ではない。」

『なるほど。』

「や、でも、そのバイク…。」

「これは《特別製》だ。

では、情報は私が逐一伝える。――作戦開始だ！」

「はい！」

「了解ッス！」

『行ってきます！』

しばらく線路を進むと、怪しい列車が見えた。

『目標、確認であります！リーダー！』

「何その口調？」

『ぶー、ゆかり、乗ってくれてもいいじゃん。』

「あはは、早く行こう。」

1番始めに、ゆかりが梯子を登る。

けど、途中で微妙にヒラつくスカートを手で押さえて一言。

「順平、覗かないでよ。」

「…んな事しねえよ。」

『順平、今ちよっと、残念だと思ったでしょ？』

「桜、佳織。順平、ここに埋めて行こうか。」

「ええ！？」

『次の日の列車運行の迷惑になるから駄目だよ。』

埋めるなら場所変えよ?』

「佳織…何気に、ひどい事言ってる…。」

苦笑いする桜も、ゆかりに続いてモノレールに乗り込み佳織、順平と続いた。

モノレール、最後尾車両内

「これ、人間…つか乗客だよな?」
車両内にポツンと立つ赤い棺。

近くに寄って、じーっと観察する佳織。

ーガシャン!

いきなり全てのモノレールの扉が閉まった。

「あっ!」

『あ、閉じ込められた。』

《ーーどうした、何があった!》

「それが、閉じ込められたみたいで…。」

《シャドウの仕業だな。

確実に、君らに気づいているという事だ。

何が来るか分からない。

より一層、注意して進んでくれ。》

「りよ、了解です。」

『……………。』

「とにかく、先に進もう。

先頭は私で、後ろの左右にゆかりと順平。

佳織は、しんがりを。」

お互いに頷き合って陣形を組み、列車内を進んで行く。

1 両目は何事も無く進み、2 両目に差し掛かった所で、順平が構えを解いた。

「シャドウいねえじゃん。
なんだ…拍子抜けだよ。」

3両目で、ゆかりも不思議に思ったのか、車内を見回す。

「なんか、静かすぎない…?」

「先輩、シャドウ反応ってあります?」

《いや、いないな。

…!前方、気をつけろ!》

言葉が終わらぬ内に1体のシャドウ〔偽りの聖典〕が現れた。

「きゃっ!」

驚いたゆかりが小さく声を上げる。

「出やがったな!」

順平が慌てて剣を構えるがシャドウは彼らに見向きもせず背を向けて、更に奥の車両へ逃げて行く。

「ちよつ、コラッ！」

てつきり攻撃してくるかと思ったのか、順平が声を少し荒げ、後を追おうとする。

だが、美鶴は制止の声を掛ける。

《待て！敵の行動が妙だ。

イヤな予感がする。》

「そんな、追っかけないと逃がしちまうッスよ！」

《…神碇、現場の指揮は君だ。この状況…どう思う？》

考える桜。出した答えは、

「私は、冷静になるべきだと思います。」

《私も同意見だ。》

迂闊に追うべきでない。と美鶴も判断する。

そんな彼女達に業を煮やしたのか、

「いや、オレだけで。そこで見てろって、オレがどーんと倒してやっからさー！」

そう言つと、シャドウを追って順平は走り去ってしまった。

「あ、コラ、順平ッ！」

ゆかりが、順平の走り去った方向に足を一步踏み出す。

《危ない、後ろだ！》

美鶴の警告に反応が遅れたゆかりに、2体出現した偽りの聖典の1体が襲い掛かるかと迫る。

「ハアッ！」

『せいッ！』

だが、薙刀を構え間に割り込んだ桜がゆかりに迫ったシャドウを消す。

一方の残ったシャドウは、いつの間にか刀本体を袋から出し、抜刀した佳織が斬りつけて消滅させる。

「…すごい。」

瞬間的な2人の動きに、ゆかりは思わず賞賛する。

カチン。

刀を一振りして鞘に戻した佳織は、使った感触を思い出す。

(うん、良い感じ。)

「ゆかり、怪我は無い？」

「うん、大丈夫。有り難う2人共。」

『無事なら良いよ。』

さ、バカ順平を追っかけないと!』

その後、1両先でシャドウに囲まれている順平を見つけた。

「……いた!——順平!」

ゆかりが掛ける声にも気づかず順平は当たりもしない剣を振り続ける。

「オレがやってやるっつーの!コノツ、コノツ!」

「助けよう!」

『（コクン）』

アース、やるよ!《ジオ》!』

狙うは、「炎と氷のバランサー」。

アースの使えるスキルので1番強力なのは《利剣乱舞》。

後は皆と変わらない。

(怪しまれなくて済むから助かるね。)

アースが胸の前で交差した剣と斧を左右に振った瞬間、稲妻が落ちてバランスーは消滅。

《良いぞ、後2体だ!》

「ーリリム、《アギ》!」

桜もすぐにリリムを召喚。

「ダンシングハンド」を撃破。

すぐにラッシュをかけて、残りも消滅。

『ふー、片付いた。』

「順平、大丈夫?」

ゆかりの心配に、順平は

「なんだよ、オレ1人でもやれたっつーの。」

感謝すらしてないみたい。
これにはムカついた。

『あんな状況だったのに、1人で本当になんとか出来た？』

「当たり前だろ。」

ピキッ。

初期の順平は少し嫌い。
自信過剰になりすぎているから。

先頭車両へ足を進める際に順平の横をすり抜けて一言。

『さっきの順平の行動は、迷惑だった。』

「なっ…！」

一瞬、険悪になる空気。

「…もう行くっつ？」

場を取り繕う桜の言葉で、佳織達は再び先頭車両を目指した。

(ちょいとばかり、言い過ぎたかな。)

それから、列車が動き出して、追突する前に止めなければいけなくな
ったから、本格的に急ぐハメになった。

やっと先頭車両に到着。

この向こうに、女教皇のアルカナを持つ「プリーステス」がいる。

「全員、準備OK？」

「ばっちり。」

「…おう。」

『うん。』

《気を引き締めていけ。》

桜が、運転席の扉を一気に開け放つ。

プリーステスは、まるで自分の場だと言わんばかりに悠々と奥に鎮座し、髪は蛇のように機械に絡んだり、空中を漂ったりしている。

「うわ。こりゃ、スゲエな…。」

《時間が無い、急げ！》

残り6分。

プリーステスの攻撃を避けながら、召喚器を構える。

『（実際に戦うと面倒だなあ……。）
アース、《ジオ》！』

「佳織、どいて！ー！負けなんだからっ！
イオ、《ガル》！」

イオが祈ると、大気が渦巻き、プリーステスに襲い掛かる。

「オレもやってやる！
ヘルメス、《スラツシュ》！」

負けじと召喚されたヘルメスは翼を広げて勢い良く滑空。
大きなダメージを与える。

体制を崩したプリーステスに、桜が鋭い斬撃を繰り返す。

「ヤッ、ハアッ！」

一撃、もう一撃。

そしてその場で大きくジャンプしながら体を捻り、渾身の一撃を見舞う。

「ー！ダアッ！！」

！ー！ー！ー！

攻撃が上手く決まったのかプリーステスの体力は残り少ない。

《良いぞ、あと少しだ!》

「よっしゃあ、オレがとどめ決めてやるぜ!」

『(何かおかしい…。簡単すぎ?…まさか!)
駄目だ!動くなッ順平!』

佳織が焦って警告する。

虫の息かと思われたプリーステスは、戦闘の最中に召喚した「囁く
ティアラ」2体を自分の壁に出した。

…ように見えた。

ーギョルン!

「ぐあっ!」

《伊織!》

「順平!」

『(何?どうして…!)』

一瞬だった。

ティアラ2体を自らの中に取り込み、力を取り戻した他の髪が順平
を襲う。

当然後ろのうちらにも、それは届くわけで。

「「キヤアッ!」」

『うぐっ…!』

(強い。初期のレベルじゃない…!) 『

全員強く床に叩きつけられる。

《おい、しっかりしろ!あと2分しか無いぞ!》

『ぐっ、カハッ…。』

痛っ、ヤバい腕また折ったかな…。』

手について起き上がるうとするけど、そのせいで左腕に激痛が走る。

と、温かい熱が広がり、不意に痛みが引いた。

(…ゆかり?)

《ディア》の使えるゆかりかと思ったが、視界に入ったのは

『桜…。』

(そっか、ミックススライド…。) 『

力を込めて、立ち上がる。

『(この程度でへたれるか!)ありがとう、桜!』

（今アース以外で扱えるのは、ジャックフロストとピクシー。弱点攻められる訳でもないし、アースが妥当かな。）

『アース：何がなんでも倒すよ！』

『ー《ジオンガ》！！』

先刻の一撃より、ずっと威力の増した稲妻が、プリーステスを直撃。黒い霧になりながら、悲鳴をあげてプリーステスは消滅した。

『よし！』

（っ…あ！ブレーキ！）

『ヤバい！ブレーキどれ！？』

既に肉眼で視認可能な状況に、佳織は焦りまくる。

その時、運転席に桜が駆け寄り、手近なレバーを目一杯引く。

ギギギギイイーツ！！

列車の車輪が摩擦による火花を大量に散らす。慣性の力が働き、こけて前に転がる。

ゴンツッ！

『いだっ！』

やがて静かになった運転席で、最初に順平が立ち上がった。

「と…止まった？」

「みたい…。」

『いだだだだ…。』

「ちよつと佳織、大丈夫？ー」《ディア》。

『つつうー…たんこぶ出来たよ…。』

《おい、大丈夫か！？》

「なんとか…。」

「一部、大丈夫じゃない子がいますけど。」

「…レバー、合つてて良かったあ。」

『（なんか合図がほしかったよ。）』

うちのこぶも痛みが引いたところで、列車を降りるて帰還することになった。

「うわあ、随分ギリギリだったんだ…。」

前方の列車との距離は30センチしかなくて、よく間に合ったなっ
て思った。

「つか桜ツチ、なんでレバーが分かったんだよ？」

「女の感！」

「女の感って、フツーそういう時には使わないでしょ…。」

『結果オーライだから良いんでない？』

「つか、帰りに何か食わねえ？」

「あんだねえ、女の子はこんな時間に食べないっての。」

「コンビニくらいなら寄れるけど？」

「お、行こ行こ！」

『いたっ…。うちは先に帰るよ。』

「うん。有り難う、今日は助かったよ。」

『うちは殆ど動いてないよ。』

「じゃあね！」

大型シャドウ、残り10体。

満月の大型シャドウ戦！ 女教皇 3（後書き）

すいません！

ほんっとーに戦闘がグダグダですいませんでした！

計画は慎重に。ってね！（前書き）

ステータスの疲労って、1日で治るから悪化させない限り安心ですよね！

計画は慎重に。ってね！

大型シャドウを倒した翌日、うちは疲労で完全にダウンしていた。

『…きつかった。そもそも、難易度が上がってたろが…。』

ノーマルってレベルじゃない。

あれは間違いなく、マニアクスだった。

…といっても、ゲームでの難易度の話なんだけど。

『今日は動かないどこ。動きたくない。』

ーグくキュルルル…。

(…お腹減ったあ…。)

しかし、動きたくない。

と、いきなりテーブルに置いておいた携帯が落下した。
どうやらバイブのせいらしい。

見ると、ランプは青く光っている。

『着信…？』

はい、もしもし。』

《こんにちは、佳織様。》

電話の相手は、エリザベスだった。

『エリザベス？何か用？』

つか、なんでうちの方まで番号知ってんのさ…。』

《先日、大型シャドウの討伐へ行かれましたね？》

『（スルーかよオイ。）』

行ったよ…。今日は疲れたから1日寝る。』

《ベルベツトルームへとお越し頂きたいのですが、外出なさらないのでしたら私共の方から、お呼びします。》

『つまり、今から寝ろって？』

《はい。》

『じゃあない。じゃ、電話切るよ。』

ピッ。

そんな訳で、in the dream。

英語なのは、なんとなく。

「お待ちしてありました。
お呼びしたご用件をお伝えします。」

夢の中——正確には、《精神と物質の狭間》らしい（忘れた）ベルベットルームに呼ばれて、いきなり本題へ。

「先日の討伐、だいぶ苦戦されたようですね。」

「…あれって、明らかにおかしくない？」

「シャドウを取り込んで力にする…なんて、うち初めて見たんだけど。」

「生存本能が働いた…のでしょうか。」

「とはいえ、貴方の知る事態とはやはりズレが生じるようです。」

「エリザベス、なんか不安なんだけど…このまま進んで大丈夫かな？」

「恐らく、多少の違いはこれからも生まれる…とお考えになられた方が宜しいかと。」

「……………覚悟は、しないといけないか…。」

眉間に皺を寄せて、考え込む佳織。

エリザベスも黙ってしまい、ベルベットルームは沈黙に覆われた。

すると、ずっと黙っていたイゴールが

「時に、ペルソナの合体…なさりますかな？」

『けど、まだジャックフロストとピクシーしかいないし…』

言いかけて、気づいた。

『もしかしてペルソナの数、増えてる？』

「ええ。

『《アプサラス》・《ネコマタ》・《リリム》…少しずつ、増えています。』

『それじゃ、ピクシーとネコマタで合体を。』

2体分のカードを、イゴールに渡す。

円形のテーブルにカードを置いたイゴールが、2枚を1本の光で繋げた。

（ノーマルスプレッドか。

ゲームより綺麗だなあ。）

魔法陣の中で新たに生まれたペルソナは、アルカナ《皇帝》で黒い羽を4枚持つ、赤いペルソナ《オベロン》。

「全書に登録しますか？」

『あ、するする。』

オベロンを登録し、全書を閉じたエリザベスは、定位置のイゴールの横に戻る。

と、不意に夢の中だというのに眠気がやって来た。

「本日は、ここまでです。」

佳織様、次にお越しになる時は桜様とおいで下さい。」

『な…んで…?』

眠くなってきたせいで、呂律が回らない。

そのまま、答えを聞く事無く、うちはベルベットルームを後にした。

『ん…ふあああ…』

目が覚めてみれば、外は夕方になっていた。

『ちよ、どんなけ寝てたんだよ!』

朝ご飯はおるか、昼ご飯もすっぱかしてしまった。

『しょうがないか…。晩ご飯作るうつと。』

台所に向かう途中で、カレンダーを覗いた。

（もうすぐ風花の救出か。

うちは辞退して、荒垣先輩に会いに行こうかな。）

まずは、救いたい人No.1の荒垣先輩と仲良くなりたい。
この前、助けて貰った時のお礼も言っていないしね。

予定としては、桜達が溜まり場に行く3週間程前から。
つまり、明日に1度目の接触。

『荒垣先輩だけじゃなくって…。《あの3人》共、早めに接触した方が
いい気がするし…。
計画ぶつ潰すには、色々と情報もいるし…。
ま、まずは荒垣先輩に会いに行くのが先か！』

今後の方針を大まかに決めたとこで、晩ご飯を作ろうと冷蔵庫を開ける。

が、材料が残り少なくなっていたのに気づいてなかった。

『うわ、最悪！』

ズキッ。

『…痛、またかよ…。』

こちらに来てから、やけに頭痛が多い。

昨日の左腕も治りきってないしで、踏んだり蹴ったりだよ…。

《——貴方の隣に時価ネットたなか——！》

『見てみると、意外と面白いかも。』

結局、晩ご飯はリゾートで済ませて、ベッドに転がりながらテレビを付ける。

ちょうど時価ネットたなかがやってたから、見てみる。相変わらず、アホみたいに高い値段で笑えてしまう。

『まあ、買わないけど。』

一介の高校生に買える値段じゃないよホントに。

そーいや、たなか社長とは夜に会えるんだっけ。

他のコミュの人達にも会ってみたいし…。

特に、《刑死者》コミュの舞子ちゃんとは遊んでみたいし…。

『…やる事が多すぎ。』

主人公はこんなハードスケジュール、よくこなせたな。』

机に向かって、参考書をドサドサ積み上げる。

我ながら、大量購入し過ぎたかな。

気分的に数学を勉強してから、さっさと明日に備えますか！

計画は慎重に。ってね！（後書き）

学校って、たまにサボりたくなります。

今日は学校サボります！（前書き）

遂に、荒垣先輩に会いに行きます。

今日は学校サボります！

えー、皆さん、お早う御座います。

本日は、お日柄よく…なんて、ノリでやってみました。

ちなみに、今日は1日中、これからの為に動こうと思ってね。

学校？今日は行かないよ。

俗に言う、サボリ。

『天秤に乗せたら、人命と出席日数なんて計れないって。』

午前中はポロニアンモールで買い物して、午後は今後の予定を細かく決めて…夜は荒垣先輩に会いに行くのだー！

服は制服じゃなくて当然私服。

『ほんじゃ行つて来まーす！』

『ふー。買った買った。』

うちの両手には、いろんなロゴの入った袋が3個ぶら下がっていた。1件目に行ったのは、ランジェリーショップ。買ったのはアクセサリ。

で、2件目が薬局。

ここではヘアカラー変更の為に髪染め用品を購入（お湯で落ちるタイプ）。

3件目は洋服屋。

うちは今までスカートとか履いた事が無かったんだけど、念の為に何点か。

オシャレな服も何点か購入。

この3つは、影時間に動く時に《高瀬佳織》だとバレないようにする為。

ぶっっちゃけ、変装道具！

『あ、そつだ！』

『こんにちはー！黒沢さん、いますかー！？』

思い立って向かったのは交番。

完全に別人になる為に、最後に必要な武器を買いに来た。

大声を聞いてか黒沢さん、顔をしかめて出て来た。

「君か…。交番は叫ぶ場所じゃない。

それに学校はどうしたんだ？」

『サボりました！』

ビシッと敬礼しつつ即答。

無言で携帯を出す黒沢さんって…え！？

「学園に電話を『ちょっと待って下さい！』何だ？」

びびった。心底びびった。

『素直に言います。今日は学校をサボりました。

けど、ちゃんと訳があるんです。』

それから、大まかに半分くらいの《予定》を話した。

うちが異世界の人間とか、この活動がゲーム化しているとかはトッブシュークレットだけど。

絶対に、特別課外活動部のメンバーには話さないように念も押した。

「なるほどな…。分かったが、何故そんなに知っているんだ？」

『（そりゃ、気になるか…。）

すみませんが、それに関してはお話出来ません。

ただ、うちは救いたい人達の為に動いている…というのは、知ってほしかったんです。』

「ふむ…分かった。それで武器が新しく要るのか？」

『はい。できれば遠距離型で、弓以外のが欲しいんです。』

「少し待ってろ、何か見てくる。」

『お願いします。』

「こんなので、どうだ？」

『すごっ、何か色々ありますね…。』

しばらくして、黒沢さんが持ってきたのは

- ・ 小型のボウガン
- ・ ブーメラン（刃付き）
- ・ 投げナイフやクナイ
- ・ チャクラム
- ・ 暗器用の固い石
- ・ 自動式の銃
- ・ 先端に鋭い黒曜石が付いたワイヤー

「代金は別に要らない。
あいつらにも内緒だしな。」

『やった！』

思わず、ガッツポーズ。

（どれにしようかな…。）

顎に手を当てる。

うちだつてバレないようにする為だし、なにより使いこなすのに特訓もしないといけない。

『うむむ…、クナイも捨てがたいけど、暗器やワイヤーも面白そう

…。」

「なら、試してみるか？」

『え！？』

黒沢さんが、手近な紙袋にワイヤーと射出装置を詰めて差し出す。

「まずは、こいつを使ってみてくれ。」

気に入ったら一言、言ってくれば良い。

射出装置は金属探知機には引っかからない素材だから、持ち帰っても大丈夫だ。」

『でも、うちが特訓で傷物にしちゃったら、販売出来ないんじゃない？』

『

「ああ、こいつらは余り物だからな、問題無い。」

『余り物…。売れ残りですか？』

「最初、あいつらが使うと思ったが使わなかったからな。廃棄処分の予定だった。」

ああ。と、頭の隅でピンと来た。

『遠距離型なのは、ゆかりだけですもんね。』

「そついつことだ。」

『じゃ、うちは帰ります。』

また、メンテとかして貰えますか？」

「任せろ。」

「それじゃ、その時はまたお願いしますね。」

ガチャ。

「ただいま、つと。」

買った物はクローゼットに入れて、テーブルにパソコンを置いて起動する。

このパソコンは、安息庵にあった中から母さんに頼んで借りて来た物。

『ちょっと型は古いけど、ネットは繋げるから情報収集もはかどるよ。』

まずはネットに接続して、月光館学園の成り立ちを調べる。

『…へえ。』

調べると、結構ヒツト。
1番上に掲載されていた、《月光館学園の公式ホームページ》を覗いてみる。

調べ始めて、2時間後。

『これをメモリに落として……よし!』

画面の見過ぎで凝った肩を軽く叩く。

『やっぱり、表向きは桐条の爺さんが創立者か…。』

月光館学園の創立を調べると、どこも似たようなのが記されていた。
まあ、書き換えとかはされてんだろうけどね。

うちがメモリに落としたデータは、1番怪しい感じの記述。

時計は午後5時。

我ながら、いきなり飛ばしすぎたかな？

『今日はここまでにして、早めに晩ご飯済ませよ。』

なんたって、夜には荒垣先輩に会ったからね!

ついでに、影時間にはタルタロス…といきたいけど桜達がいたら厄介。
そんな訳で、外の巡回でもしようと思う。

『とりあえず、格好はこのままで問題無いよね。』

ウエストポーチに、財布と学生証を入れる。
ついでに、召喚器も持って行かないと。

『召喚器はあんまり知られたくないから、ポーチのベルトに付けて…と。』

最後にサイズの大きい上着を着て、召喚器を隠す。
ポーチは前に着ける派だから、お腹がスースーして違和感があるけど我慢。

やって来ました、不良の溜まり場！

キョロキョロしながら臍脂色を探すと、意外と早くご対面。

本日はなんと、荒垣先輩オンリーだった。イヤッホー！

『荒垣先輩こんばんは〜！』

「お前確か、アキの後輩の…」

『はい〜2年の高瀬佳織です。』

あの時はどうも有り難う御座いました！
んで、今日は先輩に会いに来たんです！』

「意味分かんねえよ。」

『真田先輩に聞いたんですよ。』

荒垣先輩って、いつもここにいらっしゃるんですか？』

「…まあな。…で、何しに来た？」

『先輩に会いに！』

元気一杯に親指を突き出したら呆れた顔された。
うわ、シヨック！（笑）

「答えになってねえぞ。」

…あと、何だその手。」

『握手して下さい!』

「ハア？」

あーくーしゅー!

差し出した右手を、上下にブンブンと振る。

もはや、単なる駄々っ子。

しかし、そこは不器用ながらも優しい荒垣先輩。

渋りながら手を握り返してくれた。しかも、握る時にちゃんと力の加減がしてある。

『（わーい！先輩と握手してるよ、何これ天国？）
えへへ。』

思わず頬の筋肉が超緩みまくる。

相当だらしのない顔をしてるんだろっけど、気にしない。

「お前…何だその顔。」

『いやあ、今なら何でも出来そうな気がします。』

微妙に会話が噛み合っていないけど、これまた気にしない。

荒垣先輩の手は想像以上にデカくて、角張ってて、それでも優しさが滲み出ている。

特別課外活動部だった頃に、鈍器を武器として扱っていたからかタコも幾つかあった。

「こんなの嬉しいか？」

『嬉しくなきゃ、こんな顔しませんよ。幸せ。』

あ、そうだ先輩。今から暇ですか？』

「…ああ。」

(何考えてやがる…。)

『(ご飯食べに行くのは、コミュニティイベントだから桜に譲って…うちはどうしようかな……そうだ！)』

先輩、メルアド交換して下さい！』

「ハア!？」

普通は驚くか。

けど、これだけは譲らん！

『先輩、ろくに学校も行っていないんでしょ？
だったら、暇な時は一緒に遊びたいです！』

今は、このくらいにしておく。

怪しまれると折角の計画がパーになっちゃうから。

その後、無事に荒垣先輩のメルアドをゲットして帰った。
勿論うちのも押し付けた。

まあ最初だから30分間しか喋らなかつたけど、荒垣先輩の中に《
高瀬佳織》は記憶された筈。

これから、もっと交流を深めれば良い話だ。

『待ってるよ、いつかうちともご飯食べへに行って貰いますからね
』！

今日は学校サボります！（後書き）

桜とはご飯、佳織とはメルアド交換。
先輩もなかなか忙しい…。

1人タルタロス。：寂しい！（前書き）

気がついたら、20話超えてました。なんか嬉しい…！

1人タルタロス。：寂しい！

学園高等部、2年F組

『おはよーさん！』

「あ、佳織。ちょっと来て。」

次の日、登校した途端に桜に教室から廊下に連れ出された。

『んにゃ、何？』

「あのね、タルタロスの新しい階が解放されたみたいなの。」

『更に行けるって事かじゃ？』

「そうなの。」

だから、テストが終わったら一緒に登ろう？。」

『い〜よ〜。』

代わりと言っちゃなんだけど…。」

「どうしたの？」

『勉強教えてっ！』

両手を合わせて拝む。

だって、うちは本来ならばまだ1年。

明らかに勉強ヤバイじゃんか！

「オツケー、分かった。」

『やりい！有り難う桜！』

いずれ《完璧超人》なステータスを得る桜に勉強教えて貰えるなら、かなり心強い。

『えーつと、問題は数学と英語なんだけど…』

鞆から参考書と、教科書を引っ張って桜の席に行く。

「勉強なら私も教えて！

数学分かんないの。」

『あ、理緒じゃん。』

「それじゃあ、張り切って教えちゃおっかな！」

「で、ここで直前に書いた答えを応用するの。」

「へえ、じゃあ……って、佳織大丈夫？」

『うづうー、……無理、分ーかーんーなーい！』

「まあまあ、教えるから。
で、どー？」

『全部っ！！…！』

「ハア！？」

「……基礎から、やり直そうか。」

『ハハ…お願いします。』

『ふあゝ、終わった！』

結局、今日は数学だけで手一杯だったけど。

「授業、全部すっぽかしてまで数学やるなんて思わなかったよ…。」

苦笑いする桜も、最後まで付き合ってくれた。

この子が好かれる理由が、なんとなく分かったかもしれない。

「まあ、お互いテストは頑張ろう！」

『おーっ！』

2人で拳を振り上げる。

その時、いきなり妙な感覚に襲われた。

意識の片隅で、光が一点に集中して何かを形作る。

『（…これ、コミュカード…？）』

うちのアルカナの、混沌と思われるカードのイラストに、上部には
《??》の数字。

『…あれ？』

ふと気がついた。

??は、大型シャドウのアルカナ数。

本来、コミュのカードなら違う数字が書かれていないといけない。

（なんか…フラグ成立？）

そういう事は、考えない方が良いかな？

とか思いながら、放課後はすぐに安息庵に帰った。

影時間、自室

今日からテスト週間で桜達はタルタロスには行かない。
絶好の特訓週間だね！

右腕にワイヤーの射出装置をセット。
召喚器はホルダーに入れて腰から提げる。
で、日本刀の入った袋を背負って、準備万端！

とりあえず今日は、日本刀を左右どちらの手でも扱えるようになる
のが目標。

張り切って行こー！

『おりゃおりゃおりゃーっ！』

只今、タルタロスの16階でシャドウを日本刀とワイヤーで潰しながら全力疾走中。

左で日本刀を振り回して、シャドウを一刀両断しつつ、右のワイヤーで別のシャドウの急所を射抜く。

とりあえず、今日は桜達に25階の番人を残して置いて、24階まで登ろう。

決して、絶対に番人が面倒とかじゃないよ！

『けど、意外と殺れるんだね。（ニヤリ）』

この調子なら、皆より速いレベルアップが出来そう。トラエストジエム、沢山買ったのに…ちょっと残念。

おっと、前方に筋肉ムキムキの「鋼鉄のギガス」2体発見。こっちは気づいてないみたい。

『（何が弱点だっけ？）
…色々試せばいいや。』

とはいえ、物理はやめて…スキルで押さないとめんどい。

『ペルソナ…《ガルーラ》！』

疾風の中スキル。

さつきレベルアップで修得しました。

まずは不意打ちで1体目が消滅。

2体目は流石に気づいて、何かスキルを使った。周りに光の波が広がる。

『おっと、あれは厄介…《レボリーション》だな。』

ま、当たんなきゃいいんだけど。』

召喚器を構える。

『オベロン《スクカジャ》。

ジャックフロスト、《ブフーラ》宜しく!』

最近はアースだけで戦ってたから、他の子でやってみる。
ワイヤー・刀は使わずに、スキルで勝負。

最近気づいたんだけど、うちはミッドランドは使えん代わりに、2体のペルソナを同時召喚出来るっぽい。お得だね。(笑)

だいぶジャックフロストのブフーラで体力を削られたギガスは、一直線にうちを叩こうと向かって来る。

それくらい、計算済み。

『バイバイ、消えてね〜。

アース、《ガルーラ》!』

さっきので弱点は分かったから手っ取り早く終わらせる。

『ゴクゴク…プハッ!』

あれから、24階にはあっさり到着。
刈り取る者には会わずに済んで一安心。

エントランスに戻って、ウムギウォーターを飲んでるんだけど…美味しいかと聞かれると、微妙。

『もうちょっと、味に統一感があっても…!』

空のボトルを眺める。

この味では詐欺だよ詐欺!

『ワイヤーが使えるのも判明したし、今日は終わりっ!』

安息庵に帰って刀とワイヤーのお手入れをしてから寝ました。

1人タルタロス。：寂しい！（後書き）

次はテスト当日から！

テスト…赤点いや〜！（前書き）

今回は短いです。

…すみません、次は長くします。

テスト…赤点いや〜！

『…ハア、どうしょよ。』

朝から、暗〜いオーラの佳織です。

理由？題名見れば分かるでしょ！（怒）

『…ハア。』

うちは向こう側で1年だった時に、化学で恐怖の赤点と対面した事がある。

だから、よけーに今回のテストが怖い。

『やれるだけやったし、なんとかなるでしょ…。』

重〜いオーラのまま、学校に向かった。

『…おはよーさん…。』

「うわ、佳織ツチ暗っ！」

『うるさいよ順平……。』

グデーツと机に突っ伏す。

順平はいいよね、気楽で。

「大丈夫だよ、佳織も頑張ったんだから。」

「そうそう。」

数学なんか全部分かんないとか言ってたのに、あんなに出来るようになったじゃん！」

『桜く、理緒くく。』

不安で2人に泣きつく。

だって、マジヤバなんだもん！

大丈夫。と2人に慰められて、いざテスト。

カリカリ、カリカリと紙に文字を刻む音だけが教室に響く。

うちは、唸りながら必死に解答欄を埋めていった。

そんな日が5日間続いて、最後の試験日。

（えっと、ここはこう…ってあれ？

桜達とやったとこだ！）

調子がやっと出てきたから一気に答えを書く。
書く書く書く！

（イケるかも…！）

次の日。

「おい、桜ツチに佳織ツチ、順位張り出されたから見に行かねえ？」

(…来た、来てしまった！)

あああ、神様、せめて真ん中あたりにいい…！)

逃げたい気もするけど、桜に手を握られて逃げれない。

腹を括って、順位表の前に立った。

結果は

1位、神碓桜

5位、高瀬佳織

50位、岳羽ゆかり

165位、伊織順平

「やったあ！」

『…え、うち5位？』

『なんかの間違いじゃないの？』

「まあ、そこそこかな。」

「うわ〜！オレめっちゃ低いじゃんか！」

喜び、啞然、納得、嘆いたり全員違った反応をする。

「まさか、いきなりトップだなんて思わなかったよ。
佳織も凄いよ！」

『はは…なんか、現実感無くなってきたかも。』

衝撃でちよつと呆然とする。

だって、最後の日以外マジヤバだったんだよ？
化学に至っては、赤点覚悟だったんだよ？

半ば呆然としながら教室に戻る。

「佳織、5位なんだって！？」

「頑張ったじゃん！」

『…うん、まあ。』

「あれ？どうしたの？」

「どうも、現実感が無くなってるとるみたい。」

「ああ、びっくりし過ぎたの？」

「そうみたい。」

桜と理緒が、顔を見合わせて苦笑い。

佳織の様子は、しばらくそのままだったとか。

テスト…赤点いや〜！（後書き）

実際、こんな順位取ってみたいですよ…。
勉強苦手ですから…あはは。

満月の大型シャドウ戦！ 女帝&皇帝 1（前書き）

討伐には加わったり、加わら無かったりの佳織。

話を繋げるのが難しい…！

満月の大型シャドウ戦！ 女帝&皇帝 1

あれよあれよと時間は過ぎて、風花救出の日。

まあ、うちは行かないけどね。

討伐に行けないって拒否った。

だって今日は荒垣先輩の所に行くんだし。

あらかじめ、メールで連絡取ったから今日は溜まり場に来てくれる筈。

だから、大口開けて先輩を呼ぶ。

『あーらーがーきーせーん』なげえな。『ありゃ、もっお出ましますか。』

まだ呼び終わってません！と抗議すると、うるせえ。と一蹴された。

『むう……。あ、そだ先輩！

風花って子知ってます？』

話題が無いので、風花をネタにする。

ごめんね風花。

「この間も、お前の同級生に同じ事聞かれたな……。流行ってんのか？」

『（ありゃ、先輩らしくないお答え。）

違います、なんで行方不明になってんのか知ってるかなー…と悪い

まして。』

「…そうか。」

会話終了。

『…何か喋りましょうよ。』

「ガキは、こんな所に来んな。
あいつらにも言ったがな。」

『むーっ…じゃあ、こっちからも言わせて貰いますけど。』

じーっと先輩の顔をガン見する。

もうすぐ影時間、さっさと帰らないとね。

『お身体を大切に。』

最近、体調不良が多いですから！』

言って、すぐに一礼して帰路を急いだ。

ガチャッ、パタン。

『…今のところは順調つと。』

影時間になる前に帰って正解かな。今度は、ストレガと会わないと
「こんばんは。」……………何さ、ファルロス。』

一人でブツブツ言ってる時に突然割り込んだ、幼い声。
不満オーラを、隠さずに出してみる。

勝手に上がり込んで、微笑んでいる囚人服のちびっ子。
神出鬼没な、ファルロス。

「桜達にはついて行かなかったんだ？」

『まあ、うちには予定があるから。』

それに、今回は風花の覚醒イベントありだし。とぼやく。

「そうなんだ。」

君も忙しそうだね。」

『お陰様で。』

んで、そんな事言いに来たんじゃないでしょ？』

なんとなく聞く。

「うん、そうだよ。」

満月、大型シャドウ、ペルソナ使い…。

君は知っているよね、未来を。」

『知ってる…けど、何か違う。』

原因は、うち？それとも、あんた？』

呼んだ者と、呼ばれた者。

ピシツと指差してやると、囚人服のちびっ子は

「原因説明より、急いだ方が良いと思うな。

ー今回も、違うから。」

なんて爆弾発言をしてくれやがって、消えた。

『もう、肝心な事がいっつも聞けないじゃんか！』

悪態つきながら、すぐに刀の袋を背負ってタルタロスに急いだ。

「ーん…。」

ここ、は…タルタロス？」

今日の討伐には佳織が来れないと聞いた。
仕方なく私達だけで夜の学校に忍び込み、無事にタルタロスに入り
込めた。

のは、いいんだけど…。

《ーザザツ、神碇、無事か？ザツ、応答し、てくれ…ザツ》

「…あーあ、順平と真田先輩、どこにいるんだろっ…。」

「こんばんは、桜。」

「わっ…ファルロス！」

後ろから声を掛けられたから、ちよつと大袈裟にびっくりしちゃった。

ファルロスから聞いた話だと2人は別の階にいて、合流しようとしているみたい。

「よし、頑張つて合流しなきゃ！」

シャドウを倒しながら進んで行くと、声が聞こえた。

《…誰？誰かいるの？》

「っ…山岸さん！」

聞こえる？助けに来たよ！」

呼びかけてみるけど、応答が無い。

（急がないと…シャドウに襲われない内に…！）

「まただ、山岸さんの声が…。」

進んで毎に、山岸さんの声は弱々しくなっていく。
焦りが募る。

と、前の壁影から飛び出して来た何か。

「っ…！」

思わず雑刀を振ろうとすると、何かは私を見て急停止した。

「神崎、俺だ！」

「え、真田先輩っ！？」

慌てて薙刀を引っ込める。

(危なかったあ…。)

ホツとしていると、

「おおーい！」

「伊織、無事だったか。」

「良かったあ。」

私達の所に走って来て、息を整える順平。

「これで全員集まれたな。」

本格的に、山岸の搜索を始めよう。」

「ちよつといいスか？」

「どうした。」

「ここに来るまで、《声》が聞こえなかったスか？」「私も聞いた！」
「だよな！？」

お互いに同意しあっていると、また山岸さんの声が聞こえた。

「ー今度は、肉声で。」

「貴方が、山岸さん？」

安堵の余りか、泣き崩れる彼女に視線を合わせて話す。

「…はい、私が山岸です。」

あの、ここはどこなんですか？

私、学校の体育館倉庫にいたのに…。」

「大丈夫。」

私達は、貴方を助けに来たの。

後でゆっくり説明するからここを出よう。

色々、ここは危ないの。」

「ここ、私達以外に何かいます？

変な感じがして、怖くて、ずっと見つからないように隠れてたんで

すけど…。」

「待て。今、何と言った？

《見つからないように隠れていた》…つまり、何にも遭遇していな

いのか？」

「あ、はい…。」

どうしてか分からないんですけど、自分がどこにいれば安全か分かっていたので…。」

「（…美鶴と同じ能力か？

いや、それより強い…。）

とにかく、移動するぞ。俺が先に行く。

神崎は山岸を支えてやれ。

伊織は、随時後方の警戒だ。怠るなよ。」

「はい！」

山岸さん、立てる？」

「ゆっくりでいいからな。
オレは後ろだな。」

陣を崩さないで進んで行くと、立ち止まった山岸さんが顔色を変えた。

「な、に…？何なの！？」

「大丈夫！？」

座り込んでしまった彼女に声をかけるけど、様子がおかしい。

「今までより、ずっと大きい…凶暴な…負が…！」

「！？おい、神碇！」

前に寮が襲われた時も、確か満月だったよな？」

「はい。…！まさか…！」

「ああ。急がないと、岳羽と美鶴が危ない！」

「え、え？

どういう事スか？真田先輩！」

「恐らく、奴らは《満月》の日に出現する。
エントランスに急ぐぞ！」

（ゆかり、桐条先輩：無事でいて！）

走り去った先輩を、私達は追いかけた。

満月の大型シャドウ戦！ 女帝&皇帝 1（後書き）

次は、風花覚醒イベント！

満月の大型シャドウ戦！ 女帝&皇帝 2（前書き）

ストーリーは架空。
自分自身は、現実。

満月の大型シャドウ戦！ 女帝&皇帝 2

神崎達が山岸風花を救出に向かってから、通信機が使えなくなった。やはり、私の《ペンテシレア》では限界がある。

「くそ、繋がらない…。階が離れ過ぎたのか。」

エントランスには、私と岳羽が待機しているが、彼女は私に苦手意識を持っているのだろうか？

「（先程から落ち着かないな。岳羽、少しいいか？」

「はい、何ですか？」

「君は、私を嫌っているか？」

「え？いえ、別にそんな事は…。」

いきなり聞いてしまったな。普通は、言えないか…。

「いや、おかしい事を聞いたな。今のは、忘れてくれ。」

そう言って、岳羽に背を向けた時…

――！

「……………」

私達の前に、2体の大型シャドウが現れた。

「岳羽、構えるんだ！」

「は、はい…！」

すぐさまホルダーから召喚器を抜く。

「《ペンテシレア》！」

召喚したペンテシレアは、すぐに細い方のシャドウに斬り掛かる。

攻撃は当たった。

…が、甘くは無かった。

太いシャドウが、私を潰そうと狙う。

「させないっ！」

振り下ろした剣に、岳羽の放った弓が当たって軌道がずれ、難を逃れる。

「すまない、岳羽。」

「いえ、桜が帰って来る前に、こいつら片付けましょう。」

頷いて、武器を構えた。

と、私の視界に人影が映った。

――森山夏紀。

山岸を虐めていた1人。しかし、来るなど察に置いた筈――！

「先輩っ！」

「な…くあっ！」

彼女に気を取られてしまいシャドウに捕まってしまった。

「くっ…何故来た!？」

「…あ、私、風花に謝らなきゃ…そう思って…。」

途切れ途切れに話すせいで聞き取れない。

「きゃあっ!」

「っ…岳羽!」

もう片方に、岳羽も捕まった!

痛みと焦りで混乱状態に陥る。

と、最悪の事態が起きた。

「「…3体目!?!」」

2体のシャドウの背後から手ぶらな3体目が出て来た。
しかも、事態が飲み込めずに呆然と立つ森山夏紀に向かう。

「マズい…逃げろっ！」

ここから出て、寮に戻るんだっ!?!」

声を張り上げて、彼女に出ると言うが、森山夏紀には聞こえていない。

「森山さん!」

岳羽も必死に呼びかける。

だが無情にも、シャドウの腕は振り下ろされた。

…よっに見えた。

「あ、あんた…。」

「高瀬…！」

「佳織…！」

シャドウの腕には、私の剣より大きな剣が刺さり、持ち主は射殺さ
んばかりの眼光を向ける。

持ち主の…主も。

『今日のは、動くつもりなんか無かったっつーのに…。
ふざけた真似してくれんじゃんか…！』

普段は見ない眼に、私は僅かに恐怖を感じた。

と、今度は私とゆかりの頭上に影が落ちる。

「《ポリデュークス》！」

「オルフェウス！」

明彦と神崎が、私達を捕らえていたシャドウに一撃を見舞う。
お陰で私達は解放されたが…。

『しつこい…。』

森山を隅に押しやった高瀬が、3体目のシャドウに押されている。
助けに行きたいが、大型シャドウの「エンペラー」・「エンプレス」
に阻まれて向かえない。

と、伊織が山岸を呼び止める声が聞こえた。

「おい、行くなって！」

危ねえよ！」

「大丈夫…。分かるから。」

『…………。』

山岸が森山を助け起こした時、高瀬がバランスを崩した。
攻撃は背後の2人に向かい、私が駆け出そうとした瞬間。

…山岸が、大型シャドウの攻撃を防いだ。

彼女を守護するかのように包み込むのは、盲目の女ペルソナ…《ル
キア》。

護られた山岸は、前に立つ高瀬に目を向けた。
高瀬が、それに頷く。

《今の私には、その2体の弱点が分かります…。
指示を下さい…やれる限り、皆さんをサポートします。》

「これは…！」

「美鶴と同じ能力だ。

山岸の場合、もっと強いようだがな。」

「（アナライズ…。）

山岸さん、手を貸して。

あいつらの事、調べてほしいの。」

《少し分析に時間が掛かりますが、分かりました。
――ハイ・アナライズ。》

「（心強いな。）

神崎、私達にも指示を。」

「はい！」

《神崎さん、分かりました！

エンペラーには、火・氷・風の攻撃をして下さい！》

それからは怒涛の攻撃だった。

特に桐条先輩とゆかりが、倍返しと言わんばかりにスキルを叩き込んでいく。

エンペラーとエンプレスは倒し終わって、佳織を助けようと思った
ら、彼女もトドメを刺した所だった。

『…桜。』

「佳織、有り難う。

来てくれて、森山さんが助かったよ。」

私がお礼を言っと、どうしてか佳織は表情を曇らせた。

『…別に大した事してないよ。

それより、大型シャドウは桜に任せるから。

また、明日ね。』

「あつ、佳織！」

エントランスから走り去ってしまった彼女を追おうとしたけど桐条
先輩に止められた。

「神崎、高瀬より今は残った通常シャドウの討伐が優先だ！」

「そう、ですね…。」

（佳織…何かあったの？）「」

『……………』

タルタロスから出たうちは、そのままポートアイランドの溜まり場に来た。

目的なんか無いけど、安息庵には帰る気にはならなかった。

『……………ハア。』

今は溜まり場でも、特に人気の感じられない路地裏にいるから盛大に溜め息を吐く。

ーーどンドン、うちの知らない事が起きる。
覚悟してもやっぱり戸惑う。

(だけど、決めた以上は逃げられない…)

ギリツ、と奥歯を噛む。

不安が募るせいで、胸のモヤモヤが消えてくれない。ホルダーから召喚器を抜いて、前に向かって引き金を引く。

『…どうしようね。』

あんたは分かる？アース。』

姿を見せても、アースは何も言わない。

ただ、うちの様子を見つめるだけ。

『怖いんだよね…』

“もし”って思ってた事が、現実になったら。』

単なる独白。

ここまでストーリーと違うとは思わなかった。

当然、これからも大型シャドウは出る。

『隠しきって…皆を守りきる…か。』

自分の手を見る。

シャドウと戦うようになってから切り傷や擦り傷が絶えない。

けど、足りない。

今のうちは、明らかに力不足だと嫌でも分かる。

『…くそつたれ…!』

ガン、と壁に拳を叩きつける。自分のネガティブ思考回路に嫌気がさす。

『諦めるかよ、こんくらいで…!
諦めてたまるか…!』

影時間の不気味な月に向かって吼える。

——絶対に、死んでもやっつけてやる。

空が元に戻るまで月を睨み続けた。

うちを影から見ると、人物に気づかずに。

満月の大型シャドウ戦！ 女帝&皇帝 2（後書き）

苦悩する佳織です。

未来を知っているってのは辛いかもしれないですね…。

接触。ネタバレ禁止！（前書き）

今回のメインはストレガ。

ジンは、ある意味常識人っぽい気がする。

タカヤは色々と自重しろ。

チドリは可愛い。

接触。ネタバレ禁止！

巖戸台分寮 作戦室

風花に説明をする為に、今日はメンバー全員＋理事長が作戦室に集まった。

しばらくして、控えめに扉が開き、顔を覗かせたのは

「お邪魔します。」

「あ、来た風花ちゃん！
こっち座って？」

「あ、有り難う。
えっと、桜ちゃんだよね？」

「うん。私は神碓桜。
で、この子がー」

「私は岳羽ゆかり。
桜とはクラスメートなの。
宜しくね。」

「オレは伊織順平！」

「部長を務める、桐条美鶴だ。
あの時は助かった、礼を言わせてくれないか。」

「俺は真田明彦。」

まさか山岸もペルソナ使いとして目覚めるとは思わなかった。」

「あの、ペルソナ使いつて一体…？」

「今日はそれを君に知って貰う為に呼んだんだ。」

まあ、落ち着いて聞いてほしい。」

主に桜と美鶴の話した、シャドウと影時間、ペルソナの事を、風花は真剣に聞き入っていた。

「そんな事が…。」

だから皆さん、武器なんて持っていたんですね。」

納得したらしい風花。

入部するかと聞けば、2つ返事で了承してくれた。

と、何故か風花は美鶴を呼ぶ。

「あの人はいないんですか？」

「…？」
ああ、高瀬か。彼女は…」

影時間、ポートアイランド路地裏

（今日は、話を聞く為に変装して来たけど…上手く出て来てくれるかな…。）

影時間になり、緑色に変わった世界を変装した佳織…もとい、《月原凧》（当然偽名）は歩いていた。

ちなみに、この名前は考えていた女主人公の没集の1つ。

目的は、ストレガの3人との接触。

最低でも、名乗っておく事はしたい。

戦闘になった場合を考慮して、つけたペルソナは《リリム》。右腕には、武器のワイヤー。

帰宅途中、という設定でブラブラしている。

（何かしないと来ないか…？）

けど、視線を感じるからこのままブラつき続けられ…。）

試しに、1本の細い脇道に入って誘ってみる。
気配は、恐らくストレガの2人…ジンとタカヤ。

(なんかチドリがないと、華がなあ。)

ジンは常識人っぽいから別にいいけど、タカヤは苦手。
上に何か服を着てほしい…。マジで。

『…で、いつまでストーカーしてくるの?』

声を掛けてみれば、驚いたような2人の気配。
クルッと振り向き、ご対面。

(うわ…。)

実際に向き合ってみると、雰囲気のとげとげしさに負けそう…とか
言ってる場合じゃなくて!

『何か用?』

ストーカーなんて初経験なんだけど。』

なるべく2人を刺激しないように話す。
だってジンは手榴弾持ってるんだよ?
投げられたら怖いし。

「あなた、ペルソナ使いか。」

『そうだけど、貴方達誰?』

「相手に名を尋ねる時は、自分から名乗ったらどうです？」

『（やっぱり、一筋縄ではいかないな…。）
私は、月原凧。』

「ワイはジン。

で、こっちはタカヤ。」

『もしかしなくても、貴方達って最近ネットに出てる“復讐”の代行屋さん？』

普段使わない言葉は疲れる。

「せや。ワイらの事、“ストレガ”言うてる連中もある。」

ジンは、わりかし会話が成り立つから一安心。

…ちよっとタカヤさん？

その嫌な視線止めてほしいんだけど。

「見た所、貴方はお一人のようですね。」

『…だから何？』

「この街に、ワイら以外のペルソナ使いがある。」

それは、間違い無くS・E・E・Sの事。

だったら、うちにも何か聞いてくると思う。

「最近になって動き出した連中の事、知ってるか？」

ビンゴ。悪いけど、ボケる。

『貴方達じゃないの?』

「その様子だと、知らないようですね。」

『うん、ずっと一人で動いてたから。

だから、知らないの。』

ごめん、知ってるんだな〜!

これが。(笑)

「まあ、今日はこれくらいにしましょう。

ジン、行きますよ。」

「了解や。」

『あ…待って!』

歩き去ろうとした2人を引き止める。

悪いけど、まだ聞きたい事があるから。

「何や自分、これ以上用があるんか。」

『いつから、私の後をつけていたの?』

それと、貴方達の目的って、何?』

「答えが知りたければ、今度はそちらが赴いて下さい。」

タカヤが振り返らずに言うと、彼らは影時間の闇に消えた。

接触。ネタバレ禁止！（後書き）

《高瀬佳織》と《月原凪》で、入れ替え取っ替え。

これはこれでハードスケジュール。

仮面って、制限が無いよね。(前書き)

風花救出後です。

仮面つて、制限が無いよね。

翌日、モノレール内

『あゝ昨日は緊張した。

ジンから色々聞くかな…。

タカヤとか正直、あんまり関わりたくないし。』

昨夜の精神的疲労もあり、うつらうつらと寝ぼけ眼の佳織。吊革に掴まったまま、頭がカクカクしている。

『ZZZZZZ…。』

キーンコンカーンコン…

「おい、佳織起きて。

……佳織ー？」

『ZZZZZZ……あり、ゆかりだ。

おはよー……。』

「もう、『おはよー』じゃないわよ。
とっくにお昼休み。

佳織、ご飯どうするの?」

『んー…眠い…。パタッ。』

「自分で効果音付けない!

しょうがないなあ…メモ置いところ。」

放課後、皆が帰り始める音で、うちは目が覚めた。

『よく寝た…。ん?メモ?』

机の中にあつたメモを開く。

中はこんな事が書いてあつた。

《「今日、新しいメンバーの紹介をするから、7時に巖戸台分寮の
ラウンジに来てね。ゆかり」》

(ああ、風花な…))

風花が入れば、必然的に美鶴先輩が戦線に復帰する。

だから戦力は心配いらなんだけど、問題が1つ。

風花のルキアはサーチ能力が高いから、下手に動き過ぎると見つかる可能性がある。

（顔合わせは必要か。

ちゃんと挨拶はしたいし。）

午後7時、ラウンジ

ガチャ。

『こんばんは。』

「待ってたわよ佳織。

さ、皆いるから作戦室に行こう！」

作戦室に入って最初に目にしたのは、大量のお菓子と、それを食べる順平だった。

「オッス、佳織ツチ！」

「あれ？順平いたの？」

『というか、何そのお菓子の山。』

「ちよ、2人共スルー！？

酷くない？」

「『酷くない。』」

順平を無視して、作戦室のソファーに歩み寄る。

「こんばんは、佳織ちゃん。

名前言っただけじゃなかったね。

私は山岸風花。この前は有り難う。」

『こつちこそ有り難う。

助かったよ。

うちはF組の高瀬佳織。

これから宜しく、風花ちゃん。』

「“風花”で良いよ。

ちゃん付けされると、なんだかくすぐったいから。」

『了解！頑張ろう、風花！』

「あ、それと…夏紀ちゃんの事もお礼を言いたかったの。本当に有り難う、佳織ちゃん。」

「体が勝手に動いただけ。」

森山さんが無事で良かったよ、冷や汗掻いたもん。

それに、お礼を言われるのも恥ずかしいかな…。」

ポリポリと頬を掻きながら話す。

風花つて、ゆかりに負けず劣らず可愛いし。

なんか直視出来ない〜！

順平以外の皆はルックス良すぎなんだよ！

そんな風に、内心悶えているうちには気付かなかったらしい風花が（…助かった。）挨拶の握手を求めてきたので、うちも笑顔で握り返す。

ほのぼのとした空気が作戦室に流れる。

と、そこに。

「やあ、皆揃っているようだね。」

今すぐアースの《利剣乱舞》で切り刻んで殺りたい奴1位の幾月が出やがった。

「理事長？」

今日は“来られない”と…。」

美鶴先輩の眩きに、ピクリと反応。

うち以外の視線を集めながら、幾月はファイルを取り出して、テー

ブルの上に置いた。

「……?」

何かと思い、表面の文字を読んでみる。

『《大型シャドウの属性とアルカナ》…。』

うちが読んだファイル名に、顔を見合わせるメンバー達。

「幾月さん、大型シャドウ…というのは、俺達が討伐したデカイシヤドウですか?」

ファイルを見ながら真田先輩が幾月に疑問をぶつける。

「そうみたいだ。

今日は、面白い事が分かったからね。

皆に知らせに来たんだよ。」

幾月は言いながら、空いているソファーに腰を下ろした。

そして、ページをめくり、ある1文を示した。

美鶴先輩が文章を読み上げる。

「《大型シャドウは合計12体存在し、それらはアルカナ毎に分類される。》

理事長、これは?」

「このファイルに記されている事の全てが、大型シャドウに関する記録だ。」

「どうやら、カテゴリ別に1体ずつシャドウは違つらしいね。ちなみに12個のアルカナとは、《魔術師》から《刑死者》なんだ。」

『理事長、ちよつと質問いいですか?』

「楽しそうな幾月に、さも疑問だと言つ風に挙手する。」

「ああ、どうぞ。」

『アルカナつて、タロット占いとかに出てくる物ですよね?』

「よく知っているね。」

「それがどうかしたのかい?」

『うちの気のせいですか?』

「足りないアルカナがある気がするのですけど。」

「どついつ事?佳織。」

「何がおかしいのか。」

「そう言う桜や他の人には、分かり易くご説明。」

『うちはタロット占いとか趣味でよくやるんだ。』

「で、今の理事長の説明には足りないアルカナがある。」

「私服であるショートパンツのポケットから、タロットカードを取り出す。」

「テーブルに広げ、1枚ずつ裏から表に返していく。」

『魔術師から刑死者は、理事長の言った通りだけど…“これ”が足りない。』

最後にゆっくり裏返したのは、《死神》のカード。

『単なる自己満足でやっているだけなので、忘れて下さって結構ですが。』

…理事長、本当に12体なんですね？』

「桐条グループの研究データだからね、間違い無いよ。」

ここまで問い詰めても、幾月からは笑顔が消えない。

化けの皮は、相つ当厚いらしいな…。

…早く本性出してくれた方が楽なのに。

そんな事を考えているせいで、大型シャドウについての話も上の空。と、不意にポケットの中で携帯が鳴りだした。

美鶴先輩が出て良いぞ。と許可をくれたので部屋の隅で通話ボタンを押した。

『…もしもし、母さん？』

《「佳織、今お友達の所？」》

『へ？そつだよ。どうかしたの？』

食材か何か買い出しなのかな？と考えてみる。

《「俺の玄関に、貴方を待ってるって言ってる男の子がいるのよ。お友達だったら、早く帰って来なさいね。」》

『え、うん。分かった。』

通話を終えて、美鶴先輩に理由を話す。

「そうか。なら今日はもう帰った方が良いな。詳しい事は後日、生徒会室でまた話そう。」

『はい。じゃあ今日はこれで失礼します。』

『それにしても、誰だろ？』

場所を知ってるのは、クラスの皆…かS・E・E・Sのメンバーだけの筈だし…。

歩きながらカードの束を弄ぶ。

やっと俺の玄関が見えた時、そこにいた1人の人物に目を見張った。

「ー遅いじゃんか、何しとったねん。」

銀のアタッシユケースを提げた長身の男。

(嘘、でしょ…!?)

『ズンって、ココにいるの!?!』

玄関にいたのは、ストレガのジンだった。

仮面って、制限が無いよね。(後書き)

アイデアのある内に投稿していきたいと思います。

住民が増えました。(前書き)

奔走する佳織。

もう必死ですね。(笑)

住民が増えました。

夜の静かな景色に、うちとジンが向かい合う。

お互いの距離は、7メートル。

ジンが手榴弾を投げれば、嫌でも届く距離。

幸い、ジンにうちの咳きは聞こえてなかったらしい。

(あー、良かった。

聞こえてたら、こっちが一方的に知ってる事になるもんね。)

「全く、タカヤも人使いが荒いわ。

…心配せんでも、こないな場所で戦ったりせえへん。」

『…(手榴弾持つてるくせに、よく言うよ。)
貴方、何しに来たの?』

「あんたも連中の仲間やる。

伝言頼みに来ただけや。」

『だから、なんで家を知ってるのかって聞いてんの。』

「言う必要はあらへん。

“今後、一切動き回るな。”

ほな、伝えたで。」

『無視すんな、答えろ！

…逃げられた……。』

あらかじめペルソナをつけていたらしく、あっという間に逃げ去った。

『まあ、バレなかったただけ良しとしよう。』

ふう、と息を吐く。

“ 今後、一切動き回るな。”

『やっぱり、ストレガには邪魔なんだなあ…。』

あ。と1個思い出す。

多分この時、目に見えてうちは顔色悪くなってたんだろう。

『ヤバ…ヤバい!』

バタバタと階段を駆け上がり、急いで部屋に入る。

机の引き出しから、前に覚えている事をありったけ書いたノートを引っ張り出した。

『うわっ…ヤバい!』

さっきから何を焦っているかというと。

『…忘れてた。』

“ 大型シャドウは倒しちゃいけない” なんだっただけ!

ゲーム内で、S・E・E・Sは見事に幾月に騙されていた。

思惑通りにイレギュラーの大型シャドウと倒し、《デス》の降臨を

許してしまった。

『ストレガも幾月の考えていた事は知っていたし、何よりこのままじゃ変わらない…!』

どうすれば良いのか。

なんとか、頭をフルに回転させる。

(確か、これからのストーリー展開だと夏休みがネックで…

?、屋久島旅行に行く

?、美鶴先輩父さんの別荘に宿泊

?、アイギスが仲間になる

?、ゆかり父さんの(改竄)ビデオを見る

てな感じだった筈!)

なんとかして美鶴先輩のお父さん死亡イベントは避けたい…。荒垣先輩の死亡イベントも避けたいし。

先輩のお父さん死亡イベント1番の回避法は、《祝賀会》に出さない事なんだと思う。

そうすればフラグは折れる。

『寧ろ、屋久島旅行の時に話をするか…。でも信じてくれるかが問題だし…。』

助けられるのは、うちだけしかない。

最悪のシナリオになんかしちゃいけない。

『そうでしょ？ファルロス。』

囚人服のちびっ子は、いつからから背後にいた。

「気付いてたんだね。」

「気になったから、様子を見に来たんだ。」

『ふーん、……待てよ？』

ファルロスって、《前の世界》の記憶とかあるの？

『《ニユクス》の記憶。』

「あるよ。」

その上で、前と同じように桜の所に行ってるんだけど。」

『うちの悩んでた事、分かってるよね？』

分かってる。こいつなら絶対。

『夏休み。』

一緒に屋久島旅行に行つて。』

「桜に気付かれないかな？」

『うちが呼ぶから、その時に出て来て。』

いきなり押し掛けても、信じて貰える可能性は低いだろうから。』

出て来た時に、粗方話す。

そう言えば、何を思ったかのこのちびっ子。

スタスタと歩いてきて、うちの背中に手を当ててきた。

この世界に呼んだ時と、全く同じように。

『……………っ!?!?』

ドクン、と1度心臓が波打つ。

後ろを振り向いても、もうファルロスはいなかった。

『どく…ん…?!?』

《(ちゃんといるよ。)》

突然、頭の中でファルロスの声がした。

『ちよっ、まさか！』

うちの中に入ったっての!?!?』

《(うん。》

桜の所にも、ちゃんと行けるけどね。()》

『ストップ！今すぐ出て行け！』

あんたは桜ん中にいなきゃ駄目だろーが!』

《(大丈夫。》

桜と所にいるのとは、変わりはないから。()》

『意味が分からんわ！』

とにかく出て行け〜!』

クスクス笑ってるけど、冗談じゃない！

アースもなんか大人しいし！

《(君が言ったんだよ。
一緒に来てほしいって。)

『意味違う！』

『アースも何か言ってよ！』

《彼、すっかり大人しくなったね。ずっと睨まれてばかりだったんだ。》

『いつまで居座る気？』

《(僕が出て行ける時、かな。

それまで桜と君、両方にお世話になるよ。)

『っ…。勝手にしたら！？』

もう、こうなりやヤケだ！

何が何でも変えてやる！

住民が増えました。(後書き)

ファルロスは任意で桜と佳織の所を行き来できるらしいです。

わんこは愛でる生き物！（前書き）

今回はちよいと短い。

題名通り、白いモフモフ犬が出て来ます。

わんこは愛でる生き物！

学校帰り、うちは小一時間程、辰巳神社にいた。

目的は…

『君がコロ丸？』

目の前の白いモフモフに聞くと元気な返事が返って来た。

『うち、高瀬佳織って名前。

宜しく、コロ丸！』

「ワンッ！」

『くうく、可愛いなあ！

なでなでしてもOK？』

「ワフッ。」

尻尾をパタパタするコロ丸。

この子もハ○に負けない忠犬だよね。

『うわ、くすぐったいってば！』

どうやら懐かれたみたい。

嬉しいね、うん。

「ワフッ！」

『ん、どしたの?』

スカートをクイクイと引つ張られる。

どうやら、「ついて来い」と言う事らしい。

素直について行くと、神社の物陰に入った。

コロ丸がそこで賽銭箱の方を向いてお座りしたから、うちも倣って様子を見る。

『(あ。。。)』

遠くでよく見えなかったけど、参拝している1人の子供が見えた。

パーカーを着た、薄い茶髪の男子。

『天田、健。。。』

「クウーン。」

『気になる?』

あの子も、大事な人がいなくなっちゃったんだ。』

声を掛けたいけど、そういう訳にもいかない。

天田が参拝し終わるまで、こちらは動かなかった。

『ねえ、コロ丸。』

「ワフ?」

『憎しみって、嫌な感情だね。』

「ワフウ…。ワンッ！」

『あ、ちよつとコロ丸！

どこ行くの!?!』

急に走り出すから、急いで後を追うけど…。

『ハア…ハア。』

もう、コロ丸ってばどこに行ったのかな…?』

流石わんころ、追いつける筈がない。

「ワン!ワンッ!」

「うわっ!」

とか言ってるんじゃないみたい。

誰かにぶつかったのかな?

『コロ丸?そこ…』

「ワンッ!」

コロ丸は乗っかっていた。

…天田の上に。

『（派手にやったな…じゃなくて！）
君、大丈夫？』

「いたた…、大丈夫です。
お姉さんの飼い犬ですか？」

『ううん、神社に住んでる子なの。
うちは、この子と一緒に遊んでいただけ。
コロ丸、戻っといで。』

大人しく天田の上から降りたコロ丸は、うちの隣に来る。

「驚きました。
突然飛びかかって来たんです。」

『そうなんだ、怪我してない？』

ありません。と言って天田は立ち上がる。
無駄に大人びてるな、このちびっ子。

それに、相手は小学5年。
言っっちゃ悪いけど、ちびっ子だよ。
色んな意味で。

『君、さっきお参りに来てたでしょ？』

「え！どうして知ってるんですか？」

『見かけたんだ、熱心にお参りしてたよね。
何をお願いしてたの？』

「…貴方には関係ありません。
失礼します。」

一礼して、通り過ぎようとする天田。
今、言わなきゃいけない気がした。

『捨てないと後悔するよ。憎しみなんて。』

「!？」

「ワンワンッ！」

『こら、待てコロ丸！』

じゃ、またね少年！』

驚く天田をその場に残して、うちは走り出したコロ丸を追いかけた。

『ハア…ハア。』

『コロ丸どこ行ったんだよ〜!』

本日2回目。

疲れてきたから、歩きながらコロ丸の散歩ルートを思い出す。

『確か、巖戸台分寮が散歩ルートに入ってたから…待ってれば来るかな?』

テクテクと歩いていると。

案の定、ゆかりや桜と戯れるコロ丸を見つけた。

「あれ、佳織。」

『あ〜、やっと見つけた。』

『コロ丸、置いてけぼりとか酷くない?』

「クウーン…。」

ペタリと尻尾が垂れる。

『まあ、別に怒ってる訳じゃないよ?』

『また一緒に遊ぼうか。』

「ワンッ!」

すかさず、尻尾がブンブンと振られる。

『…何、この可愛い生物!』

2人共、後は任せた！
バイバイ、コロ丸。』

抱き締めたい衝動を頑張って抑える。

寂しそうなコロ丸を置いて庵に帰った。

部屋に入って、ベッドにダイブ。

とりあえず、次の満月までは動きません。

当然、うちは討伐にも行かない。行きたくない。

今度こそストレガ（チドリ込み）に会いに行く。

『あの「ハイエロフロント」と「ラヴァーズ」には近付きたくない。』

色々嫌だし、巻き添え喰らいたくないし。』

そんな理由でお休みなさい。

わんこは愛でる生き物！（後書き）

次回は満月の大型シャドウ戦です。

閑話休題…キャラ紹介！（前書き）

短く、佳織の紹介。

他のメンバーは公式設定通り。

閑話休題…キャラ紹介！

『こんにちは！準主人公（？）の高瀬佳織ツス！
今回は記念すべき30話という訳で、今更ながら登場キャラをお話
します！』

「でも、私達S・E・E・Sの事は話すつもり無いよね？
それに、なんでこんなに遅かったの？」

『（ギクウ！）
な、何の事かなー？

桜も早く戻りなよ、授業やってるじゃん！
ついでに、それに関してはうち知らないし。』

「後で聞かせてね…？」

『り、了解…リーダー。』

（怖っ！桜ってこんなキャラだっけ！？）
えっと…では気を取り直して、紹介！』

?…《高瀬佳織》

『うちは高瀬佳織！
…え？《名前はいいから次にいけ》って？
はい…。（泣）』

トリップ前は高校1年。
トリップ後は高校2年。
ちなみに、年は16歳ね。

で、身長が165センチ。体重は設定では45キロ。

…「設定では」だからね！

勘違いしないでよ!?

好きな食べ物は魚介類。

趣味は…読書とゲームと昼寝かな。

ハマってるゲームは、当然《ペルソナ3ポータル》！

好きなキャラはアイギスとコロ丸。

嫌いなのは幾月。

見ただけで鳥肌立つよ！

初期っつーか、使用ペルソナは《アース》。

…こんなところかな。

じゃ、次!』

?…《ペルソナ、アース》

『いやあ、アースが出て来た時はマジびっくりしたよ。

え?何アース、その冷めた視線…。

はいはい、紹介しますってば。

えーっど何々…?

《「宇宙樹ユグドラシル」と呼ばれる世界の住人。

(北欧神話より)

ユグドラシルの中でも最上部に位置する世界「アースガルド」にいた「アース神族」の末裔。

…へえー、そうなんだ。

性格は若干喧嘩っ早いけど、普段は冷静。

得意属性は雷と疾風、補助系。

回復系はちょっと出来る。

弱点属性は闇。

反射は斬撃、無効は炎。
ほぼ全属性のスキル使用可能。
オリジナルスキル有り。》

……何これチート？

ま、うちの訳だし、頑張って使いこなさなきゃな！
これからも宜しく！』

?…《アルカナ、混沌》

『これだけは、全つ然分かんないんだよね。』

敢えて言うなら…：そうだなあ、“擬似ワールド”って感じなのかな？
こついう時こそ、エリザベスを…：…いないし。(チツ)
それにしても、《??》つつう数字が気になる…。

あ、分かん！

…：…ていうか、キャラじゃないじゃん！』

「ていうか、何1人で喋ってるのよ？」

『どわっ、ゆかり！』

「びつくりしすぎ。」

ねえ、1個聞きたい事があるんだけど。」

『?..?』

「寮が襲われた日、佳織って召喚器無しでアースを召喚したの？」

『あ、それは言わない。』

ネタバレ禁止。』

「…分かったわよ。」

桜が待つてたから、早くそのマイク置いたら？」

『ムスーッ。』

「膨れっ面しないの。」

ほら、行くよ。」

『ほーい。』

あ、ちなみにこの作品自体に関する説明。

なるべく原作沿いだけど、オリジナル込みだから読むのはゲーム自体をプレイした人か、流れだけでも知ってるのが良いと思う。

まあ、頑張って書くらしいけどね。』

「誰に説明してんのよ?」

『名も知らぬ皆様。』

「ハア?」

『別に良いじゃん。』

んじゃ、今日はこの辺で!』

「もう、脱走しないのー!」

閑話休題… キャラ紹介！（後書き）

次は7月の大型シャドウ戦。

満月の大型シャドウ戦！ 法王&恋愛 1（前書き）

暗いのが、途中からもっと暗くなります。

満月の大型シャドウ戦！ 法王&恋愛 1

7月7日、巖戸台分寮作戦室

3度目の大型シャドウ戦の日、全員集まった作戦室で桜は携帯を片手に電話していた。

相手は、佳織。

学校をここ数日体調不良で休んでいる彼女が心配だった。電話越しの声には、覇気が感じられなかった。

「大丈夫？佳織…。」

『《ゲホッ、それほど酷くはないから大丈夫なんだけど…ごめんね。》
「」

「うっん、無理しないで。
今度は頑張って貰うからね？」

『《分かってるってば。
…桜、状態異常の回復アイテムとか、持ってる？》』

「沢山買ったよ。」

絶対に討伐するから、安心して待ってて。」

『《おー…、頑張れ。
じゃ、そろそろ寝るね。》』

「うん、お休みなさい。」

『《お休みな〜。》』

ピッ。

「高瀬の様子は、どうだった？」

通話終了と同時に、気遣わしげに美鶴が尋ねて来る。

「本人は大丈夫って言ってましたけど、やっぱり辛そうでした。」

無理して笑顔を浮かべているだろう佳織を想像し、苦笑いする。

「あいつも、戦力としては大きいからな…いないと少し物足りないな。」

「…真田先輩、オレらじゃ駄目ですか？」

腕組みして呟く真田に、順平が軽く噛みつく。
瞳に「不満だ」と言うような色を宿して。

「…いや、そんな事はないさ。」

高瀬、今回のメンバーはどうする？」

「今回はゆかり、真田先輩、美鶴先輩で行こうと思います。」

メンバーが指名され終わると同時に、順平が立ち上がった。

「…なんでオレが入ってねーんだよ？」

「え？なんでって…。」

だって順平は、前回討伐に参加したでしょ？

今回は美鶴先輩とゆかりを優先して、それと攻撃を真田先輩に補っても「じゃあ、たまには桜が抜けりゃ良いじゃねーか。」「…順平？」

普段の彼なら言わないような言葉に桜は驚き、ゆかりは眉を顰める。

「伊織、不満はあるだろうが今回は我慢してくれ。」

それに、神崎がリーダーだというのは変わらないぞ。」「

「俺がお前の分も戦つさ。」

だからお前は待機だ。」

分かつたな？」

「……ういッス。」

先輩2人に諫められても、順平は顔をしかめたまま渋々ソファアに座る。

重くなった場の空気を壊すように、美鶴が立ち上がる。

「よし、メンバーは決まった。」

山岸、シャドウの居場所は分かるか？」

既にルキアを召喚し、サーチをしている風花は一層意識を集中する。

《……見つけました！》

場所は、白河通りのホテル街です！》

同時刻、安息庵

『ゲホ、ゲホッ…。』

うー、タイミング悪い。

さっさと治ると思ったんだけどなあ…。』

うちはここ数日、風邪でノックアウトしていた。

原因は風邪を引く前日に遡る。

桜の部屋に遊びに行った時、ラウンジで見ってしまった。

……風花の料理姿を。

嫌な予感というのは、当たらなくていい時に当たる物で、案の定その場にいた桜と一緒に料理の毒…もとい試食を頼まれてしまった。

『ヤバいのは分かってたけど、まさか実際に食べなきゃいけないとはね…。』

三途の川が見えたよ、マジで。』

これは、某女子高生女将&カンフー少女の作った《ムドオンカレー》
《>といい勝負だと思った。

あの時、切実に思った事はただ1つ。

（早く荒垣先輩、加入して下さい…！
可哀想な材料達の為にも！）

それだけ考えて、気がついたら部屋でベッドに横たわっていた。

（桜は耐性出来てたんだろうな…。

風花の料理姿見た時には

「ああ、試食かな…。」

みたいな全てを悟った顔してたし！

それに比べて、うちは風邪まで引くし…。）

しかし、願わくば2度とは食べたくない。

今度食べたら、確実にうちは死ぬ。

『まあ、ちょうど良かったんだけどね…。

「ハイエロフロント」はともかく、「ラヴァーズ」には会いたく
なかったし。

今頃、修羅場だろうな…。」

濡れタオルを替えながら、あのラブホでの騒動を想像する。

『確かラヴァーズの精神攻撃で分断されて、頑張って正気に戻って、
女性メンバーの皆様がキレて…。

…眠いや、寝よう。』

コップの飲料水を飲み干して、もぞもぞとベッドに潜り込んだ。

気がつくとうちは病院にいた。いや、いたのは《もう1人の高瀬佳織》。

いきなりで辺りを見回してみるも、いつもより高い視線の位置に違和感を感じざるを得なかった。

いや、違和感どころの騒ぎじゃない。

『何だよ、これ…。』

自分より、目の前の光景に目を疑った。

月高制服姿のうちの幽霊の様に透けていて、体は空中に浮いていて。

何よりも、何よりも…

『…なんでっ、なんでうちが死んでるの!?!?』

元いた世界の、見慣れた高校の制服を着た《高瀬佳織》の顔には、白い布が掛かっていた。

周りには、家族・学校の先生・仲の良かった友達がいて…。

1人の女子生徒が、《死んだらしいうち》に向かって何か叫んでいた。

微かにしか聞き取れなかった言葉は、悲痛な慟哭。

「佳織っ、嘘だよね!？」

今だって起きてんでしょ!

約束したよね、ゲーム返してっ!

勝手に約束破らないでよ、目え開けてよ!!!」

体を揺さぶり続ける彼女から皆が目を逸らす。

佳織、佳織、と名前を呼び続ける親友。

反射的に声を上げた。

『っ……風!』

『うちはここだよ、ここにいる!』

木野宮 凧。

幼なじみで、ツッコミが激しくて、ゲーム好きでも頭が良くてでも授業中には熱中するゲームの攻略の事しか考えない。ある意味尊敬すべき、うち以上のオタク。

その凧が、目を真っ赤に腫らして泣いている。

「こんな展開、ゲームだけで充分だよ！

私、佳織の死んだ顔なんて見たくなかった！」

そう言っつて、うちに泣きながらしがみつく。

医師に《母さん》が詰め寄る。

死因は何なのか、どうして私達の子を助けられなかったのか。凧以上に悲しみを含んだ声で、凄く後悔した様な声。

胸が引き裂かれそうになった。

母さんから思わず目を逸らすと、医師の側に飛んで行って、うちはカルテを覗き込んだ。

高瀬佳織 16歳

死因：不明

死亡推定時刻：7月21日、午後7頃

備考：外部、内部共に損傷は見られず。

薬物乱用の痕跡、毒物の痕跡も見当たらず。

『これじゃ、いきなりパタッて死んだみたいなきき方…。』

あの日は、結構な時間を掛けて主人公の名前を決めた。
そしてファルロスに会い、《こつち》に来た。

なら、ファルロスに会った直後に、うちは死んだ？

(どこぞの２次元夢小説じゃあるまいし…そんな事…！)

途端に、意識が消えそうになった。

ナイフで切り刻む様な…スタスタになる様な痛みと共に。

『う、あつ…！痛つ…！』

思わず体を掻き抱く。

涙が出そうになる。

どうしてこんな風にならなければいけない？

うちは、よくある夢小説みたいに“トリップがしたい”と望んだ訳
じゃない。

ハマっていたゲームの世界を目の前にして、浮かれていたのは事実。

それでもあの日常は楽しくて、不満も成績以外は無く、普通の高
校生として過ごしていた。

――過ごしていたかった。

『おかあ、さん…！風っ！』

嫌だ、気付いてよ…！』

消えかけた手を伸ばす。

でも叫びは届く訳無くて、うちは…“消えた”。

視界が黒に染まる直前に、凧と目が合った気がした…。

満月の大型シャドウ戦！ 法王&恋愛 1（後書き）

起承転結。

転くらしいの感じでしょうか。

S a i d e … 木野宮 凧 (間奏) (前書き)

佳織の死亡。

今回は凧側の視点。

S a i d e … 木野宮 凧 (間奏)

私には幼なじみがいたんだよ。

名前は高瀬佳織。

ゲーム仲間で、保育園の頃からいつも傍にいて。

危なっかしくて勉強しなくて、私がいないと何するか分かんなくて、悪戯好きのバカみたいに明るい親友。

家は離れてたけど、私達は常に傍にいた。

…それが、崩れた。

1本の電話で。

「佳織が倒れたって、どういう事…?」

嘘だよね、おばさん…?」

《今、救急車で病院に運んだの。

凧ちゃんも来て…。》

貴方が、あの子には必要だから。》

親に事情を話して、すぐに市の病院に向かった。
嫌な予感が当たらない事を祈りながら。

病院に着いて、真っ先に佳織の病室に駆け込んだ。

「おばさん、おじさんっ！」

佳織は、佳織は…!？」

ベッドに横たわる彼女を、本能が“目覚めさせる”と叫ぶ。
酸素マスクを付け、いろんな機械に囲まれて意識の無い佳織。

傍にあつた椅子に座って、手を握り締めて彼女を呼ぶ。

「なんで、佳織がこんな風に？」

「…分からないの。」

おばさん、晚ご飯が出来て、この子を呼んだんだけど…返事が無くてね。

よく昼寝で寝過ぎすから、大して気にしなかったの。
でも2時間経つても来ないから呼びに行ったら…。」

「倒れていたんですか？」

ええ。と頷くおばさん。

それからは、私も知る通しだと言う。

「学校の先生には連絡したの。」

凧ちゃん、この子のお友達に連絡してくれないかしら？」

「え？だって、佳織は別に死んだ訳じゃないし…原因だって、分かるでしょ？」

「それは…。」

言い淀むおばさんの姿を見ていられなくなったのか、代わりにおじさんが教えてくれた。

「この子は病気じゃないんだ。」

原因不明…なんだよ。」

「原因、不明って…。」

頭が真っ白になる。

佳織の顔を見て、最悪の事を想像してしまふ。

「助かる…んですよね？」

佳織、大丈夫ですよね！？」

「これから精密検査をするって、お医者さんが。」

私達の子はしぶといから、最悪の事態は無いわよ。」

弱々しい心臓の鼓動。

機械のピッ、ピッ、という音だけが佳織の全てに思えてしまう。

「わ、私…皆に電話してきます！」

考えたくなくて、逃げる様に病室を出た。

「死なないで…佳織…。」

中庭に出て、震える指で仲の良いクラスメイト達に電話を掛けていく。

皆、驚いていたけど

「すぐに行く。待ってて。」

と言ってくれた。

「私は、佳織を誰よりも知ってる。

この位なら、あの子は跳ね返す…。」

信じたくて、何度も繰り返す。

また、すぐに戻って来る。

病室に戻りながら、ずっとそれだけ考えていた。

「あれ、佳織…?」

病室に入ったら、見当たらなくなっていた佳織。

(まさか…!)

死。

「無い、絶対無い!」

帰りを待とう。

そう思って、椅子に座る。

すると、病室のドアが開いておばさんが帰って来た。

「凧ちゃん、電話終わったの?」

「はい。」

おばさん、佳織は…」

「心配しないで。」

精密検査を受けている最中だから、1時間後に結果は出るみたい。」

「そっなんだ…。」

肩の力が抜ける。

安堵を見てとつたのか、おばさんが椅子をもう一つ出して隣に座った。

お互いに会話も無く、カチカチと壁の時計が時を刻む。やる事が無くて、私は携帯のメールボックスを開いた。

受信は殆どが佳織からで、内容はゲーム攻略が7割。

《「ペルソナの新作が出たよ！
私はゲット！」》

《「金欠でPSPが買えないんだけど！」》

《「お小遣い貯めようよ。
楽しいよ〜？」》

《「うわぁあん！（TOT）
風の貸してえ！」》

《「や・だ（（「《

《「（。；）Why!?!」》

こんな、バカみたいなメールが楽しかった。
つつい、笑みが零れる。

と、マナーモードに設定した携帯にメールが受信された。

《宛先：not name

件名：not title

本文：今までありがとう、凧。感謝してるよ。》

ーカタン。

「凧ちゃん？」「佳織…？」「…？」

短い文面。

心臓の鼓動がうるさい。

だけど、私は頭が何も考えれなくなって、無我夢中で病院を飛び出した。

向かうのは、集中治療室。

おばさんの声も、院内を走る私を咎めるナースさんの声も聞こえない。

宛先不明なのに、私のメールボックスに届いたメール。

“今まで”という不吉な言葉。

指し示すのはー。

「佳織っ！！」

《使用中》のランプも気にせず、私は扉を壊す勢いで入った。

(実際にバキツと音がしたけど。)
一斉に振り返ったお医者さんやナースさんの視線を受け、私は一番偉そうな人の元に行く。

「君、入って来たら「佳織は大丈夫ですよね!？」今、検査中だよ。」

私の顔が相当青ざめていたのか、責任者さん(?)は声音を変えた。

血圧を計る機械や、心電図の機械を見る。

心電図の線が、波を描かなくなり始めていた。

医療系大学の志望し、医療をかじっている私は、微かに分かった。

——佳織の心臓が、止まり掛けている。

(嫌、嫌っ…!)

こういう時、なんだと思った。

普段は信じない神様とかに人は縋る。

目の前にいる親友は、眠っている様にしか見えない。

今にも

『あれ? 風だ、おはよー。もう朝?』

とか言っただけで起き出しそうなのに。

1人のお医者さんが、状態悪化を告げる。

慌ただしくなる室内。

私は、何も言わずに廊下に出された。

扉は私が壊したから、後で修理費とか請求されるだろう。

気にはならなかった。

ストレッチャーに乗せられた佳織が、病室に戻って行く。

さっきのお医者さんが、私の所に来て…告げた。

「彼女を…看取ってあげて下さい。」

脳に響いた言葉の後は、覚えていない。
はつきりした、彼女の重い《死の宣告》。

浮かんだのは、佳織の笑顔だった。

学校の先生・友達・おばさん達家族のいる部屋の中心で、私が病室に駆け戻った瞬間…

プー…。

「7月21日。午後10時35分…。
残念です。」

私達の時間が…止まった。

分からなかった。

佳織の《死》は、私には理解しなくなかった。

フラフラと、白い布を被せられた佳織に近づく。
手を取ると、まだ温かい。

それでも、瞼は開かなくて…手は温かさを失って。
《佳織の死》を理解した瞬間、私は叫んでいた。

「佳織っ、嘘だよね!?!
今だって起きてんでしょ!
約束したよね、ゲーム返してって!
勝手に約束破らないでよ、目え開けてよ!?!」

我を忘れて佳織を呼び続ける。

信じたくない。

嘘に決まっている。

これは、悪い夢。

そう思いたくても、周りの皆の泣く声が《現実》だと言う。

ふと、さっき落としたままだった携帯のメール受信画面が見えた。

《『今までありがとう、凧。感謝してるよ。』》

「佳織っ…!!」

床に座り込んで、携帯を握り締める。

もう、一緒にいられない。

もう、佳織の声が聞けない。

もうー…。

《『凧っ!~!』》

バツ、と顔を上げる。

後ろを振り返るけど、おばさんの悲しそうな姿しか無かった。

筈なのに、泣いていた。

佳織が、辛そうな顔で泣いていたのが見えた気がした。

ポタリ、と画面に落ちた涙は、多分佳織の涙だった気がする。

S a i d e … 木野宮 凧 (間奏) (後書き)

死は、避けられない。

遅かれ早かれ、平等にやって来る。

満月の大型シャドウ戦！ 法王&恋愛 2（前書き）

夢で誰かが死ぬって、あんまり気分の良い物じゃ無いですね。

満月の大型シャドウ戦！ 法王&恋愛 2

『凧…お母さん…。』

影時間。

目を覚ましたうちは、知らず知らずの内に泣いていた。
浮かぶのは、疑問と皆の涙。

どうして、向こうのうちは死んでいる？
夢だと思い、また会えると思っていた。
なのに、この虚無感は何？

寝汗で濡れたパジャマを替えようとベッドから出る。
けど、体に力が入らずに床へ落ちた。

『っ…！…凧…。』

夢で見た、凧の泣き顔。
思い出すだけで辛くなる。

『気付いて、くれたのかな…。』

床に転がったまま、ボンヤリと思う。
あんな凧の顔は、何年振りだろう。
滅多に泣かない、うちの親友。

『見たく…なかった。』

凧には、笑っていてって…言ったのに…。』

お互いの進む道が違えど、こちらは一緒だと約束したのは、いつだった？

テーブルに手を着いて、立ち上がる。

なんとか着替えて、再びベッドに体を沈めると額に冷たい感触が広がった。

うつすらと開けた目が捉えたのは、勝手に居着いた囚人服のちびっ子。

『ん…ファルロス…？』

「大丈夫？」

『あはは…サンキュ…』

ファルロスの冷たい手が、火照った額から熱を奪っていくのが心地良い。

「佳織。」

『ん…？』

「元の世界に、帰りたい？」

『…！』

いきなり爆弾。

目を見開いたうちに、ファルロスは言った。

「まだ、間に合うよ。」

向こうの君は、心臓が停止しただけだから。
今なら…まだ。」

『それって…』

「今なら、選択肢がある。

《元の世界に帰る》のか、《この世界に居続ける》か。」

帰れる。

凧や、お母さんのいる家に。

あの平和過ぎる日常に。

思わず口が開き掛ける。

が、同時に桜や皆の顔が浮かぶ。

『ファルロス…うちが帰ったとして、皆は…』

「また、同じ道筋を辿る可能性もあるね。

けど、君が関わり続ける義務は無い。」

『じゃあ、なんで…!』

起き上がって、ファルロスを睨む。

『なんで、どうしてうちを連れて来た！

うちが死ぬって、ああなるって分かったの!?!』

怒りをそのままに怒鳴る。

『そもそも、ストーリー通りならばバッドエンドじゃない！

《大晦日の選択》で、ああなるのを避けるのも可能だろ！？」

「…影時間が明けるまでに決めて。」

うちから顔を背けたファルロスが言う。

《帰る》か《帰らないか》を、決めなければならない。

「なんで…。」

なんでさ、ファルロス…。」

「…君が死ぬのは、僕にも予想外だったんだ。だから、今なら君を帰してあげられる。」

ゲームでは、《謎の少年コミュ》のランクマックスの時で見せない悲しげな表情。

まるで、自分に責任があると言う様な瞳の色。

「よく考えて。」

それだけ言って、ファルロスは消えた。

『うちが帰るには《今日》しかチャンスが無いってか…。』

影時間が明ければ日付は変わってしまう。
迷う時間は残って無い。

『ははっ…キツいよ…』

住織が部屋で葛藤している頃、桜達は「ラヴァーズ」の精神攻撃から脱し、再び《法王の間》を目指していた。

ちなみに、ゆかりと美鶴は酷くご立腹である。
桜はそこまでもないが。

「ああー！もう！

ほんっと腹立つんだから！」

「倍返し…いや、3倍返しだな。」

「（うわ…2人共、殺気が…。）」

真田先輩は桐条先輩に《処刑》されちゃうし、私は私で大変な目に合うしで、今回の討伐は散々。

女性メンバー2人のせいで真田先輩とか完全に小さくなって…。

(元を正せば、ラヴァーズかな?)

そんな訳で、向かう所に敵無し。

私が指示を…というか、風花が教えてくれる前に、目に付く場所にスキルを叩き込んでいく。

しかも、見事にシャドウがいる場所ばかり。

(わ、なんかデジャヴ。)

私今回、要らなかったんじゃないかな…なんて思ったり。

あっという間に目的地に到着。

桐条先輩が扉を蹴破る。

先輩、手で開けて下さいね…。

ハートみたいな形のシャドウの「ラヴァーズ」が、戦闘開始と共に圧されていく。

《エンジェルアロー》とか、《マリソリン》と言った魅了系のスキルも、多めに買っておいたアイテムのお陰で怖くない。

最終的には、私達の勝利。

皆のペルソナもレベルアップしたし、またベルベットルームで合体しようかな。

さて、待機メンバーや佳織にも無事に討伐したって伝えなきゃね！

満月の大型シャドウ戦！ 法王&恋愛 2（後書き）

今回、台詞無しの真田先輩。
（笑）

満月の大型シャドウ戦！ 法王&恋愛 3

「あ、桜ちゃん！」

「ただいま、風花に順平。
無事に討伐出来たよ。」

「良かったあ。
流石リーダーだね！」

「…別に、大型シャドウなんか大した相手でもねーのによ。」

ガキくさ。と順平が呟く。

同時に、ゆかりが目くじらを立てる。

「順平、そんな事言わなくても良いでしょ！」

「…どうだか。」

「あんだねえ…！」

「ストップ、ちょっと待つてよ！」

慌てて止めに入る。

ゆかりはまだ何か言いたげだったけど、私に場所を譲ってくれた。

（もしかしたら、順平はメンバーにならなかった事を怒ってるのかも。）

だとしたら謝らなきや。
私のせいだしね。

「今日はごめんね、順平。
今度は討伐に加わって貰えない？」

「…情けかよ。
リーダー様々だよな、いつも頼られて。
自分の好きな様にメンバー決めれるもんな。」

不機嫌の直らない順平が、さっさと歩き出す。
私はこれ以上の言葉が思い付かず、この日は重い雰囲気のまま寮に
帰った。

(順平は…私を…。)

影時間が明けそうな頃、うちはファルロスを呼び出した。

「…答えは決まった？」

『その前に、聞いて良い？
うちの…アルカナについて「今は、その時じゃないよ。」どうして

？』

「今の僕が聞く事は一つ。

《君がどうしたいか》って事だけだよ。

決まったんでしょ？」

正面に立った蒼の瞳が、うちを映す。

ベッドに座ったまま、手を膝の上で組む。

静かに息を吐いて、うちは自分の結論を伝えた。

『《帰らない。》

…忘れてたんだよね。

昔：小学3年だったかな。

凧と約束していたんだ。

《私達のやりたい事を頑張ってやろう！》ってね。

無期限の、うちらだけの約束。』

小さく笑って、うちは首に掛けた金色のロケットを出す。

高校の入学祝いに買った、色違いのロケット。

凧は銀色を持ってる。

中には、高校の制服を着た、うちの写真が収まってる。

『《何が何でもやり通す》のが、うちのモットーだったのに…いつの間にか忘れてた。

そりゃ、《帰りたい》のも本心だよ？

けど、こんな中途半端で帰るのも許せないし、凧が許してくれそうに無い。』

だから、やり通す。

ゲームとか頼まれたからとか、もうそんなん知るか！

『やりたい様にやって…、んで《ハッピーエンド》にする。
これが、うちの答え。』

悪い？とファルロスを見つめる。

一言も言わずに聞いていたちびっ子は、いきなり笑い出した。

「フフツ、佳織らしいね。」

本当に、君は昔から変わらないや。」

『……………は？』

今あんた、なんだった？』

「佳織らしいね。”って『その後！』せっかちだなあ。」

せっかちとか違うでしょ！？

ファルロスの台詞、まるでうちを昔から知っていたみたいな

「知ってたよ？」

『人の考え、勝手に読まないでくれる！？』

ファルロスが読心術使えるなんて設定知らんよ！？

「アハハ、面白いね。」

でも、実を言うと安心したよ。
最近の佳織は不安定だったから。」

『ファルロスって、なんか…はっちゃけてない？』

キャラが違う気がする。

間違いなく。

うちの知るファルロスは大人しかったもん！

「君ならやれるよ。」

僕は、役割を全うする。」

『どうも。』

ま、とりあえずは喧嘩中の2人をなんとかするよ。』

「屋久島の時に、また呼んで。

それまでは桜の所にいるから。」

『分かった。』

って、アース！ファルロス睨むな！

（マジ嫌いなんだね…。）』

こいつ等、大丈夫かよ…？お姉ちゃんは不安です。

満月の大型シャドウ戦！ 法王&恋愛 3（後書き）

次回からは期末テスト。

仲裁も、補欠の役目？（前書き）

ついに、風邪から復活した佳織です。

仲裁も、補欠の役目？

7月8日。天気は快晴。

やっと回復出来たうちの気分は晴れなんだけど、とある2人の間は曇りなんだな。

我等がリーダーと、順平。

揉めたつつか、亀裂の原因は分かる。

(無意識の男女差別…。)

ハア、と溜め息を吐く。

学校でもギスギスしてるし…しよーがないな。

『桜、ちよつと。』

ちよこつと顔をドアから覗かせて手招きする。

「佳織！

もう大丈夫なの！？」

心配してくれるのは有り難いんだけど、ね。

廊下に呼び出したから、順平には聞こえない。

『桜、何かあった？

こここの所…随分空気が悪い様に感じるけど。』

「実はね……。」

『ふんふん、なるほど…。』

「どっしりよっ…っ」

『ほっときなよ。』

(どっちがガキくさいんだかな。)
しばらく様子見て、それでも駄目なら…「ゴニョゴニョ」。

ある事を耳打ちする。

「えっ！」

驚く桜の肩を、ポンと叩く。

『だいじょーぶ。』

その時は、うちも付いてく。』

「うん、分かった。」

(うちは保健室で薬でも飲んで来るかな…。)

桜にマル秘作戦を伝えて、保健室に向かう。
あの薬って、何が混じってるんだよ…？

コンコン。

『失礼しまーす。』

「どうしましたか、ヒヒヒ。」

『えっと、風邪気味で体調不良なので…。』

（やっぱり慣れないよ、この先生…。。）『』

紙コップ入りの、怪しい飲み薬。

（某テニス漫画の部員特製汁よりマシだと思っ。）

見た目からヤバいけど、頑張っつて飲み干す。

『（…不味い…！）』

ケホ、有り難う御座います…。』

「じゃ、お大事に。」

待ちに待った昼休み！
と言いたいが、今度は順平を呼び出します。

『順平、今空いてる？』

「…何だよ、飯食ってんだけど。」

『そだね、ごめん。』

じゃ、放課後に校門前で待ち合わせ。』

拒否権無しね。と言って、購買に向かう。

ゆっくり歩いてると、廊下で風花&理緒に遭遇。

『おーい、お二人さーん！』

「佳織ちゃん！

良かった。風邪治ったんだ！」

「あんたが風邪引いたって聞いた時はびっくりしたよ。
“バカは何か”なのにな？」

『理緒がさりげなく酷い！』

「冗談だつて。」

あんた、今日はお弁当じゃないんだ？」

『ご存知のとーり、風邪でダウンしてたからね。』

「佳織ちゃん、料理上手だもんね。」

「へえ、ちよつと意外。」

それはそうと、早く行かないと購買売り切れるよ。」

『わ、困るって！行ってくる！』

「気を付けてね！」

2人に手を振りつつ、購買にダッシュ。

ご飯抜きはお断り！

滑り込みセーフで、パン2つと紙パックの紅茶をゲット。
紅茶はミルク派ツス。

『モグモグ…』

そついや、またテストが来るなあ…。

また桜達と特訓かな。』

テストがあつて、次に屋久島旅行だから…まだ時間はある。

しかし、エリザベスにベルベートルムには桜と来いって言われたから…どうやって連れて行こう？

（延ばし延ばしには出来ないから、寝てる時に同時に呼んで貰うと楽なのになあ。）

クルクル、クルクルとシャーペンを回しながら授業を聞く。
隣の男子がうたた寝してたから消しゴムを投げてやった。

授業が終わって、さっそく順平の席に。

『順平、はがくれ行くよ。
今日は奢るから。』

校門前で待ち合わせだと、逃げられたら厄介。
強制的にはがくれへ。
ガシツと手首握ってやったら、順平は逃げようにも逃げれない。

カウンター席で、おっちゃんに《特製》を2つ頼む。
やがて目の前に置かれたラーメンに手を付けながら、うちは率直に
言っちゃった。

『悩みでもあるんじゃないの？
愚痴なら聞くけど。』

対して、順平は何も言わずにラーメンを啜る。

『（チツ、頑固者め。）
“どうして桜なのか？”
あんたは、これでイラついてんじゃない？』

チラツと隣を見ると、箸が止まった。

『そもそも本当に不服なら、1回代わりにリーダーやればいいじゃん。』

自信無いわけ？』

言い方は、敢えてキツくしてある。
これで順平が、どう反応するか…。

「あいつには似合わねーよ。」

『だけど、桜は“リーダー”を引き受けた。

タルタロスって《何が起こるか分からない所》で、それだけの重荷を背負ったんだよ。』

「けど、あん時あいつは逃げたじゃねーか。」

順平のいう“あん時”は、恐らく《刈り取る者》が出現した時を指す…と思う。

一呼吸置いて、気持ちを落ち着けて静かに話してみる。

（そうしないと、すぐ感情的になるんだ。）

『あれは仕方なかった。

あんなのに初っ端から遭遇したら、誰だって逃げるよ。』

どうしても認められないなら、と1枚の紙を渡す。

『この時にタルタロスに行ってみて。

うちは帰るよ、お金は置いとくから。』

素早く席を立って、はがくれを出る。

（さて…これが吉と出るか、凶と出るか…。）

まだ明るい午後の空を見上げる。

結局は、仲直りしてくれるのが一番なんだよね。

仲裁も、補欠の役目？（後書き）

マル秘作戦は、3分で考えたとか。
仕掛け人って奴ですね。

キーアイテムゲット…？（前書き）

なんか、拳で語る…みたいな回になりました。
夕日の見える浜辺じゃないですが。（笑）

キーアイテムゲット…？

あの紙切れを順平に渡し、桜にマル秘作戦を伝えた5日後。
タルタロスのエントランスは、ピリピリした空気に包まれていた。

数メートル分の距離を空けて、桜と順平が向かい合う。
いつも使用する武器は無く、召喚器だけを所持していた。

入口近くには、うちを含んだ残りのメンバーが揃い、2人を見守る。

「高瀬、あの2人は何を考えているんだ？」

こっそり耳打ちして来たのは美鶴先輩。

真田先輩も微妙に顔が怖い。

『時間制限付きの《決闘》…ですね。』

5分間、全力でペルソナだけで戦うんです。
もちろん、決着が付かなかったら止めに入ります。』

合図は風花に頼んでる。

ストップウォッチ（桐条製）で時間を測る。

『時間は5分だから。』

終わらなかつたら、皆で止めるよ！』

これが始まる前に回復アイテムとかは大量購入しといたから準備は
万端。

「それじゃあ…始めっ…！」

「オルフェウス《突撃》！」

「ヘルメス、《スラツシュ》だ！」

開始早々にお互いの物理スキルが激突。

ガギーン！なんて音がした。

2体が消えると、また召喚。

今度は桜の《アギラオ》と、順平の《アギラオ》。

周りに熱風が広がる。

美鶴先輩がちよつと後退。

（そついや氷結の先輩、弱点は火炎だったっけ。）

容赦ない攻防が続く。

オルフェウスの攻撃をヘルメスが火炎で牽制したり、背後を取ろうとしたヘルメスをオルフェウスが豎琴で間合いから出したり。

終わらなさそうな時、風花が5分を告げた。

「時間ですつ！」

だけど、2人は聞こえてないらしい。
しょうがないから1発かます。

『アース、《マハガル》！』

「うおお！？」

「きゃっ！」

軽めだったから、そこまではダメージ無い筈。

目を丸くしていたゆかりが、慌ててイオを喚んで《メディア》を掛ける。

桜に手を貸しているのを横目で見ながら、順平を立たせる。

『気が済んだ？』

聞いてみると、順平はどことなく清々しい顔をしていた。

「…やっぱりスゲーな。」

あいつ、オレの攻撃を全部見切ってやがった。」

そう言うと微かに笑って、桜の所に向かった。

（大丈夫みたいだね。）

安心して、うちは風花達の所に戻る。

「あの、さ。悪かったよ。」

正直……嫉妬してたんだ。」

気まずそうに話す順平に、桜は笑いかける。
私こそ、ごめんね。という声が聞こえた。

「なんで桜が謝るんだよ？」

「なんだか、分かる気がする。
こういうのって、男の人がやる役目だと思ってたから、“私で大丈
夫かな”って頭の中でずっと考えてた。」

『順平。』

“似合うかどうか”って問題じゃないの、分かったよね?』

「ああ。

桜、キツイ事言っちゃまって本当に悪かった。
また、一緒に戦わせてくれるか?」

「…もちろんだよ!

これからも宜しく、順平!」

仲直りした後、うちは桜だけを呼び止めた。
エントランスには桜以外のメンバーは居ない。

「話?明日じゃ」『ごめんね、今話したい事なんだ。』「そうなの?」

ちよつと付き合って。

そう言って、桜を誘導する。

… エントランスの左奥に。

「え… 佳織？」

困惑する桜は気にせず、うちはベルベットルームの扉の前で意識を集中させた。

久々のベルベットルーム。

いつもと違うのは、右に桜が座っている… という事。

「お久しぶりです、佳織様。」

『元気そうだなにより。』

エリザベス。』

「ようこそ、ベルベットルームへ。」

『久しぶり、イゴール。』

んで、桜も連れて来たけど… 何か話でもあるの？』

本人は、頭上にハテナを浮かべている。

ついでに、うちもイゴール達の考えている事が分からん。

「まあ、無理もないですな。」

イゴールが軽く笑った。

それから、エリザベスに声を掛ける。

未だによく分かってない桜に、うちのペルソナ全書を見せた。

「これ…私のと、」

『うん、全部同じ。』

ちなみに、うちは《ワイルド》ではないんだけどね。』

「だったら、どうして?」

「それは、私達をご説明します。」

桜の疑問にエリザベスが答えた。

ここからの話は長ったらしかったので、以下略。
要約すると、こういう事。

前に、うちが聞いた事も言っとくね。

・《ワイルド》と《混沌》は、似たようなの…っていうか、元(?)は同じ。

・同時召喚が出来るのは、桜が《ミックスレイド》発動時のみうち
はいつでも可能。

・ペルソナを所持出来る体数はお互いに12体まで。

(うちは使用したら、その場で消滅する。)

・うちは合体しか行えない。

・《ワイルド》も珍しいアルカナだけれど、うちはもっと珍しい。
(ポーカーだと、ロイヤルストレートフラッシュくらい。)
e t c …。

説明を一通り聞いた桜は、

「そうだったんだ…。」と呟いた。

『実際、うちも自分じゃ分からなかったし。

エリザベスが“今度は桜と一緒に”って言うから残ってもらったんだ。』

つてか、確率的にロイヤルストレートフラッシュ…。

(確かあれって、64億分の1だよな?)

『…ん?ストップ。』

あんたら、うち以外に知ってるの?

《混沌》のアルカナを持った人。』

エリザベスもテオも、はっきり教えてくれなかった。

このケチ姉弟め。

「私のペルソナ能力が特別なのは感じてたけど、佳織も凄いね。」

恥ずかしくなって顔を逸らす。

『桜の方が羨ましいよ。』

こっちは喧嘩っ早いし。』

今日だって、決着が着かないのを見ててウズウズしていた。

勝手に出て来かねなかつたから召喚したんだし。

(全く、アースは暴れん坊將軍かよ。)

うちも血の気が多いから人の事は言えない。

『話は終わり?』

「ええ。

最後に、お2人に一言宜しいですか?」

立ち上がって帰ろうとしたうちに、テオが声を掛けた。
なんか、妙に暗いけど。

「…テオ。」

エリザベスの咎める様な声。

一瞬、姉の方を向いたテオは

「すみません、姉上。

しかし…。」

食い下がるテオに、何かを悟ったのか桜が「言ってみて。」と促す。

「有り難う御座います。

…桜様、佳織様。

お2人は、歪んだ運命を背負っていらっしやる様に見えます。どうか、無理はなさらないで下さい。」

忠告、心配のどちらにも聞こえる言葉。

そしてうちに、カードを渡して来た。

見てみると、本当に何も描かれていない両面白紙のカード。
むしろ、見た感じなら画用紙っぽい。

「貴方の…助けとなればと思ひまして。」

『（白紙…意味あるのか？）』

テオの気持ちを無碍には出来ないから、お礼を言ってからポケットにしまう。

『じゃ、こちらは帰るよ。』

またね、エリザベス。』

「はい、またのご利用をお待ちしています。」

「さよなら、テオ。」

「ご利用、お待ちしております。」

お気を付けて。」

ベルベットルームから出ると影時間も終わりそうだったから、桜と別れて急いで帰路を走った。

キーアイテムゲット…？（後書き）

テオが段々、世話焼きかつ心配症になってきた…。

いい旅夢気分！ in 屋久島 1（前書き）

2週間ぶりの投稿。

今回から、しばらくは屋久島旅行です。

1学期の期末テストを、うちは無事に10位でクリア！
前より順位は下がったけど、こっちに来てから信じらんないくらい
学力が上がった。

（多分、先生が良いんだよ。
なんたって桜と美鶴先輩のダブル天才組だし！）

テストが終わった次の日に、美鶴先輩から

「君も屋久島旅行に行かないか？」

とお誘いを受けたから、コンマ0.5の速さで承諾。
これで、やっとアイギスにも会える〜！

さてさて、本日は屋久島旅行の初日。

集合場所の巖戸台分寮ラウンジで、冷えた麦茶を飲みながら2年組
で雑談。

『やっくしま、やっくしま、やっくっしまあ〜』

あゝ、楽しみつー!!」

「佳織…さつきから、それしか言っていないじゃない。」

「楽しみで、一睡もしてないって言ってたしね。」

「けど、屋久島なんて初めてだよ。」

私は縄文杉を見に行きたいな。

順平君は？」

「オレは、ビーチで『真田先輩と遠泳すれば?』なんでそうなるんだよ!」

この時の為に、うちは通販で一眼レフカメラを購入!

向こうじゃ、写真部に所属してたから扱いはお手のもの。

「待たせてすまない。」

出発しよう。」

2階から美鶴先輩と真田先輩が降りて来た。

メンバーも揃い、(要らない幾月まで付いて来たけど。)いざ屋久島!!!

『うーみーは〜ひろいーな、おおきーいーなー!』
屋久島に向かうフェリーの看板で、うちは海に向かって大熱唱して
いた。

隅っこで真田先輩がスクワットなんかしてるけど、無視。

「無邪気だな。

誘った甲斐があつたよ。」

『あ、先輩!

すっごい嬉しいですっ!
有り難う御座います!』

先輩の両手を握り、上下にブンブンと振る。

と、不意に美鶴先輩の表情が曇った。

「高瀬、無理はしていないだろうな?」

『へ?してないですよ?

どうしたんです、いきなり?』

「いや…前に検査結果で、君の心拍数が異常だっただろう?」

あの事を、お父様に相談したんだ。」

『…はい?

すみません先輩、意味がよく分からないんですが。

どうして、そこで美鶴先輩のお父さんが出て来るんですか?』

「深い意味は無いつもりだ。

私が気になったから…だな。」

『はあ、そうですか。』

「何にせよ、身体には気を使ってくれ。

君も、大切な“仲間”だからな。」

『ご心配有り難う御座います。

けど、大丈夫ですよ!』

昔から、色々と“冒険”して来たから身体の丈夫さには自信がある。

ニカツと笑うと、美鶴先輩がうちの方に手を伸ばして来た。

ポン。

(え…えええ!?)

一瞬、思考がフリーズした。

だって、美鶴先輩がうちの頭を撫で撫でして…!

はわわわわわ、と内心真っ赤のうちの気を知ってか知らずか、美鶴先輩がフワリと笑った。

それはもう、すごい上品に!

「もう少しで屋久島に着く。

降りる準備をしてくれ。」

『分かりました!』

『到着ー！』

屋久島の港に着いて、思いっきり空気を吸う。

「わぁ、綺麗…。」

桐条先輩も羨ましいな、こんな所に何度も来れて。」

風花が持参したらしいカメラで写真を撮っていく。

（カメラなら、うちにもあるのに。）

美鶴先輩の案内で、こちらは桐条邸の別荘に着いた。

『うわ、スゴッ！』

建設費用どんだけ掛かってんの！？』

「やっぱり、先輩って凄い人なんだ…改めて実感…。」

「真面目に“世界の豪邸訪問”だな。
てか、メイドって実在したんだ…。」

「先輩なら別荘の1個や2個”って思ってたけど…別格だよね。」

豪勢な造りに、感嘆の言葉しか出ない2年組と、玄関のメイドさんが

「お帰りなさいませ、お嬢様。

そちらはご学友の皆様ですね。

どうぞこちらへ。」

「“ご学友”って…。」

「なんか、ランクアップしたみたいな言い方…。」

ゆかりと、メイドさんのセリフを反芻していると。

「……………」

『あ。(桐条さんだ。)]

奥から現れたのは、美鶴先輩のお父さん。

先輩が挨拶するけど、何も言わずに桐条さんは戻って行った。

(つか、一瞬こっち見た?)

「今のって、もしかして…。」

「桐条先輩のお父さん?」

風花やゆかりは、屋敷の奥に戻った男性をみて推測した事を口にする

る。

『（威厳あつたなあ…。
グループの総帥だけあって、“上に立つ人”特有のオーラが凄
し。）

渋い感じの人だったね。』

眼帯がカッコいい！

とか思ったりしたけど、言えない。

と、隣で順平が海に行きたくてウズウズしだしたから、各自着替え
てから海岸に集合となった。

女性メンバーは、美鶴先輩を除いて全員で海岸に向かう。順平が騒
ぎ出すのは分かってたから、手持ちのバックにツツコミ用のハリセ
ンを入れて置いた。

海岸に着くと、既に順平が準備運動をしていた。

「おつ、来たな！」

やっとか、と真田先輩が零す。

『お待たせ〜。』

「遅くなってごめん。」

…て、順平どうしたの？

鼻の下伸びてるよ？」

「いやー、ナハハ〜。

目の保養ですな〜。」

「ハア？」

オヤジみたいなお話を言い出した順平に、ゆかりは

「訳が分からない」

と言いたげに顔をしかめる。

「ゆかりリッチは結構強気のデザインですな〜。

やっぱり、部活で絞れてるって自信があるんでしょうか!？」

「『あんたねえ…。』」

「お、我らがリーダーもまたキュート！」

普段は見えない所がもうね！」

「オヤジか！」

全力でつつこむ桜。

良いぞ、もつと言つてやれ！

という意味を込めて、1発ハリセンで順平の頭を叩いてやった。

一方、パラソルを使っても良いかと悩んでいた風花にも、順平は好き勝手に評価をつける。

真つ赤な風花は、慌てて桜の後ろに隠れた。

(可愛いなあ、風花も。)

ちよっぴりニヤニヤしていると、順平の不満そうな声が聞こえた。

「ちよつと佳織ツチ！」

なんで水着じゃねーの!？」

『なんか文句ある？』

「一応水着は着てるけどさ。」

うちはセクハラ順平の被害に遭いたくなかったから、ワンピースタイプの水着の上にTシャツと下は半ズボンを着用。

つてのは建て前で、ほんとにはアイギスに会いに行く予定だったから。

『(確か向こうに…居た!)』

金髪に、水色のワンピースを着たアイギスを見つけた。

とりあえず、皆はほっという後ろから近付く。

『こんにちは。』

声を掛けてみると、振り返る彼女。

「……………」

まだ機械っぽさの抜けない表情が、うちを見た瞬間に一変した。

(な…何?)

桜に見せる《使命感》の様な感情でも、陵時相手の《敵対心》でも無い。

——強いて言うなら、《恐怖》…:だと思っ。

『あ…:…?』

どうしたんですか?

そう聞こうとした瞬間。

アイギスの手がこっちに向けられた。

正確には、地面と水平になる様に構えられた、銃口が。

『(えっ、ちょちょ、ちょっと待った!!)』

ヤバイ。と思っ慌てて森の方に退散する。

——バン!バンバン!

下手したら桜達に聞こえた兼ねないから尚更ヤバい。

『ちよ、反則だって！』

いきなりサプライズ過ぎるー！』

後ろから追い掛けて来る足音。

木々の間を縫って、もう死に物狂いで逃げる。

（訳が分からん！

なんで出会い頭に発砲されなきゃいけないの！？）

“アイギスと仲良くなるう。” 計画がー！

木が銃弾で抉られる音を聞きつつ、アイギスを撒けそうな場所を探して走り回った。

（ちなみに、ペルソナ付けてます。

蜂の巣はお断りしたい！）

『ハツ…ゼエ…ゼエ…』

脇道に生えていた背丈の高い草の影に飛び込んで、息を整える。

『いったあ…掠ったな…』

アイギスってば容赦ないっつーか、明らかに急所狙われてた！』

とりあえずは、バックに入れてた絆創膏を貼る。

出血がちよつと多いから、ペルソナを使いたいけど彼女相手だと気付かれる。

周りは川のせせらぎや鳥達の鳴き声が響いて、癒やしの空間が広がっている。こんな状況じゃなきゃ、のんびりしてたのに。

ーガサ、ガサ。

(げっ、見つかった！)

振り返って数メートル先に見えた銃口。

その場にしゃがみこんで1発目をやり過ごす。

2発目は、バックステップで。

けど、それがいけなかった。

うちの背後には、崖しか無かったから。

ガラッ！

『ーっ！？』

バックステップでの着地点だった地面が、突然崩れた。結果的に、そこへ足を置けば落ちる。

叫ぶ余裕も無く、うちは海に重量落下した。

いい旅夢気分！ in屋久島 1（後書き）

とことん災難。

いい旅夢気分！ in屋久島 2（前書き）

お久な投稿。

なんだか、最近スランプ…。

いい旅夢気分！ in 屋久島 2

『ーいつ…たあ……。』

海に落ちた時、岩にぶつかって気絶したらしいうちは、気が付いたら全然知らない所で目が覚めた。

周囲は人の気配は無く、様々な高さの岩が連なり、階段のようになってるのが分かるだけだった。

『うわ、ずぶ濡れ。』

海に繋がってた川の上流から流された？』

とにかく、戻らないと。

そう思った時だった。

「お？どうした嬢ちゃん、迷子か？」

岩の上からこっちを見ている男性が声を掛けてきた。

『あ、すみません！』

こっつて、島のどの辺りですか？』

咄嗟に質問してしまった。

ていうか、質問に質問で返すって失礼か！

「ここは島の北東だな。

で、どうしたんだ？

川で溺れたのか？」

『はい、恥ずかしながら。
友達が心配してしまうので、早く戻りたいのですが場所が検討つか
なくて…。』

「そりゃ大変だな！
ちよつとこつち来てくれ。」

男性は手に持った地図をヒラヒラさせる。
ご親切に教えてくれるみたいだから、お言葉に甘える。

「てな訳だ。理解出来たか？」

『はい、わざわざ有り難う御座います。
あと、タオルは洗ってお返しします。』

「いや、嬢ちゃん持ってきたな。
ちなみに、名前はなんつーんだ？」

『うちは高瀬佳織といます。
貴方は…。』

問うと、恥ずかしげに首筋を掻く男性。

ふっ、と突然既視感を覚えた。

もしかして…:…と思ったが、まさか。

「俺は相沢。

この島には結構長いこと住んでんな。」

『（やっぱり！?!）』

ペルソナ3本編には出ないが、携帯アプリゲームの《アイギス the first mission》に出て来た、アイギスの《教官》。

ゲームのシナリオでいくと、ムーンライトブリッジで《デス》を封印するより前…:…の筈。

『相沢さんですね。』

あの、厚かましいお願いなんですけど…:…。』

「困った時はお互い様だ。

気にしなくていいぜ。」

『有り難う御座います！』

実は、海岸までの道を教えて頂きたいんです。』

「そっぴゃ、友達が居たつつつたな。

よし！俺に任せな、案内くらいするぜ。」

何考えてるかすら分からない幾月が浮かべる笑みとは違う、本当に人当たりの良い笑み。

んじゃ行くか、と言って先を歩き出す相沢さんに再度心の中でお礼を言っについて行った。

順平が真田先輩との遠泳から戻って来た時、私は佳織が居ないのに気付いた。

ゆかりや風花に話すと、2人はハツとして周りを捜しだした。

「俺達が沖へ泳ぐと言った時には居なかったが…。」

「アイツもよくフラフラするツスからねえ…。」

大方、森にでも居るんすよ。」

「順平、アンタのその自信はどっから湧いて来るのよ?。」

「とにかく、一度別荘に連絡を入れてみよう。」

彼女も戻ってるかもしれない。」

桐条先輩が携帯を取り出した時、視界に捜していた姿が映った。

「あっ！佳織ーっ！」

ようやく、ビーチに着いたうちら。

そろそろ良いかな、と思って相沢さんに声をかける。

『ここからは、1人で大丈夫です。

相沢さん、お世話になりました。』

「……………」

『相沢さん?』

「なあ、嬢ちゃん。聞いていいかい?」

秀囲気の変わった…真剣味を帯びた相沢さんの声。

視線はビーチで話に華を咲かせる“彼ら”に向けられていた。

具体的には、赤い髪の女性―美鶴先輩に。

「ここら一带は、桐条の私有地だ。知ってるよな?」

『知ってますが……………あ!』

言ってから、気付いた。

“桐条の私有地を知ってる。”

思いつきり、桐条と関わりがあると言外に言ってしまった。

「あんまり根掘り葉掘り聞くつもりは無いんだ。

ただ、これだけは知りたい。

…嬢ちゃん、影時間への適性があるのか？」

どこか心配する様な、それでいて確信の籠もった問い。隠す事は、しちやいけない気がした。

『ご存知…という事は、桐条の関係者さんなんですね。

確かに、うちは影時間に対して適性があります。

それに彼らの仲間ですから、ペルソナの召喚も可能です。』

先輩の別荘に、召喚器もありますよ。

うちの言葉を聞くと、相沢さんは静かに肩の力を抜いた。

「なら、かつての桐条関係者として…頼みたい。

金髪の外人っぽい嬢ちゃんが仲間になったら、彼女に“人”を教
えてやって欲しい。」

遠くを見る様に、彼は目を細める。

“かつて”という事は、この人は既に関係者ではないみたい。

相沢さんの頼みを断る気は最初から無い。

アイギスには何が何でも、人を知って貰いたいって思ってたから。

（命を狙われるとは、考えて無かったけど。）

うちが頷くと、ニカッと笑ってから相沢さんは背を向けて森の方に去って行った。

「もう、ビックリしたんだからね！」

「これからは何か言ってくれよ。」

『気を付けます…。』

戻ってから、軽く桜と真田先輩に注意された。
風花とゆかりからは説教。

美鶴先輩は、それほど気にしていなかったとか。

『今日は帰りませんか？』

いい加減、お風呂に入りたい。

ちなみに、濡れた服に関しては“ひと泳ぎして来た”と言っておい
た。

とりあえず、明日に備えて寝よつと！

いい旅夢気分！ in 屋久島 3 (前書き)

まだまだ続きます、屋久島旅行。

私は、対シャドウ兵装七式アイギス。

造られた目的は、《シャドウの殲滅》。
人の殲滅は、使命ではない。

「《アレ》は、何なのでしょう…。」

海岸で待機していた私に近づいた、《何か》を思い返す。
視界に認識した瞬間、1つの行動を起こした。

——《完全なる殲滅》。

繰り返すが、私は兵器。

“情”は無用の長物。

そんな事は分かりきっていた私の内に、何かがざわめいた。

逃げたソレを追うも、崖からの転落により見失った。

アレは、《危険》。

「見つからなかったのは不快ではありますが、次は消します。」

私を感じた、何か…。

知る人なら、《恐怖》と呼んだだろう。

10年前の様な失敗は犯さない。

やっと、“彼女”を見つけたのだから。

屋久島旅行、2日目。

女性陣は朝から縄文杉見学、男性陣はナンパに。

うちは昨日の件もあって、誘いを辞退して桐条さんに会いに向かった。

『メイドさんに案内してもらっちゃったけど…緊張するっ…!』

《(何か忘れてるよね?佳織。)(》

『のあっ…!ファ、ファルロス!?!』

頭の中で木霊したファルロスの声に心底ビビる。

『(ちょっと、いきなりすぎるだろ!』

うちの心臓止める気か!』

《(だって、いつまで経っても呼んでくれないからね。そろそろ良いかな?)(》

『う、うん。じゃあ、入るよ?』

恐る恐る、書斎とおぼしき部屋のドアをノックする。

「誰だ?」

『（こっ…怖ええ!）』

美鶴先輩の後輩ので、2年の高瀬と言います!』

「高瀬?」

…ああ、美鶴の言っていた子が。
入って来なさい。」

『失礼しまーす…。』

《（プツ、さっき噛んだよね?）》

クスクスと笑うファルロスに、うっさいよ!と言い返す。

「まあ、立ち話という訳にもいかない。座りなさい。」

書斎だというのに、なんか高そうな応接セットがあった。
片方のソファを勧められて、お言葉に甘える。

「何か、私に話があるのか?」

『突然すみません。』

けど、どうしても聞いて頂きたい事なんです。』

シャツの胸ポケットから、メモリーカードを出してテーブルに置く。

中には、うちの知る事を全て記したデータが入ってる。

『これを、お渡ししたかったんです。

誰にも気付かれない様にデータを見て下さい。』

「どついう事かな？

誰にも、という事は…。」

『はい、美鶴先輩にも。

極秘の内容ばかりですから。

本題は、これではありません。』

姿勢を正し、深く頭を下げる。

うちの話は、ここからだ。

『今日は、お願いがあつて来ました。

協力して頂きたいんです。

全てを守る為に。』

うちは、全て話した。

岳羽永一郎の最期の記録が改竄されている事。

幾月の裏切りと目的。

シャドウの正体。

《死の宣告者》と、それに伴う《ニユクス》の到来。

桐条さんが、命を落とす事実は隠す。

『今話した事を、どうして知っているのかは…お教え出来ませんが。

桐条さんにとって全て確証の無い事なのは分かっています。

でも、どうかお願いします。信じて下さい…！』

「……顔を上げてくれ。」

困惑した声。

「ただ、目の前の人は取り乱してない。」

「今聞いた事が事実ならば、私も動かない訳にはいかない。」

しかし。…と難しい顔をする桐条さん。

「どうしよう、と考え込んだうちの耳に、横から聞き慣れた声が聞こえた。」

「僕の事、忘れないでよ？」

「何の為に着いて来たのさ。」

『あつ…ファルロスっ！』

（忘れてた…！）

「なんだね、君は。」

「僕？今の話に出てたんだよ？」

桐条武治。」

「どういう事、だ。」

張り詰めた空気に、知らず知らず拳に力が入る。

フツ。とファルロスが笑った。

「佳織にこれ以上言っただけより、こっちの方が良いかな。」

僕自身が、《ニユクス》だ。」

「何っ…!?!」

(なんか、今のファルロス…。
やけに大人びてる…?)

まるで、《宣告者》としての役目を告げる時の“彼”の様にすら思える。

「詳しい事は、彼女の渡したメモリーカードに記してある。
信じるかどうかは、君の自由…かな。」

『桐条さん、この子…ファルロスの言う通りなんです。
時が来たら、全てを皆にも告げます。
だから…お願いします。』

長い沈黙が訪れる。

恐らく、信じるか決めかねているんだ。

「…分かった、信じよう。」

『…有り難う御座います!』

信じてくれて、一安心。

「ねえ。彼女の言葉を信じてくれたのは感謝するけど…僕の事も秘密にしてよ?」

「ああ、分かった。」

この際だ、私も話がある。」

一度立って、デスクの引き出しから書類を持って来た。差し出されたそれに目を通す。

記されていた事は、この前ラボで行った健康診断の報告。

「美鶴から、話は聞いた。

この心拍数に、心当たりは無いのか？」

『うちにも分からないんです。

異常なのは、分かるんですね……。』

先輩に聞かれた時と同じ様に、首を振る。

「ふむ……。」

一度唸った桐条は、美鶴との会話を思い出す。

「お父様、失礼します。」

「珍しいな、お前自ら本社に足を運ぶとは。」

「お忙しい中、申し訳ありません。
しかし、『ご相談が……。』」

「これか？」

桐条が見せたのは、部の一員である少女に関する報告書だった。

「はい……。タルタロス探索時に、おかしな事がありました。
故に、私の独断で彼女の体調を調べさせたのですが……。」

「……………」

「彼女自身が体調不良を訴えない以上、大丈夫だとは思っていますが
……これは妙でならないのです。」

「暫く様子を見なさい。」

夏休み、私の別荘に来た時に、私からも話を聞いておく。」

「しかし、せつかくの休暇を！」

「お前の気にする事ではない。
いいな。」

「はい……。」

『何だか、すみません…。
色々ご迷惑をおかけしてしまって。』

「いや、君達のような未来ある若者を巻き込んだのは我々の責任だ。
礼を言うよ。」

そして、全力で協力すると約束しよう。」

懐から封筒を出し、渡される。

蠟で封をされた下には、紋章らしき印が押されている。

『あの、これは…？』

「君が検査を受けた、第2ラボへのキーカードだ。」

今後は、美鶴が居なくとも自由に出入りして構わない。」

は？と開いた口が塞がさない。

そんな佳織の心情を読み取ったのか、僅かに表情を和らげる桐条。

「これは、美鶴からの頼みでもある。」

全ての部屋前にあるパネルに、これを翳せば使える。」

『ええーっ！？そんな簡単に渡しちゃって良いんですか！？』

あたふたと効果音の付きそうな佳織。

「君が信頼に値するからだ。

これからも、美鶴を頼む。」

（そこまで言われちゃあ、

『はい分かりました。』

しか言えないじゃん！）

同時刻、縄文杉前。

「ええ！？対シャドウ兵器が居なくなっただあ！？」

ゆかりの叫びが森に響き渡る。

どうにも、人型らしい。

そんな訳で、私一人で捜索中。

(手分けして捜そうって話が纏まった。)

「人型…。美鶴先輩のとも、凄いなあ…。」

森林浴を兼ねて森をふらついていると。

「……………」

「あ、こんにちは。」

(島の人…かな?)

「見つけたであります。」

タッタッタツ、ギユウツ。

「え?」

「私の1番は、貴方の傍にいる事であります。」

いい旅夢気分！ in屋久島 3（後書き）

漸く協力関係の成立。

ついでにアイギスと桜のご対面。

『あゝ、ジャガイモの皮むき終わりました。』

「有り難う御座います。

申し訳ありません、この様な事をお手伝い頂いて…。」

『いえいえ、気にしないで下さい！

うちも強引にお願いしてすみません！』

夕方。佳織は別荘の一角にあるキッチンで、メイドさん達に混ぜて夕食のお手伝いをしていた。

理由は、気まづかったから。

（なんか申し訳ないよ！

庶民的で悪いけど、何から何までって気が引けるし！）

最初はメイド長さんに凄腕で断られたけど、せめて下準備はやらせて欲しいと頼み込んだ。

うちの担当は、ミネストローネの材料を切る事。

明らかにメイドさん達の方が上手いけど、そこはプロと凡人の差。

「それにしても、皆様ご立派な方ばかりですね。」

作業していた佳織に話し掛けて来たのは、メイド長さん。

『そんな事無いですよ！

うち以外の女性陣はともかく、順平はナンパバカですし、真田先輩はプロテインバカ。

寮の冷蔵庫にまで、プロテインがギツシらしいです。』

そういえば、見つけた順平がかなり苦い顔してたって桜も言った。

(頭人中、半分はプロテインじゃないのかなホントに…。)

「お嬢様も、すっかり凜々しい女性になられて…嬉しい限りです。」

頷く周りのメイドさん達。

『学校でも頑張ってますよ、先輩。』

なんか静かに使命感に燃えてるって感じですね。』

和やかな雰囲気にもまれたキッチンで、楽しい一時を過ごした。

その日の夜。

桐奈さんが、話があるとの事で応接間に集まった佳織達。

話の内容が分かるだけあって、少し緊張する。

《（僕は出ない方が良いよね？）》

『（うん、出たらアカン。）』

ソファの1番端を陣取る。

桐条さんには、話さないでって念を押したから大丈夫の筈。

やがて、本題へと移った。

巨大なスクリーンに映像が映し出される。

そこに映る男性は、爆発が繰り返される中で言葉を紡いでいた。

“ 12のシャドウを倒せ。”

ここまで綺麗に改竄されていると、改竄した本人 - 幾月をある意味凄いと思う。

（主に、その神経とか。）

「お父さん…。」

映像が終わり静まった室内にポツリとゆかりの呟きが響く。

信じたくない。

そんな感情が見て取れる彼女は震える声で叫び、走り去った。

「神碕、彼女を追ってくれ。」

美鶴先輩の頼みに桜は無言で頷き、ゆかりを追って行った。

暫くすると、順平が「2人を迎えに行く」と発言。

「影時間になるから早く帰って来い。」

真田先輩に言われ、手を振りながら順平も姿を消す。

見送ってから、うちは扉の横に立つ幾月に目を向ける。

彼は、パツと見では分からないが笑っている。

（腹立つ…。）

さぞかし気分が良いだろうね！アンタの思い通りなんだから。
ムカついていると、頭の中から制止の声が。

《（抑えてよ？怪しまれたら元も子もないんだから。）》

（分かってんだけど、腹立ってしょうがないよ！）

「彼女には、済まない事をしてしまった。」

膝の上で手を組んだ桐条さんが声に罪悪感を滲ませる。

風花が様子を見てこようと立ち上がった時、3人が帰って来た。

『おかえり。落ち着いた？』

飛び出した行った時とはまるで変わった彼女の表情。

桜と順平も、なんだか嬉しそうだ。

「うん、心配掛けてごめん。」

「桐条先輩。」

重い空気を纏う美鶴に向き直った彼女は

「私、お父さんを死に追いやった事は忘れられません。でも、戦いからは逃げません。」

唯一の願いがシャドウの殲滅なら…最後までやり抜きます。」

そこまで言っつて、ポフンと隣に腰を下ろす。

「しけた顔してるなんて、先輩らしくないです。頑張りましょうよ？」

微かに微笑んだ。

悲しみは抜けきってないみたいだったけど、いつものゆかりだった。

「岳羽……。有り難う。」

「いよっし！仲直りッスね！」

『とりあえず、一件落着？』

『ていつか順平、顔ヤバイよ？』

めっちゃニヤついている。

「いや〜、い〜んでない？い〜んでない？」

『…このKY髭。』

「なんでっ！？っつか、ハリセンは止めて！」

『あと100回。』

「酷いっ！」

いつの間にか空気は穏やかになり、部屋に居たメンバーは全員笑っていた。

（端から見たら、コントか？）

そんな事を考えつつ、バシバシと髭をボコしていた佳織だった。

蒼い美形3人目！（前書き）

スツゴく久しぶりの投稿！

これからまた頑張っていきたいと思います！

蒼い美形3人目！

今日は7月29日。

コロ丸のシャドウ戦イベント。

まあ、コロ丸なら大丈夫だろうし、今日も今日とてタルタロスで実カアツプを狙います。

そんな訳で、現在タルタロスのエントランスにいるんだけど…問題発生！

ベルベットルームの隣に見覚えのある扉が。

まさかのマーガレット！？

なんてビックリしていると、

「あら、貴方ね…あの子達の言う通りかしら」

…おいでなすつたー！

マジ！？と瞬きしまくっているうちを見て、優雅に微笑むマーガレット。

ヤバイ、でらべっぴんさんや！

(ごめんなさい、方言が入ってます)

「ふふ…。そこまで驚くと言うことは、私のことも知っているのね」

『あ、はい知っています…いや、ちょっとビックリしただけで…』

緊張して喋れないっ！

ペルソナ4では散々な目に遭わされたマーガレットは、ある種のトラウマ。

『えと、マーガレットさん……』

「何かしら？」

何故ここにいるんですか。

聞こうとしたら、不意に手を引かれた。

わー…手、綺麗だなあ…。

「……なるほどね。あの子達が気にする理由が分かった気がするわ」

頭1つ分は身長差のある彼女を見上げると、何か握らされた。

1枚のカード。

姉弟と揃ってやること一緒なのに思わず笑みがこぼれた。

「そのカード、テオの物と一緒に常に持ちなさい。貴方に必要な物だから」

それだけ言っと、マーガレットは ヴィジョンクエスト の間に戻って行った。

「…姉上。佳織様に渡して頂けました？」

「ええ、大丈夫。

テオ、隠れていずに出て来なさい」

「申し訳ありません…姉上」

マーガレット・エリザベス・テオドア。

クエストの間にて、蒼を纏った3人が集う。

「しかし、宜しいのですか？

あのカード、本来ならば桜様に…」

テオは言い掛けて、2人の姉がこちらを見ているのに気付いて言葉を切る。

「構わないわ。

あの子の望みなのだから」

その時 まで、あのカードに変化は訪れない。

テオのは別でしょうけど…？いずれ彼女の 未来 を決めるのは、彼女自身。

佳織…。貴方がどこまで進めるか、見ているわよ？

今日の戦績。

討伐シャドウ30体、入手アイテム5個。

（まあまあかな…）

影時間も終わりに近いし、今日は引き上げるとしますか。

帰り際、気になって辰巳神社に寄ってみる。

…地面が、焼け焦げてました。コロ丸恐るべし。

神主さんが事故で亡くなって以来、ずっとこの場所を守り続けて来た。

コロ丸の神主さんへの思いはどれだけ強かったか、コレを見ればすぐ分かった。

…今度遊びに行ったら、お土産にビーフジャーキー持って行くのかな。

次の日の夜、ファルロスが桜の元に向かう。
何か楽しそうに見えるのは、うちの気のせいかな？

『……………』

「やあ、ただいま」

影時間の終わり頃、ファルロスが帰って来た。

何となく、うちはベッドから仰向けで頭を垂らしていた。

血が昇ってたせいかファルロスの表情が良く分からなかったけど。

「起きれば？」と聞いてくるので、軽く反動を付けて起き上がる。

「大型シャドウも、半分って所だね」

『そだね…って、それ！うちのお握り！』

明日の朝食に買ってテーブルに置いといた辛子明太子のお握りを取り上げられて、思わず抗議する。

「佳織って、夏休みは予定無いの？」

『スルーしないでよ！』

ポフッと軽い音を立てて、ファルロスが隣に腰掛ける。
うちの肩に、頭が寄りかかって来た。

「……佳織、怖いんだ」

『え……?』

ファルロスが語り出す。

それは、小さな子供の……SOSだった。

蒼い美形3人目！（後書き）

あー、誰か感想を……私の栄養源が……パタリ

満月の大型シャドウ戦！ 正義&戦車 1

8月6日、大型シャドウ討伐の日。

討伐に参加したうちは、後方支援をアイギスと美鶴先輩に任せて前線に出ていた。

…けど、体が重い。刀が鉛みたいで、振り抜けない。

《——佳織ちゃん、右！》

『しま…ぐあっ！』

「佳織！ツ…この、退いてよっ！」

風花の警告も虚しく、視界の隅から突撃して来た「ワイルドドライブ」に気付かずに吹っ飛ばされて、壁に叩き付けられる。額を切ったらしく、右目を瞑って血が入るのを防ぐ。

「高瀬！」

『これくらい自分で治します、先輩達は桜の援護を！』

アースを喚んで、《ディア》で傷を塞ぐ。桜達はラッシュを掛けたらしく、既に戦闘は終わっていた。

武器を収めた3人が駆け寄って来る。

「大丈夫か高瀬。何だか君らしくない」

「出血は止まっているのでありますが、1度後方待機をお勧めします」
心配してくれる先輩に（多分悪意は無い）アイギスの言葉。
やっぱり、うちを桜の隣に居させたくないらしい。

「今日は私、アイギス、桐条先輩、佳織で行きます！」
メンバー選出の時、桜の判断に皆は何も言わなかった。
ただ、アイギスを除いては。

「この人は、ダメです！」

「ア、アイちゃん、いきなし何？」

佳織と桜の間に割り込んで猛然と反発し出したアイギスに、順平だけでなく皆が戸惑う。

美鶴や真田が説得しても“ダメです！”の一点張り。その場の空気が悪くなったのは言うまでも無い。
最終的には、桜の説得で渋々納得した。

討伐に向かう際、アイギスは佳織に

「少しでも不審な行動をすれば即座に撃ちます」と言い放った。

佳織としては、屋久島での時よりはマシだと思えたから大して気にはしなかったが。

大して気にしなくても、アイギスからの敵意は消えない。

戦闘の時以外は桜に密着する様に隣にいるし、常に佳織を睨む。

シャドウを倒す度に、少しずつ刀が重くなるのを気のせいとして大型シャドウの「ジャステイス」と「チャリオッツ」に挑む。

「何？このシャドウ…」

目の前に鎮座するバカでかい戦車？に桜の足が一瞬止まる。
風花も分析に入るけど…

《えっと…あれ？》

「どづした、山岸」

アナライズした風花に、美鶴先輩が声を掛ける。

まあ、今のコイツは

「ジャステイス」＋「チャリオッツ」＋戦車の装甲だからねー。分らん訳だ。

『（つてか悪趣…いや、奇抜なシャドウだな…）』

一々突っ込んでいたらキリが無い。

本当はかなり突っ込みたいんだけどね…デザイン的に。

「アルカナが分からない」と言う風花に、「取り敢えず攻撃しましょう」と言うアイギス。

という訳でフルボツコタイム。

………とは言ったものの。

『コイツ、堅っ！どんだけ堅いの!?!』

切っても撃つても、HPが削れる気配が無いシャドウ「…?…?…?」。

「早くしないと、影時間が終わっちゃうよ…」

「くそつ、戦車の装甲がこれほど厄介だとはな…」

息切れを起こし掛けている桜と美鶴。

アイギスが気遣って背中をさすり、前線に出る。

（まただ。レベルで言ったら皆は40近くなのに、その皆が疲弊してる…）

狙いを3人から遠ざける為に、囷としてシャドウを挑発しながら走り回る佳織。

だが、いつ狙いがこちらから外れるか分からない以上、早急にカタを着けなくてはいけない。

アタックやスピード、スキルの種類は問題無いがディフェンスの方がやたらと高い。2体に分離してからの戦闘もある為、あまり時間は残っていない。

『おわつと！危ないな…』

…あ、そうだ』

ポケットから取り出したのは、爆竹。

とはいっても、コレは佳織が自作した“対シャドウ用”の物。

サイズは市販の爆竹1箱分ほどの大きさ。もはや“爆弾”サイズである。

『アース！オベロン！』

召喚したアースがシャドウの砲身を掴み、装甲の隙間に爆竹を叩き込む。

そして待機していたオベロンと一緒に――

『《ジオダイン》ッ!!!』

最大級の稲妻をお見舞いすると、爆竹に発火し爆発音と共に装甲が弾け飛んだ。

『よっしゃあ!』

《すごい、佳織ちゃん!》

「やったあ!」

「まさか爆竹が効くなんて思わなかったな……」

美鶴が驚愕の声を洩らす。

爆発音に驚いたのが装甲が弾け飛んだ事なのかは定かではないが。

《あつ!見て下さい、シャドウが!》

ガコガコと音を立てて分離するシャドウ。

《「ジャステイス」と「チャリオッツ」です。

体力が少なくなると、さっきみたいに合体するので気を付けて下さい!》

ようやく、第2ラウンドだ。

満月の大型シャドウ戦！ 正義&戦車 2

なーんか最近、佳織の様子が変な気がすんだよな。
オレの気のせいかな？

屋久島の中から、妙に考え事ばかりかしてるし…いきなり叫びながら
頭掻きだすし。

今日の討伐の時にアイちゃんが突っかかっても

「またか…」
って言ってたのが聞こえた。

悩みならオレも相談には乗るけど。
あんまし力んでも良い事無いぜ？

「アイギスと先輩はチャリオッツを！
私は佳織とジャステイスを攻めます！」

分離してからの戦闘は時間が無い事も考えて、同時に叩く作戦に出
た。

「ー行きます！パラディオン！」

「ペンテシレア、《ブフーラ》！」

アイギスのファンが回ってパラディオンを召喚。

美鶴がこめかみを撃ち抜いて、ペンテシレアで追撃する。

動きが止まった瞬間、更にパラディオンが物理スキルで突っ込む。

『うっわ、容赦ないな』

佳織はジャステイスの攻撃を攪乱し、桜がスキルを溜める時間を稼ぐ。

時間にして30秒。そしてー

「佳織、ありがと！《ガルーラ》！！」

（いや、威力は《ガルダイン》ですけど桜さん?!）

あまりの暴風に、その場でひっくり返って身動きが取れなくなったジャステイス。

心の中で何となく謝りながら、上に飛び乗り全力で刀を振り下ろした。

叫びながら黒い霧になっていくジャステイスを見て、ついでにチャリオッツの方を窺うと既に勝敗は決した様だった。

《討伐完了、お疲れ様です。》

「『終わった〜!』」

思った事は言ったら桜と考えがシンクロしていたらしく、顔を見合

わけて吹き出してしまった。

「戻りましょう、もう用は無いですから」

「ああ、そうだな。」

神崎、高瀬。良くやってくれた」

『いえいえ、そんな事ありません』

「でも、あんな凄い爆竹どこにあったの？」

当然の疑問だけど、先輩に聞かれるとちょっとマズいので、桜を隅つこに引っ張る。

『（学校の化学室で市販のをチヨチヨイと改造。美鶴先輩には言わないですよ？）』

「（あー…怒られそうだな。分かった）」

約束している間に、先輩達は先に行っちゃったみたいで

「置いて行くぞ2人共！」

と声が反響して聞こえて来た。

「わわ、待って下さい！佳織、早く行こう！」

『ハイハイ。じゃあ行くか…ん？』

ポケットの中から微かに光が洩れている。

気になった佳織は桜に先に行く様に言って、姿が見えなくなってから“何か”を取り出した。

光っていたのは、少し前にテオから貰った“両面白紙のカード”。
フワフワと宙に浮くソレは、先ほどシャドウ達のいた所まで進むと
ゆっくりと回転し出した。

『カードが大型シャドウに反応してる…？
いや、むしろ吸収してるのか？』

光ながら回転するカードに、黒い霧が吸い込まれていく。

完全にシャドウの霧が無くなり、手元に戻って来たカードを見る。
まるでパズルのピースの様な形で《正義》・《戦車》のアルカナが
表面に描かれている。

それだけでなく、《女教皇》・《女帝》・《皇帝》・《法王》・《
恋愛》…。

今まで倒した大型シャドウ達のアルカナも浮かび上がって来る。

『カードが土台で…アルカナは…ピース？』

何かしら意味はあるんだろうけど、うちだと分かんないな…』

首を捻る佳織。

しかし、考える時間は無かった。

《佳織ちゃん、早く戻って来て！》

『うわっ、風花！？』

（しまった、この後ってストレガのイベント！）『

風花の焦った声に、慌ててカードをポケットに仕舞い皆の所へ全力

疾走で戻る。

「何や、1人おらへんやんか」

つまらんわ。

入口に佇むジンが吐き捨てる。

「全くです。彼女には色々聞きたい事があるのですが」

「何？お前ら、高瀬に何の用だ！」

タカヤの言葉に、臨戦態勢を取る真田と桜・ゆかり・順平。

「落ち着くんだ、皆。…何をしに来た？」

その様子に、クツクツと笑いを零すタカヤ。

「おや。…私達は、1度も“高瀬”という名など口にしてはいませんよっ。」

つまり、カマを掛けられた。

「アンタらねえ、うるさいっての！」

タカヤの態度が慥に触ったのか、ゆかりが声を荒げる。その隣で桜も無言で召喚器に手を添える。

「前に伝言しとけ言っただのにな。
アイツ、無視したんかい」

その言い方に、メンバー内で微かに動揺が広がる。

「佳織ちゃんって…、貴方達と何の関係があるの？」

「そんなん本人に聞けや。せつこい手え使いおって」

風花の問いを突き飛ばす様な冷たい声音。

「…しゃあないわ。

「…おるんやろ！出て来んかい！」

手榴弾を弄びながらジンが声を張る。

洞窟内というだけあって、その声は奥まで反響していく。

「…カラン

岩が崩れ落ちる音が、静まり返った洞窟でやけに響く。

「…そこか」

「…ッ

「なっ…！」

桜の近くにある岩に向かって、無造作に投げられた手榴弾。全員が目で追うしか出来ない中。

「ーさせません！」

アイギスが疾風の如く走り出し、空中を飛ぶ手榴弾を通路の奥に殴り飛ばした。

数秒後に爆音がして、思わず風花・ゆかりが耳を押さえる。

ジャリッ

地面を踏みしめる音がして、岩影から佳織が出て来る。

『ハア、ちよつと乱暴過ぎるだろーが…』

風花、ゆかり、大丈夫？』

「うん、大丈夫」

「ビックリしたあ…」

「アンタがサツサと出て来れば、ソイツらが危険な目に遭わずに済んだけどな」

『おいおい、投げといてから良く言うよ。』

（ヤバ、タイミングが合わなかったか）』

ついさつき到着したばかりだったから影で呼吸を整えていたが、それが仇になった。

皆に聞かれたくない事を聞かれた以上、話を終わらせる為に1歩前に出る。

満月の大型シャドウ戦！ 正義&戦車 3

「まず、こつちから言いたい事を言わせてもらおう。
高瀬佳織やったな、何でワイの伝言を伝えんかった」

『別に。伝える必要性が無いつて思ったただけだし。
人の家に押し掛けて来たヤツの言う事なんか、「はい分かりました」
つて素直に応じる訳無いでしょ』

「高瀬、アイツの伝言とやらは何なんだ？」

警戒を解かないまま、真田が訊ねる。

『風花が仲間入りした日ですけどね。
あの時、母さんからの電話で“待ち人がいる”つて言われて帰った
ら、玄関前にコイツがいました。』

“今後、一切動き回るな。”つてそれだけ言つて逃げやがったんで
すよ』

「わざわざ足運んでやったつちゅうのに、様子見とつたらまだ止め
とらんかったからな。」

今回は《警告》や。次はサシで止めるで」

『…振り返ちに遭うのがオチだと思うけどね？』

「ちよ、佳織！挑発してどーすんだよ！」

止めようと順平が肩を掴むが、佳織の態度は変わらない。

「一々、腹立つな。もっとマシな物言いは出来んのかい」

『お生憎、こつという性格なんでね。』

（サツサと終わらせたいのに）『

「高瀬、落ち着け。

彼らの話は終わっていないぞ」

美鶴に宥められ、ムスツとしながらも後ろに下がる。

「本題に入る前に自己紹介といきましょう。私はタカヤ。こちらはジン。」

《ストレガ》と我々を呼ぶ者もいます。

さて、今日までの皆さんのご活躍、陰ながら見せて頂きました。

聞けば、人々を守る為の“善なる戦い”だとか。

ですが…今夜はそれをやめて頂きに来ました」

「前もってソイツが言うときは、ワイらもこんなする必要無かつたんやけどな」

視線が佳織に集中する中、本人は目の前の2人から視線をずらさず
に睨み付けている。

気味の悪い薄笑いを浮かべ、タカヤの言葉は続く。

「お仲間が随分と急に増えた様ですね。

きつと、ここが罪深い土地だからでしょう…。」

タルタロスは今宵も美しくそびえている…。」

「貴方達は、タルタロスを知っているの…?」

『（それ以前に、タルタロスを“美しい”なんて形容するか…？）』
「どうして私達の邪魔をするのよ!？」

首を捻る佳織の後ろから、ゆかりの憤った感情がぶつけられる。

「簡単なこつちゃ。

シャドウや影時間が消えたら、“この力”とて消えるかも知れん。
そんなん、許されへん」

「“この力”…？まさか、ペルソナ能力の事か!？」

「もう少し頭を使つて欲しいものだ…。

貴方がたは、力が消えてもいいのですか？
ペルソナは誰もが使える力ではないのです。

影時間は、その私達に開かれたテリトリーだ。
そして、滅びの塔も…」

「だから邪魔しようつての!？分かってないのは、そつちでしょ！
シャドウをほうつておいたら、どんな事になるか分かんないのよ！
？」

それを聞くと、タカヤの嘲る様な笑みは一層深くなった。

“どうでもいい。”と言つようじに…。

「それよりも、貴方がたは気付くべきだ。

自身が影時間の中に…より一層の楽しみを感じている事に」

「そんな事あるわけないっ！」

切り捨てる桜の声。

しかしメンバーからは、はっきりとした拒否の言葉は上がらない。

そこに、畳み掛けるジンの言葉。

「お前らは“個人の目的”しか有らへん。どいつも本音はその為に戦つとる。そんなんに邪魔されとうない。結局、お前らの正義はそれを正当化する為のただの“言い訳や”。

そんなんは善やない……」

ガアアン！！

『ベラベラとつるっさいな……。理由なんざどーだって良いだろーが』
ジンの憎しみすら感じさせる言葉を途切れさせたのは、鉄の破壊される音だった。

いつの間にやら入口まで移動した佳織が、重厚な鉄の枠組みを蹴り込んだのだ。

「おや、随分と短気な方だ」

『“終わり良ければ全て良し”。

うちは過程なんか何だって構わない、この時間が無くなるならな』

「まゝた分かり易い理由だな、佳織ツチは……」

『一言だけ言う。これ以上介入するな』

「お断りします」

「ワイらにとつちゃ、影時間は貴重やかからな。
介入出来なくなるんは、アンタらや」

ガコン、と彼らの背後の扉が閉まる。

2人は出て行ったが、桜達は中に閉じ込められてしまった。

第1回宿題ストライキ！ 1

『さーくーらーっ、宿題やるっ！』

という事で、満月シャドウ戦から2日たった8月8日。朝っぱらから寮のラウンジにいるうちです。

まあ、一昨日の反省会ほいの（2年のみ）も兼ねているんだけど。

しまった、ちよつと暴れ過ぎた。

あの後、化学室でオリジナル爆竹を作ったのがバレて美鶴先輩にお説教されました。

…うつ、正座したから足が痛い…。

だがしかしっ！

今日は記憶が正しければ、コロマルの加入日！

一緒に散歩とか、お昼寝とか…。えへへ。

「ちよつと佳織、聞いてる？」

『うん？ごめん聞いてなかった』

素直に白状すると、額に手を当てて溜め息吐かれた。わ、プチシヨツク。

「それにしてもさ、あの時の佳織ツチには驚いたぜ！口調とか完全に不良っぽかったよな」

『ああ、うちって考えるより先に体が動くタイプだから。』

大体、タカヤの話が長過ぎるのがいけないんだよアレは』

(変装がバレてなきゃ、情報収集には問題無いけど)

目の前のソファで騒ぐ、うち以外の2年。

こんな時間がずっと続かないかな…なんて思いながら、プリントを筒状に丸めて順平の頭を叩いた。

『騒ぎ過ぎ、うるさい』

「…最近、佳織ツチからのスキンシップが過激な気がする」

「順平の自業自得じゃない？」

バニラアイスを食べながら、雑誌を捲るゆかり。

目が雑誌から離れ、下の方に向かう。

「ねえ、右足って大丈夫？」

『あ、うん。もう平気。』

アレは痛かったな…』

思いつきり扉の枠組みを蹴り込んだせいで、壊れた時の破片でちよつと足を怪我したのに気付いたのは基地から出た時だった。

その場で《ディアラマ》掛けて貰ったから別に良かったんだけど、その事込みでの先輩からの説教は耳が痛かった。

「それにしても、私のルキアが反応しなかったのは何でなんだろう？」

「そうだね、気付いたら目の前にいたって感じだったし」

うん、これは言うべきか否か…。

「あの2人、ペルソナ使いなんだよね？」

とすれば…どっちかがルキアを混乱させた…とか？」

（お、流石はリーダー鋭い。けど残念。）

バリバリと煎餅をかじり、ズズツとお茶を啜る。

「お前、何か婆さんみてーだぞ」

その言葉に、湯のみから口を離して佳織は一言。

『老後はのんびり縁側でお茶啜るのが夢だし？』

「何故に疑問系…」

「ねえ、佳織ってさ」

『ふお？ふあひい？』

（え？何？）『煎餅が詰まっているので喋れない。』

「…いつぞやの光景じゃない、ソレ」

佳織の顔を見て苦笑してから、ゆかりは神妙な顔をする。

「アイツらの言った事、どう思う？」

佳織は答えようとして、右手を前に出して『ちょっと待って』

と表しながら煎餅を飲み込む。

『ーっハッ。んゝ…、うちは別に何言われようが無視してるけど？』

「何で？だつてアイツら私達のやってる事を否定してるのよ？」
雑誌を持つ手に力を入れるゆかり。

佳織はヒラヒラと手を振り、軽く流す。

『うちの目的つて、ストレガとは正反対じゃん？』

アイツらは“影時間の継続”で、うちらが“影時間の消滅”。
お互いに相容れないんだから、まともに口論するだけ無駄だと思う
うちらには“絶対にやり遂げるぞ”って思いがあるしね！』

「確かに、佳織ちゃんの言う通りかも。

私達あの時は惑わされちゃったけど、最初に自分達で覚悟を決めて
ここに来たよ」

「ゆかりツチが暗いのつて似合わねーよ。

オレも最初は“おもしれー”って思ったけどよ、今じゃ真剣に考え
てるぜ！」

『お、珍しく順平がまともな事言ってる』

「珍しくつて、佳織ツチの中でのオレはどういうヤツなわけ…？」

ガックシ、と効果音が付きそうな感じでうなだれる順平。

そんな同級生に、アハハと笑う佳織。

パンツと手を叩いて空気を変える。

『ウジウジ悩んでも仕方ないし、皆で遊びに行かない?』

「おっ、オレさんせー!」

「私も。たまには息抜きつて必要だと思っな」

「…佳織、朝からここに居る目的忘れてない?」

『あ』

桜の言葉がグツサリ刺さるが、めげずに遊びに行く催促をする。

「ーもう。しょうがないなあ」

『サンキュー、桜っ!』

そんなんで、第1回宿題ストライキを起こして遊びに出ました!

「どこに行く?」

『そうだね、これだけ人数いるからカラオケとかは?』

寮を出て、ポロニアンモールに向かう。

と、前から来る見知った2人に佳織が声を上げた。

『あ、平賀先輩に久野先輩!』

「やあ、高瀬さん。出掛けるの?」

「見た感じ、どっかに行くみたいだな。
どこ行くんだ？」

『ポロニアンモールに行くんです！先輩達は何してるんですか？』

「佳織、この人達は？」

丁寧に会釈する女性陣。順平は「ッス！」なんて軽い挨拶をしてる。

『紹介するよ、写真部の部長の平賀先輩と副部長の久野先輩。2人共優しいんだ！』

「どうも、平賀です。頼りないけど、写真部の部長をしています」

「おいおい、自分で頼りねーなんて言うなよな。
俺は久野幌オウキ。一応副部長だな」

謙遜する平賀先輩の頭を軽く叩く久野先輩。

2人は初等部の頃からの付き合いだって、この間聞いた。優しい平賀先輩と快活な久野先輩。結構良いコンビだと思う。

「あ、高瀬さんに頼まれてたあの写真だけど、もう少し待ってくれるかな？」

『了解です。何かあったんですか？』

すると、久野先輩が気まずそうに唸りだした。

「…悪いな高瀬、俺がミスった」

『（あら、先輩でも駄目だったんだ…。）
でも気にしないで下さい。

難しい頼みだつて分かって頼んだうちに、責任がありますから』

「すまん、こんな感じにしか現像出来なかったが」

シヨルダーバッグから写真を出して、うちに渡してくれる。

「次は成功させるぜ！」と意気込む先輩に『有り難う御座います。
お願いします』と言ってから別れた。

広い場所に、オブジェの様な巨大な物体が3つ。
覗き込んだ順平とゆかりは「？」な状態になっている。

「なんか、見覚えあるね…何撮ったの？」

『内緒！』

それから早足でポロニアンモールに行き、まずは皆でプリクラを撮
ったりクリームゲームをやったりした。

前にジャックフロストのぬいぐるみを2つ取った事がある、と自慢
したら桜が目を輝かせて「頂戴っ！！」って迫って来たからちよっ
と引いた。

1時間くらいしてから、うち以外は飲み物を買に行ったので、今
は噴水の縁に座ってボケーツとしてる。
ふと水中を見れば、硬貨がキラキラ。

『あー：エリザベスも（大量に）投入してたっけ。

あれだけの量が何であったのか：とか突っ込んだら負けかなあ』

総額幾らだったんだよ、勿体ない。

第1回宿題ストライキ！ 2（前書き）

前書きのネタが思い付かない…。

第1回宿題ストライキ！ 2

「ワンツ、ワンワンツ！」

「コロマル久しぶり〜！」

傷が完治したコロマルが、寮に来て一緒に戦ってくれる事になった。

佳織は、アイギスの通訳の元仲良く皆と会話（？）するのを少し離れて見守る美鶴の所に向かう。

順平がコロマルに餌をあげようとしてそっぽ向かれてる。

何か、コロマルは楽しそうだから良いんだけどね。

アイギス、うちが桜の隣にいとホンツト容赦ないからね…。

『コロマル、怪我が治って良かったですね』

「そうだな。しかしペルソナ使いになるとは思わなかったよ…」

『え？うちらとしてはアイギスみたいな専用ロボだけでも十分驚きましたけど？』

半ばおどけて言つと、「それもそうか」と笑い返された。

「キーインツ

『っ…いた…』

耳鳴りの様な金属音と共に、また頭痛が襲って来る。しかも毎回「

丁寧に痛みが増して来ているから、ぶつちゃけたまったもんじゃない。

「高瀬、どうした？」

前頭葉の辺りを押さえて痛みが消えるのを待っていると美鶴先輩が気を使ってくれる。

『何でも無いです。ちょっと頭痛がしただけですから』

「あまり、無理はするんじゃないぞ」

『あは。先輩、有り難いですけど気を使うなら桜や他の皆に、ですよ？』

動画を見ている側だった時でも、ハードだと思った主人公のスケジュール。

実際には倒れるんじゃないかと、ヒヤヒヤする。

すると、ガチャツと扉が開いて幾月登場。

リアクションする気にもならないから、無言で睨む。

「こんばんは。コロマルの傷は治ったかな？」

「ワンワンッ！」

「おかげさまで、元気になりました。」だそうです

それは良かった、とコロマルに何か差し出した幾月。

コロマル専用、首輪型の召喚器。

「あ、そうだ…高瀬君」

『何ですか？（うちを呼ぶな。）』

呼ばれて、不機嫌をなるべく隠した棒読み口調。

うちの心中を知ってか知らずか、貼り付けた笑顔で。

「そろそろ、S・E・E・Sに正規入部してくれないかい？」

「あ、そういえば佳織さんって補欠扱いなんでしたっけ？」

作戦室のソファで読書していたのに、いつの間にか顔を上げて聞いてくる天田。

『（…何でこのタイミングで。）』

理事長、前にも言いました。“正規入部はしない”って。うちがS・E・E・Sにいるのは、それが条件だった筈です』

“絶対にコイツのいる間は入らない”って決めてたんだ。こんなところで覆されてたまるか。

「それは、君の言っていた“目的”が果たされていないから？」

『そう、ですけど？』

——何を企んでるんだよ。

やたらと掘り下げて聞いてくる幾月に、いよいよ嫌悪感MAXになりかける。

「手伝えない？僕達は仲間じゃないか」

『……………良く言えるな、そんな言葉が』

安っぽい言葉にイラツと来て、思った事が口から洩れる。
幸い、聞こえていなかったみたいだけど。

(とか言ってる場合じゃない。何とか悟られない様にしないと…)

軽く息を吸って、吐く。

感情的にならない事を最優先に、断るんだ。

『理事長のお気持ちは嬉しく思います。』

ですが、うち個人の問題なので気にしないで下さい。
強いて言うなら、だれにも干渉されたくありません』

邪魔するな。アンタが1番目障りなんだ。

荒垣先輩と桐条さんと皆を助ける為に、計画を進めていた。
そろそろ、第2段階に移った方が良いかもしれない。

追求して来なくなった幾月にホツとして、庵に帰る用意をする。

『これから頼むね、コロマル』

学生鞆を背負って、新しい仲間の頭を撫でる。

「クウ〜ン……」

コロマルは動物の本能からか、うちを心配そうに見上げていた。

第1回宿題ストライキ！ 2（後書き）

だんだん、焦り始める佳織。
その内強行手段に出ちやうかも。

ヒバ！夏祭り！（前書き）

夏祭りのイベントは、女性陣と行く派の私です。

ピバ！夏祭り！

8月半ば。母さんが夏祭りがあるのを教えてくれた。

「ほら、お小遣いあげるから彼氏とでも行つてきなさい！」

『かーさん…うち彼氏いないけど？』

「なら、お祭りで作っちゃいなさい」

『あー…また無茶な注文しないでよ』

ていつか、うちは生涯独身な気がする。

そんな感じで会話しつつ、部屋で一緒に素麺を食べるけど、御中元なのか箱の中身は減る気配がない。

『やっぱりさ、この大量の乾麺だけど、寮の皆にもあげて良い？』

ざっと20人分はあるんだから、消費しないと勿体ない。

「そうね、じゃあコレとそこの箱も」

数束渡された後に、まだ部屋の隅にあった3箱を示される。

…幾ら何でも、多過ぎやしませんか？

『こんにちは。あ、順平と天田じゃ……2人共、何やってんの？』
若干よろけながら寮の玄関をくぐったら、まず目に見えたのはジョッキ片手に向かい合う順平と天田だった。

しかも、テーブルには中身の入った同じジョッキが4個。空のが2個。

「何って（ゴキユ）、ミルクケーキ（ゴキユゴキユ）飲んでんだよ」
『飲むか喋るかどっちかにしろっつーの』

「僕、2杯目終わりました！」
ビシッと手を挙げて宣言する天田がショックだったのか、ビシリと固まる順平。

ソファには他のメンバーが揃っていて、各自のんびりとしている。

「お前か、高瀬。また何やらデカいの持って来たな」

『ちわっす、真田先輩。コレっすけど、皆で食べて下さい』

そう言って、トストスと素麺の箱をテーブルに積み上げる。

予想外の量に桜とゆかりが目丸くしていた。

ナハハ…と苦笑いする佳織。

「しばらくは、食料に困らなさそうだね」

「素麺か…。たまには良いかもな」

『真田先輩、間違っても素麺とプロテインをセットにしないで下さいよ?』

この人ならやる、間違いなくやる。

「そうだ、高瀬は16日は空いているか?」

『ヒマですよ。確かお祭りがあるって聞いたので行こうかと「よかつたら、一緒に行かないか?」マジですか!?!』

早速素麺を茹でようとキッチンに向かった2年女性陣。

その後を追おうとした佳織に、思いがけない美鶴からの誘い。

クルッとターンして美鶴の前に座ると、やや恥ずかしそうに肯定が返ってきた。

わーい!美鶴先輩と夏祭り〜!

予想外すぎるよ!素麺のバカとか言っでごめんね〜。

スキップしながら帰り、母さんに報告。

「いいわよ、行ってきたら?」

『やった、何かお土産買ってくるね!』

お祭り当日、佳織は浴衣姿で寮の玄関前に立っていた。

淡い緑色の布地に朝顔の花が刺繍され、腰の帯は藤色の無地といったシンブルなもの。

カラコロと下駄を鳴らして音を楽しみながら美鶴が来るのを待つ。

「もういたのか、早いな」

『そりゃ、楽しみでしたから!色々と夜店回りますよ!』

手に持った巾着袋を揺らしながら、肩を並べて歩く。

『なーんか、こうしているとカップルみたいっすね!』

神社は既に多くの人で賑わっており、少し声を大きくして話し掛ける。

「むしろ、姉妹かもしれないぞ?」

冗談なのか、楽しそうに乗ってくる美鶴先輩。

そういや、お祭りとか初めてじゃなかったっけ？

“お嬢様”も大変そうだな…。

『（そうと決まれば！）

先輩、金魚すくいやりましょう！』

グイグイと手を引いて露店の前まで行き、おじさんにお金を出す。
2つ網を受け取って、紙製のお椀も渡してやり方を説明。

『ヨッ、ホイッ、ソレツ…あ、破れた』

ゲージの隅にいる金魚を狙って素早く掬うけど、やっぱり簡単には捕まらない。

それでも4匹ゲット。最高記録！

隣では、先輩が初めての金魚すくいに悪戦苦闘している。

「中々、紙に乗せるのは難しいな…っ、破れたか…」

先輩のお椀を覗くと、赤いの2匹と黒いの1匹。

（先輩スゴっ！）

初めてで、これだけ上手なものにはちょっと妬いた。

うちは初めての時、1匹も捕れなかったのを今でも覚えてる。

それから屋台で射的をしたり、綿飴を買ったりして楽しんだ。

最後にお面を買ったら、フロスト君お面を先輩がしていて色々ヤバかった。可愛い！

「遊んだ遊んだ！先輩、今日は誘ってくれて有り難う御座いました
！」

「こちらも楽しかった。私の知らなかった事が、君達には当たり前
なんだな…良い体験だったよ」

お土産にイカ焼きの袋を持って、庵の近くまで一緒に帰る。
途中で見えた花火が、今までで一番綺麗な色をしていた。

ビバ！夏祭り！（後書き）

美鶴先輩とデート？な感じ。

桜は他の人の行ったと思います。

犯人は必ず現場に！…来るかな？

学校から帰って早々に、佳織は携帯を開く。

ープルルルル…ガチャ

『こんにちは。いきなりすみません、桐条さん』

「《君か、何か用かな？》」

電話の先は、桐条グループの本社社長室。相手は当然、今現在も執務中であるう桐条武治。

突然の電話に驚いた様だが、何も言わずに応じてくれる。

『お聞きしたい事があるんです。少しお時間を貰えませんか？』

パラパラと手元のノートを見ながら、疑問に思った事を話し出した。

用件は、桐条グループ第2ラボについて。

3日前、佳織は“調査”の為にラボを訪れた。

門柱のパネルに、カードを翳す。最初に来た時に案内してくれた女性
性が、中に通してくれた。

「先のお電話通り、開けられる部屋は入って構いません。
しかし、地下へは行かないで下さい。私達も入る事は許され
ないのです」

その後彼女は仕事に戻り、うちは描いてくれた地図を見ながらラ
ボ内を歩く。

1階の見取り図を見た時、気になる記述があった。

“シャドウ用研究室”

『…シャドウの研究？』

岳羽永一郎さんが主任だったから、あのビデオに映っていたのは…
ここ？』

10分くらい歩いて、頑丈な鉄の扉の前に着いた。深呼吸して、中
に入る。

『……………うわ』

部屋は思ったより広く、機材やら何やらが無造作に鎮座している。
部屋の壁に沿う様に配置された長テーブルには大きなシリンダーが
多く置かれ、中を色違いの液体が満たしている。

テーブルの物も気になったけど、部屋の一角にあるソレにはかなり
驚いた。

コンソールに繋がる、特殊な形の椅子。

『この椅子…アイギスの！』

ちょっと形は違うけど、見た感じ間違いない。

所々ひび割れて、随分使われてないっぽかった。

椅子の上に置かれた書類が気になり、手に取って読んでみる。

『七式対シャドウ用兵装経過報告書』…。

日付は10年以上前か…』

・七式以外の対シャドウ兵装は性能に問題有り。早急に新たな個体の製作が必要とされる。

・七式アイギスのペルソナは“パラディオン”とする。従来のデータを比較し、最も効率の良い召喚方法を模索すべし。

・影時間内の動力源は、胸中の“パピヨンハート”を利用。更なる進歩が七式には期待される。

書類を読み終わって、最後のページの右下を見ると見慣れた名前が記されていた。

“経過報告者…幾月修司”

『……………写している』

バッグからノートを出して要点だけ書く。手近な所にあった他の資料も全部写した。

『どうにかして阻止しないと…やる事山盛りじゃん』

床に落ちていた紙を拾い、一旦外に出た。と、向かい側の扉から1人の研究員が出てきて衝突しそうになった。

『っ、すみません』

「つとと…。いえ、気にしないで下さい。…あれ？貴方は…」

若い男性研究員が佳織を見て、何かに気付いたような顔になる。

が、軽く首を振って

「知り合いに似ていたので、つい…」
そう言ってから会釈して立ち去った。

『何だ、あの人…？』

1階を調査してめぼしい物は他には無かった為、佳織はエレベーターで2階上がった。

『うおっ、あつつい…』

えーと、地図には《武器工場》って書いてあるな…良いのか？法治国家日本で武器なんて造って』

柱に書かれている2階フロアの案内図を見ると、親切にも研究員が説明してくれた。

…長すぎてあんまり分からなかったけど。

どうやら、ラボ内の人達はS・E・E・Sのメンバー全員を資料で知っていたらしい。

近接用の武器フロアに案内されて、試作品を試して欲しいと言われ

た。

目の前にセットされた4体の藁人形相手に、《錦》という名の刀を振るう。

“切れ味は悪くないけれど、ちょっと重すぎる”

そう評価すると鍛冶師の人が、うちから刀を預かり柄を拳で叩いた。すると柄の一部が開き、中から鎖付きの鉤爪が出て来た。

『え、コレって?』

重い理由はコレかい!と内心突っ込む。

ジャラジャラと細いのに、1〜2メートルはありそんな鎖がどうやってしまわれたかは謎だけだ。

『(ん?ちょっと待ってよ…。コレ…使えるな)』

「S・E・E・Sの方なら、無条件で差し上げます。どうぞでしょうか?」

『分かりました、使わせて下さい』

即決。

鎖使いとか、やってみたかつたんだよね〜
タダほど恐い物は無い?んなの関係ないし!

《(佳織って目移り激しいね)》

じつくり錦を見てみると、脳裏に「やれやれ」と肩を竦めるファルロスが。

（む、それは聞き捨てならないなファルロス君？）

《（前に買った刀はどうするのさ？）》

（使い込むに決まってんじゃない。コイツに働いてもらうのは先の話だよ）

「あの、どうかされましたか？」

『！いえいえ、何でも！』

セーフ。ファルロスと話している時に百面相でもしていたらしい。

と、年配の研究員達が何やらコソコソ話し合っているのが視界に入った。

「…なら大丈夫じゃよ」

「いやアカン、無茶だ」

「そつは言つてもな…」

『すみません、何のお話されているんですか？』

「」「！」「」

『わ、ごめんなさい！ただ話の内容が気になってしまっ…』

「…お嬢さん、不思議に思わないかい？」

『はい？』

ヨレヨレの白衣を着たお爺さんからの突然の質問。

何を聞かれるかと思えば、“どうしてここが第2ラボか” そんな事を聞かれた。

『気にはなりますけど、昔の事ですし…』

「そうかい。…頑張ってくれよ」

そう答えた時、何だか残念そうな顔をしていたのは気のせいだと思う。

工場の人達に「頑張って下さい！」と帰りに紅茶のパックを買ったのは儲け物だった。

後で桜達と飲もうと！

『つまり、うちの疑問は“あのラボには隠滅された情報があるんじ

やないか”という事なんです』

《「ふむ…。確かに武器工場は承認しているが、私も全ての部屋に立ち入った事は無い。」

少し報告させよう、君の求める事実が明るみになるかは分からないがね」》

『有り難う御座います。』

もうこんな時間だ…。貴重なお時間を割いて頂いて本当に有り難う御座いました。

今日はこれで失礼します』

《「ああ、美鶴達にも宜しく」》

買い物（アクシデント）びより？

今日は桜、順平、真田先輩という珍しいメンバーでポロニアンモールへ買い物に来た。といつても、ぶつちゃけ順平と真田先輩は荷物持ち（強制&自主）だけど。

『桜、まずは？』

「軽いのから買っていこう。タルタロスでのアイテム…《トラエストジェム》と《反魂玉》だね。ちょっと多めに買わないと」

「あ、ついでに体力回復も買おうぜ。最近シャドウも手強くなってきたしな！」

「それとプロテインもだ」

『絶対ダメです！（これが目的か！！）』

「自分で買ってください！」

「まだ冷蔵庫の半分はプロテインで埋まってるんすよ！？」

見事に重なった後輩3人のセリフ。どれも本音ばかりで、プロテインバカの真田を必死に止めようとする。“これ以上買ってどうすんの！”と3人の顔には書いてあるが、真田は気付かない。

薬局に向かおうとするのを、こちら全員で引っ張って阻止しました。

「それじゃあ2つに別れて、私と先輩とアイテム補充に行ってくる

ね

『オツケイ。ほんなら、うちは順平と新しい武器を黒沢さんところで買ってくる』

1時間後に噴水前に集合。そう決めて、うちらは別々に行動開始した。

黒沢さんところで皆の武器を新調し終え、アイスを買って食いしながら順平と歩いていると、なんか嫌な集団を発見。

あー……。なんて声出してる間に、溶けたアイスがアスファルトに落ちた。

「どした？溶けてるぜ、アイス」

『…順平、YESかNOで答えて。目の前の連中から逃げた方が良いと思う？』

うちが指差した方向、路上でたむろってる集団を見た順平は、「げっ…」なんて声を詰まらせて数秒後に首を振った。

『だよね〜。よし今すぐ回れ右「オイ、そのアマ！」…聞こえな

「い。何にも聞こえない」

ガシリと順平の手首を掴み、ダツシュで逃げる。うちだけなら、路地裏のベルベットルームに逃げられるんだけど順平がいるからなあ……。

しかも、いつぞやの荒垣先輩達にボコられた不良が数人。顔を覚えられてしまったらしい。

『悪い順平、ちょっと巻き込まれて！』

「何に！？つか、何だよアイツら、もしかしてオレ狙われてる！？」

『うん。前にうちがドロップキックしたヤツがいるから間違いなく追われてるね』

傍目から見れば手を繋いで走ってるように見えるけど、今はそんなこと言っていられない。

テキトーに角を曲がり、順平をアイツらからは死角になる場所に誘導する。荷物は全部押し付けた。

(それにしても、またお灸を据える必要があるらしいな！)

落ちる横髪でピンで留め、連中の前を駆け抜ける。タルタロス補欠の実力、嘗めんなよ！

案の定「待てゴルア！」「借りを返してやる！」などなど罵声が沢山飛んで来ます。

『おーおー、弱い犬ほど吠えてますねえ。』

……全く、どうなっても知らないよ』

時計を見ると、集合まで15分しかない。
ちやっちやと終わらせるか。

(メンドクセ。激メンドクセ)

打撃に強いペルソナ《ハマヌーン》を装備して、迎え撃つ。

「よお、久し振りだな嬢ちゃん。今日は逃げねーのか？」

前より増えた人数を相手にするのは骨が折れるけど、もっと恐いの
は美鶴先輩にバレル事。“処刑”されるうう…！

ザツと目を走らせると、数は15〜20人。

金属バットに木刀、スタンガンまで所持してる。

うちを刺る気満々だな、コイツら。つか、順平が黒沢さんに通報し
てくれないかな…そうしたら楽なのに。

『生憎と、アンタら雑魚に構う時間は無いんだよ。どけ』

あああ、うちっては何言ってるんだよ…！これじゃキレルだけじゃん！
つつい口を開いたら出た挑発に連中はキレた。数人がバットで殴
りかかって来る。

『メンドクセな、ったく！』

ドガァ！バキッ！

まずは両ストレートで2人アウト。続いて横風ぎに振るわれるバットをしゃがんで回避し、足払いを目の前の金髪に仕掛ける。

つか、うち完全に不良少女じゃん！

楽に動けてしまう分、シャドウより何倍も簡単に思えてしまう。後ろに気配を感じ、サイドステップで回避した瞬間、地面がバットで砕かれた。

1人、また1人と軽く脳震盪を起こさせて戦闘不能にしていく。まとめて凍らせたら一発で問題解決するけど、流石に普通の人間相手にスキルは使えない。

『…ハア。何か、うちのキャラが変わってる気がするよ…』

攻撃を避けながら、思わず溜め息を吐く。場慣れしてきたのが悲しい。

「ちょこまかと鼠みてーに……！さっさとくたばりやがれ！」

『嫌だね。しつこい男はモテないよっ！』

スタンガンを構える不良A。対して、うちは他の不良から奪った木刀を握る。

取り敢えず、木なら通電はし難いから大丈夫でしょ。ペルソナもアースに変えてるし。

（さて、峰打ちが楽だけど体格差があるし……。この木刀、結構重いな）

普通の刀は、片手持ちだから両手持ちは慣れてない。

こんなことなら、順平に両手剣の使い方を教わっておけばよかった！
この木刀、無駄に刀身が長いっつーの！

『せえっ…の！』

脛を狙って振るが、ジャンプしてかわされた。体力もそろそろヤバ
い。

と、不良がアスファルトのささくれ立った部分に躓いてバランスを
崩した。

(ーよしっ！)

好機、と首筋を狙って木刀を振り下ろそうとした瞬間。

《(駄目だ、佳織！)》

焦ったファルロスの声。

『何…うわっ！』

ガクンと右足首が後方に引かれ地面に転倒する。倒れる時に、視界
の端でいやらしく笑っていたのは気絶させた筈の不良。

「多勢に無勢だな、勝負あったぜ！」

見上げると見えるのは、スタンガンの火花と復活してうちを取り囲
む数人の不良。

いくらペルソナ付けてるからって、加減を間違えたか…！

『っ、く……!』

ちよつと、マズいかも…!

「佳織ツチ、大丈夫かよ…。やっぱり桜達に言った方が良いんじゃない？」

荷物全部を押し付けたアイツが、不良達に追われてから15分経つた。

走り際に『先に合流して!』って言われたものの、そんな訳にもいかねーから2人を探す。

「確か、アイテム補充に行ったからこつちに「順平!」桜ツチ、大変なんだよ!」

今しがた買い物を終えたらしい2人に、事情を説明する。何回か噛んじまった。

「じゃあ、佳織は1人で!？」

「あのバカ、何考えてるんだ!」

「とにかく、あの人数はヤバいッスよ！
早く追わないと！」

「お前らか、交番前で騒ぐな……」

「「黒沢さん！」」

助かった、と思ったのか、桜ツチと声が八毛る。

「どうした、そんなに慌てて？」

「黒沢さん、実は高瀬が不良に追われているらしいんです。今から助けに行きますので手伝ってもらえませんか？」

真田さんの説明に、黒沢さんの顔が険しくなる。

「分かった、すぐに向かおう。場所は分かるか？」

「あ、その路地裏です！オレ見てましたんで！」

「よし、お前は残って美鶴に連絡しろ。俺達で行く」

「りよ、了解ッス」

「本官は少し準備してから行く。なるべく騒ぎを大きくするなよ」

「分かりました」

「はい。美鶴への連絡、忘れるなよ」

ーバチバチバチイツ！

「ぐああああ!？」

スタンガンの衝撃と電撃を覚悟していたのに、うちの鼓膜を揺るがしたのは不良の悲鳴だった。

不良が倒れる音の後に響く、コツコツという革靴の音。

『…なんで、出て来て………』

蒼いワンピースを纏う浮き世離れた女性ーエリザベスが、ペルソナ全書を携えて佇む。

エリザベスは、うちの側に来ると服の上に落ちた1枚のカードを拾い上げた。

『それ、うちが前に作った………』

彼女が指に挟んでいるのは、“電撃反射”をもつ《パールヴァティ》のカード。

うちの中からは既に消えているけどね。

辺りを見回すと、不良が全員倒れている。

散らばったカードから察するに、エリザベスが全員のしたらしい。

『危なかった…。有り難う、エリザベス』

「ご無事で何よりです。主が心配されていました」

『あはは、イゴールにまで心配させちゃったか…。うん、謝ってたって言っというて』

カードを集めて差し出すと、聞き慣れた声が聞こえた。

「では、私はこれで」

『ホント有り難う。またね』

一礼して、エリザベスはベルベットルームに戻っていった。

その後、うちが桜や真田先輩、更に順平に呼ばれた美鶴先輩達から耳が痛くなる程お説教させられたのは言うまでもないよ…トホホ。

「寮に帰ったら、更に説教だな」

「もう、佳織のバカ！」

『だって、って！桜、謝るから！謝るから《ムドオン》はやめて！マジで死ぬ！！』

2学期開始！ついにメンバー揃った！

キーンコーン。朝のHRタイムっす。

ボケーンとする佳織を気にせず、鳥海は転入生…アイギスを隣に立たせる。

「今日から仲間入りすら事になった、転入生よ。

…じゃ、自己紹介してね」

教室中の視線がアイギスに集中する。金髪の子なんてクラスにはいないから余計に皆は気になるらしい。

一方、アイギスはクラスほぼ全員の視線を受けても動じず、直立不動で自己紹介に入る。

「アイギスです。皆さん、ひとつ宜しくお願いします」

「…アイギスさん？珍しい名前ね。外国生まれなのかしら」

（いや、バリバリ日本生まれですって）

なんて心の中で呟く。後ろを見ると、他の3人がアイギスが何かしでかさなにか緊張してるのが顔に出てる。

「他に特記事項は…ん？人型…戦術兵器？」

「ちよっ!?!?」

「えっ…」

「ぶっ！」（ゴンッ！）

『（あ、順平、机に頭ぶつけた）』

目を白黒させる数人には気付かずに、鳥海は胡散臭そうに書類を読むと一言。

「…なんか間違いな、この書類。見たもの、聞いたもの全てが正しいなんて思っちゃ駄目よね」

「そ、そーですよー！」

（（順平、声裏返ってるよ…））

「えーと席は…どっか空いてるー？あ、そこ空いてるじゃない。神碓さんの隣。」

ビシッと書類で桜の隣を指し、アイギスに席を示す。

途中で順平の意見を封殺して、お構いなしにHRを進行していく。

『（やれやれ、鳥海先生は大物だな）』

授業の用意を出していると、「私の大切は、この人の傍に居る事ですので」とか言ってるのが聞こえた。

ゆかりが早くも疲れてるっぽい顔してた。ドンマイ。

その後は特に何も無く昼休みになり、桜の携帯が鳴った。

(来たかな、真田先輩からのお呼びだし)

と思っていると、うちの携帯にもメールが。

『あれ、ちよつと意外。“了解です、すぐに行きます。” っと…』

送信。いよいよ、荒垣先輩の加入か…ワクワクするなあ！

放課後アイギスが「一緒に帰りませんか？」と言ってきたけど、今日は先輩に呼ばれる旨を伝えて校門に急ぐ。

「ようやく来たか」

『桜ってば、のんびりやさん〜』

「え？佳織？」

校門にいた仲間に、なんで？と驚いていると『うちもお呼ばれ〜』とユルい口調で言われて納得。

「お前ら、話は後だ。ついて来い」

『はーいつ』

「何だか、佳織凄く機嫌良いね……」

スキップして先輩についてく佳織と、桜は苦笑しながら歩いて行った。

来ました、はがくれ！

入りたいのを抑え、こちらは（というか真田先輩だけど）待ち人を待つ。

少ししてはがくれのドアが開き、待ち人の荒垣先輩が出て来た。

「いい加減しつけえぞ！」

真田先輩を見るや否や、彼は不機嫌そうに眉を顰める。

逆に真田先輩は荒垣先輩の言葉を無視して目の前にトランクを突き出した。

「事情が変わった。悪いが今日は“ノー”と言わせる気は無い。これ分かるな。お前が使ってた召喚器だ」

「……………」

黙る荒垣先輩に、真田先輩は“ペルソナ使い”が敵として現れた事を告げた。

しかし「興味が無い」と言う荒垣先輩も、次の言葉で表情を変えた。

“天田がS・E・E・Sに加入した。”

数瞬考え、そして聞こえた「傍に居ねえとな…」という呟き。

最初は分からなかったこの言葉の意味も、今じゃ理解出来て複雑。

「…おい」

『はい？つて、あれ？桜と真田先輩は…』

考え事をしていたせいで、目の前に荒垣先輩が立っているのに気付かなかった。

しかも先輩によると、2人は先に帰ったらしい。

『え、これってあれ？置いてきぼり！？』

ガーン！と文字が頭上にある気がするのは気のせい。
と、なんか知らないけど思いつきり溜め息吐かれた。

「（何なんだコイツ。一人で百面相したと思ったら、勝手にシヨック受けて…。）
相変わらず分かんねーヤツだな」

『あー…桜ヒドい。桜と真田先輩のバカ…』

「つたく…おい、行くぞ」

1人で愚痴っていると、荒垣先輩が急に踵を返した。“どこ行くんです?”と聞いても答えてくれずに、そのままはがくれに入ってしまった。

『あれ、さっきラーメン食べて来たんじゃない?』

「おっさん、コイツに“特製”1つ」

『無視ですか!?しかもお代くらい自分で払いますって!』

財布を出そうとすると、“俺の話に付き合わせる駄賃だ”と止められる。

『…良いんですか?』

「ああ。お前、何でアキについて来た?」

『（ズズツ）それは、うちも知りません。』

今日の昼休みに先輩に呼び出されて来ただけなので…』

「だったら、アキに聞かねえとな。

お前らのリーダーはどんな感じだ」

『どんな感じって、学校ですか?それともタルタロス?』

「タルタロスに決まってるだろ」

『ん〜と…、桜は凄いですよ。ペルソナの複数所持をしているから、どんな状況にも臨機応変に対応出来ますし』

「他には？」

『…どこか、似ていますよ。荒垣先輩に』

「！」

箸を井に置き、顔を先輩に向ける。微かに動揺したのが分かった。

『彼女、探索の時は必ずメンバーに1人1つはトラエストジェムを渡すんです。』

『例えば自分の分が無くても“気にしないで”って。』

『……うちが原因かも知れないですけど』

「お前が？どういう事だ？」

『初めてのタルタロス探索の時、うちが自殺行為…みたいな事をしたんです。後でこっぴど怒られましたけど。』

『それが拍車を掛けているんじゃないかって思うんですよ』

「アイツは、それを根に持ってたのか。」

さつき、“お前は何の為に戦う？”って聞いた。そしたら、アイツは何て言ったか分かるか？」

『いいえ』

「（見事に即答だな…。）アイツはこう言っていた」

「大事な人を…守る為です。
…もう、あんな恐怖は味わいたくありませんから」

「…っとな。」

ずっとお前を横目で見てた。考え事してて、お前は気付かなかった
みてーだか」

『……………ハハッ、まさかそこまでだったとはね…………』

自嘲気味に笑ってしまふ。つい、手で顔を覆う。
うちが思っていたより、ずっと桜は優しくかった。…優しすぎる。

『うちも人の事、言えませんね。“類は友を呼ぶ”…かな』

これじゃあ、先が思いやられる。計画を実行した日には、桜からのピンタを覚悟しておかないと。

それにしても、

『…うちなんかより、守るべき人なら他に居るでしょーが。全くあの子は…』

と、荒垣先輩が“思い出した”というようにこっちを向いた。

「そついやアキに言われたが、しばらくの間、お前のお目付役は俺だ」

『……………今、何と？』

「だから、タルタロスでは俺がお前を見張るって言うてんだ」

『…何でスカそれは！？』

ガターン！

驚きのあまり立ち上がった不可抗力で、椅子が倒れた。

先輩の「お前こそ何やってんだ…」と呆れられた声で我に返り、そそくさと椅子を立てて座り直す。

『（何！何なのこの、非常においしいイベ…じゃない！）』

マズい、ついヲタクの性分が。…深呼吸、深呼吸。

ひっひっふー…よし。

『ちなみに、それはいつ決まったんですか？』

「さあな。アキの独断じゃねえか？」

（んなバカな…。まさか、あれからタルタロス探索の時に先輩達がエントランスで何やら話していたのは、これの為！？
うちが真田先輩だろーと美鶴先輩だろーと隣にいる人お構いなくシヤドウにスキルぶっ放してたのが原因！？）

1人で悶々と考えていると、先輩が立ち上がって「そろそろ帰るか」とカウンターに代金を置いた。

「いつまでそうしてんだ、帰るぞ」

『うわわっ、先輩待ってくださいよ！まだメンマ食べてないんですって！』

「早くしろ。」

（賑やかなヤツだな、ホントによ…）

いつもこんな感じで騒いでやがるのか。
見えて飽きねえな。

『今先輩、笑いました！？』

「笑ってねえ」

『いや、絶対笑った！』

「見間違いだろ」

『笑ってます！唇つり上がってますから！』

騒ぐ後輩の頭に手を置いて「早く行くぞ」と俺は先に外に出た。

満月の大型シャドウ戦！ 隠者 1

今日は大型シャドウのハーミット戦。と同時に順平がチドリに捕まる日。

初見の時はちよつと呆れた。でもまあ、気になる女の子相手だし。

「ねえ佳織、今日は？」

昼休み。お弁当食べてる所に桜がやって来た。桜はもう食べたらしい…早いな。

『（モグモグ…）うん、今日のも参加で。メンバーには入れて欲しいかな』

「それは相手次第だよ。どうしようかな…」

ハーミットは、うちや真田先輩と同じく電撃を得意とするからね。ゆかりやアイギスは抜いた方が良くないよ？

そして、夜がやって来る。

影時間、巖戸台寮作戦室。天田が順平を探しに行き、風花はルキアでシャドウを搜索する。

「今日で、もう6度目の満月だね。敵は見つかったかい？」

《はい…多分、ポロニアンモールの辺り……だと思っんですけど。何だかモールの周辺から、ぼんやりと感じるだけで…。範囲を絞ろうとはしてるんですけど…》

「今回のシャドウの“能力”って事か？」

《分かりません》

「十分だろ。そんだけ分かりや」

扉を開けて入って来た天田は、順平がどこにも居ない事を伝える。ゆかりが怒りを露わにするが、幾月に宥められて口を閉ざす。

「大丈夫だよ多分。その内フラツと戻って来るって」

《寮の近くにも居ないようです。念の為、少し時間を使って探してみますか？》

風花の提案に美鶴が首を振る。とにかく、出勤になった。

『……………順平ファイト』

既にチドリに捕まっているであろう彼に同情します。合掌。

「おい、順平、何か言ってなかったか？」

「私は聞いてないです。てっきり来るのかと思ってたので…心配ですか？」

「さあな。何やってんだ、行くぞ」

『了解しました！』

影時間特有の霧囲気に包まれたポロニアンモール。特に真っ赤な噴水が、不気味さをアップさせている。

『うわ、血の噴水…』

「そーゆう事は言わない。ただでさえ不気味なんだから」

ゆかりに叩かれてしまった。見たままを言っただけなのになあ…。

風花は再度ルキアを召喚して、大型シャドウを探す。けど、顔がかなり険しい。

《見つからない…こんなに近くに来ているのに、どうして?》

「時間が無い。手分けして探すぞ！」

美鶴先輩の言葉にうちらが頷いて散開しようとした時、風花がそれを止めた。

“自分の役目だから”

先輩は彼女の願いを聞き入れ、風花は更に神経を研ぎ澄ませていく。恐らく凄まじい集中力で探っているんだ。額に汗が浮かんでいる。

やがて風花の口から出た単語は“網目”と“四角い部屋”。

そしてその単語に反応したのは、アイギスと荒垣先輩。

「網目……。もしかすると、地下ケーブルと関係があるかもしれないん。

ここは島が建設中だった頃、工所用電源基地だった場所ですから」

「そっぴや“エスカペイド”のフロアやってるヤツ…。最近電源の調子がどうかボヤいてたな。

元々は古い地下室を改造したモンらしい。

おかげで、デカいイベントがパアになっただとも…」

《有り難う御座います、アイギス、荒垣先輩。
今ので全部分かりました》

「ええっ、風花アンタ、分かったの!？」

『さっすが〜!』

「こら高瀬、余計な茶々を入れるな」

『ういッス…。(真田先輩に叩かれた…)』

内心ポロリと涙目に。なんか最近よく叩かれるな…。

《ケーブルにシャドウの位地が攪乱されてる訳じゃなく、そのケーブル自体が、シャドウに乗っ取られているんです!》

「え、じゃあ、足の下はそこら中シャドウって事!？」

『けどさ、全部って事は無いんじゃない？』

モノレールの時みたく、コソコソ隠れてる度胸無しのムカつく本体が居ると思うよ』

「佳織、散々に言うね…」

『だって、“大型シャドウ”なのに度胸は“小型”とか、単なるチキンじゃんか。』

ぶっ飛ばしてやるから面見せろっつーの』

ポキポキと指を鳴らす。文句のあるヤツはかかってこーい!

「とりあえず、突入組で撃破するぞ。神崎、メンバーを決めてくれ」

「はい。」

(電源基地だった事を考慮すると、相手が何かしらの形で電気を使うかも知れない。)

だとすると、電撃に弱いアイギスやゆかりは無理がある。(メンバーは、私と佳織、真田先輩、荒垣先輩で行きます)」

「（この人が居るのは）少し心配ですが、桜さんなりの考えがある
のですね。分かりました」

『（おっ？今日は何も言わないアイギス）』

ホツとしていると、アイギスがこっちに歩いて来て小声で一言。

「桜さんに怪我をさせないでくださいね」

『アハハ…うん、頑張ります。（そんな訳ないか…ガツクリ）』

《私はここからサポートします。皆さん、気を付けて！》

「うん、行ってきます！」

満月の大型シャドウ戦！ 隠者 2

エスカペイド、地下室。

思った通り、隠者の大型シャドウ（ハーミット）が居た。

…何かケーブルがやたらと多い気がしなくもないけど。

《シャドウの心臓部です！

電気を攻撃に使って来るかもしれません。どうか気を付けて！》

『よっしゃあ、叩きのめす！』

「サツサと終わらせるか…シンジ、あまり無理するなよ」

「テメエに言われるまでもねえ…」

「風花はアナライズを！」

佳織、補助系のスキルでサポートお願い！

真田先輩は相手の動きを攪乱して下さい。

荒垣先輩は隙を見て攻撃を！」

『りょーかいつ！』

パールヴァティ、《マハスクカジャ》！

そんで、アース《マハラクカジャ》！』

「カストール…《デッドエンド》…！」

「行くぞっ、ポリデュークス！」

佳織が全員的能力を上げ、荒垣と真田が道を作った所で、桜が薙刀

を構えてハーミットに迫る。

「せやつ、はつ、ーやあつ！」

最後の一撃がクリティカルヒットし、ハーミットは体勢を崩した。

《リーダー、ナイス！敵、倒れました！》

「今ならボコれる！やつとくか？」

「はいっ！」

好機、と見た荒垣に頷き、全員で総攻撃を仕掛ける。

痛みのにた打つハーミット。“お返し”と言わんばかりに、体に大量の電気を貯め始めた。

『（これって《ギガスパーク》の前兆！）

皆、警戒して下さい。デカイ電撃が来ます！』

「山岸、アレは何だ！？」

《佳織ちゃんの言う通り、ケーブルから電気がシャドウに集まっています。注意して下さい！》

不快感を感じさせる金切り声が地下に響き渡る。

うちは昨日ペルソナ全書から引き出した、“電撃反射”のパールヴアティが別にいるから良い。（多分桜も付けてる）

問題は真田と荒垣先輩っ！

確か、ポリデュークスは電撃耐性有りだけど…ああもう、考えてる

ヒマが無い！

ジャージのポケットから取り出した物を空中に投げる。一瞬の後に、ハーミットから《ギガスパーク》が放たれた。

しかし、全てうちらに届く前に強力すぎる電撃は弾かれ、散り散りになりながら部屋のおちおちを焦がした。

「な…！」

「今のは…。」

『全員、怪我無い！？』

「うん、平気。佳織、今何かした？」

『“マジックミラー”ではね返した！

ちなみに、アレ1個しか無いから次が来る前に仕留めないと！』

次は無いよ！と言う佳織の事はに、私は自分の中の緊張感が増すのを感じた。

と、風花がアナライズの結果を伝えてきた。

《隠者「ハーミット」です。弱点はありません。光・闇属性は無効化します。電撃を吸収するので、他の属性で攻撃して下さい》

「うん、有り難う。佳織は何か他のペルソナを使って！

真田先輩と荒垣先輩は物理攻撃で攻めて下さい！」

『んじゃ、火炎にでもしますかな』

ペルソナを変えたらしい佳織が

『ジャアクフロスト、《アギラオ》かましたれっ!』

…何か、凄く活き活きとスキルを叩き込んでる…。

私もやらなきゃ。リーダーなんだから、しっかりしないと!

「リヤナンシー、荒垣先輩に《ディアラマ》!

先輩、体力には気を付けて下さい。辛くなったら回復しますから」

「悪いな。アキにも頼む」

「はい…あ、もう大丈夫みたいですね」

『ペルソナ、《メディラマ》クマーっ!
なんちって』

「クマ?」

「おい、そこ。ハモってないで動きやがれ!」

「は、はい! (いけない。気になっちゃった)」

雑刀を構え直し、ハーミットが振り抜いたケーブルを振り向きざまに1本、2本と切り落とす。

左右からの攻撃は回避出来たけれど、3本目、4本目に対応しきれなくて転がって難を逃れる。

それでも床を伝わって電撃は私の左肩と左ふくらはぎを焼いた。

「っ！」

『桜っ！』

(リヤナンシーは耐性があるのに、この威力…《コンセントレイト》を使ったのか…！)『』

「くっつ…。やられる訳にはいかない…！」

砲孔を上げ、再び《コンセントレイト》から《ジオダイン》と続けてスキルを放つ。

痛みに耐える為に両目をギュッと瞑る。

しかし、それは私には届かなかった。

目の前に広がった、臙脂。それが荒垣先輩のコートだとは一瞬思わなかった。

「うらあっ！」

「ーバチイーン！」

「あ…荒垣先輩！？」「先輩、何て無茶するんですか！」「シンジ、お前…！」

私達の声が驚きに染まり、重なる。

先輩は自分の武器を力任せに振り下ろし、感電するのも承知で私を庇ったんだ…！

「ぐっ…神崎、無事か！？」

ダメージが大きかったんだ、先輩が呼吸を荒くして片膝をついてしまった。

しかし、膝をついても先輩の瞳からは光は失われない。

『何やってんですか！無茶苦茶ですよ！？』

リヤナンシー、《ディアラマ》！』

佳織が慌てて回復するけど、微かに先輩は感電したショックで動けないみたい。

「すみません、先輩。私のせいで…」

「んな事気にすんな。サツサと片付けて、あいつらの所に戻んぞ！」

『ほい、桜。真田先輩が時間稼いでくれてるんだから、指示よろしく！』

佳織が差し出してくれた手を握り締めて立つ。

有り難う。とお礼を言って、ハーミットを見据える。

「……………佳織。少し頼みたい事があるんだけど、良いかな？」

『OK。何でも言ってよ！』

そして私は伝えた。大切な仲間、無謀ともいえる作戦を。

『いよっし、じゃあ見せ場ということで頑張りますか！』

うちは1度深呼吸をして走り出す。繰り出される高圧電流を纏った

ケーブルは、桜や先輩達がどうかしてくれる。

今付けているペルソナは、仲間内でも1番レベルの高い“死神”《サマエル》。
スキルはさほど多くはないけど、アースの次に頼りにしている。

『サマエル、狙いはハーミットの周囲だ！《マハムド》！』

ボスクラスのシャドウが、こんなんでも倒れるなんて考えてはいない。朱い龍のような死神は、まわり付き闇を発生させた。

ハーミットはそれに気を取られ、暴れる。

ーよし、狙い通り！

一気に走る速度を上げ、暴れる敵に迫る。ハーミットは邪魔者を排除しようと、うちを狙って《ジオダイナ》を次々と落としながらケーブルの数を増やして振るう。

けれど、頭上で3体のペルソナ達がそれを阻む。

懐に飛び込んで、1番太いケーブルを叩き斬ってから背後に回る。

うちに与えられた役目は、危険を覚悟してでも確実にシャドウの動きを止める事。

そうすれば《ギガスパーク》を使われずに済むし、3人が全力でペルソナを行使出来る。

電撃を纏っていない普通のケーブルが下から上に振るわれる。刀の腹でそれを受け、勢いを殺さずにハーミットの頭上に飛ぶ。

腹を支えた左手と手首が衝撃で痛みを発したけど、構わず刀をクルリと回転させて刃を下に向ける。

落下により威力を増した一刀が、ハーミットの背に深々と刺さる。

耳をつんざくような大音量の奇声に、思わず顔をしかめた。これなら黒板を爪で引っ掻いた方がまだマシだ。

ま、うちの役割は済んだから、後は任せますか！

3人が召喚器を構えたのを確認してから、ありったけの力で根元まで刺さった刀を引き抜いて、着地と同時にバックステップで後退。直後、3つの銃声が重なった。

「ポリデュークス《ソニックパンチ》！」

「行け、カストール…！」

「ガンガー、《ブフーラ》！」

どのスキルも完全に相手を捉え、容赦なくその力を見せつけた。

断末魔の叫びと共にハーミットは黒い霧となって消滅。

風花が討伐完了を告げて、張り詰めていた緊張の糸がようやく解けた。

『桜、おっつかれ〜！』

「今回も、無事に討伐完了だね！有り難う佳織！」

互いに駆け寄ってハイタッチを交わす。

桜は先輩達の所にも走って行って、感謝の意を告げていた。

3人が上がってから、うちはハーミットが居た場所に立って“パズル”のカードを取り出した。

回転しながら光り、手元に戻ったカードには新たに“隠者”のアルカナが描かれていた。

この後は寮の屋上でチドリイベント。

ゆかりと天田の急かす声に返事を返し、うちは階段を駆け上がって行った。

どうしよっかな…全く。

寮に着いてから、うちは1人で別行動をとった。

誰にもバレないように作戦室に向かって、コンソールパネルに“あるモノ”を忍び込ませる。

『ファルロス、誰か来たら教えてね』

屋上に幾月が行った今が最大のチャンス。

扉の外でファルロスに見張りをしてもらって、影時間の中、パネルを操作していく。

…まあ、いわゆるハッキング？

データベースを探れば、出てくる監視カメラの記録の山。プライバシーの侵害もへったくれも無い。

『ここはすり抜けて……お？何だコレ？』

ハッキング作業に勤しむこと10分弱（腹時計）。何やら古ぼけたデータを発見。

『“1999・5／11”？』

内容を見たかったけど、ロックが掛かって見れない。一応、メモリーカードにコピーした。

『さて、目的を果たしますかな』

コンソールの接続端子を開き、USBを繋ぐ。
打ち込むモノは、万能遠隔解除プログラム（桐条製）。前に桐条さんに電話した時、ついでに作ってもらった。

ちなみに音声認識機能付きだから、うちの声以外じゃあ使えません。

『なるべく風花にも気付かれないように。……よしっ』

潜り込めるのはここまで。後はメモリーを抜いて、終わりっ！

「佳織、終わったかい？」

『おー。もう良いよ〜』

部屋に入って来て、モニターを見たファルロス。何か言ってるみた
いだから、『何言ってるの？』と訊いてみる。

「うん。画面越しより、桜の寝顔は目の前で見た方が可愛いってこ
と」

『……………あんだ、キャラ変わった？』

怪訝に思いつうちを、見事に無視したファルロス。

（コンニャロー…。陵時になったらひっぱたいてやる）

さてさて、チドリが入院した次の日の夜。変装してのご対面。
とは言っても、メーディアを取られた状況で何か喋ってくれるかな
…。

コンコン、ガラッ。

『こんばんは。貴方がチドリさん？』

「……………」

む、見事に無反応。

けど顔の前で軽く手を振ると視線は動く。

(思ったより重症かなコリヤ)

『私も、貴方達と同じペルソナ使いなの。昨日は大変だったみたいだね』

「…メーディアは…？」

『メーディア？それって「彼女のペルソナですよ」！？』

いきなりすぎるカミングアウトに、後ろを振り返る。

やっぱり居ました、タカヤ&ジン。つか、心臓に悪いわっ！

『何で2人が…？』

「様子見や。それ以外にはあらへん」

「貴方こそ、何故ここに居るのです？」

「うわ、完全に面倒くさい展開。ちょっと早すぎない？」

『昨日、外を散歩していたら騒ぎみたいな声が聞こえてね。気になったから遠目にずっと様子を見ていたの』

怪しまれてはいるだろうけど、追及をかわす自信はある。

ただ椅子に座っている分、うちが見上げる体勢ってのは気に入らない。

「あんだ、誰にもつくつもりは無いんか」

『無いですよ。どうして？』

「…ワイらの敵にはならんみたいやな。どないするタカヤ？」

「これ以上の邪魔が入っても面倒です。

今日は引きましょう」

『（話の筋が見えない…。今は刺激しない方が良いかな…？）』

ジーツと2人を観察していると、タカヤがチドリに目を向けて

「我々は彼らに干渉し続けますよ。早急に戻って来なさい」

「コイツは放つといっても害あらへんしな」

つまり、「《月原風》には干渉しない。」と受け取ってもいいのか？
何にせよ、だ。

『貴方達は、ペルソナ使いだって前に言っていたよね？けれど、何か私とは違う気がするの。』

どうしてか、聞いてもいい？』

「んな事訊いて、どないするんや」

あー…、ミスった。ジンの奴、こっちを警戒しまくってる。

タカヤは相変わらず気味悪い笑い方してるし…！

「構いませんよ。

貴方は中立のようだ、余興にでもなるでしょう」

静かに話し始めるタカヤとたまに補足するジン。そして、時は遡る。
10年前に…。

『なるほど…、昔は沢山いたんですね、ペルソナ使いの資質をもつ
子が』

「正確には“もたされそうな連中”や。
結局、生き残りはワイとタカヤ、チドリだけや」

『なんか、悲しいね…。チドリさんも普通の女の子として生きられたのに』

目を伏せると、「同情なんか要らん」と言っジンの言葉。(そりゃそっか)

問題は、この頑固者共が考えを変えてくれる可能性が限り無くゼロに等しい…って事なんだけど。

『(何とかならないもんかねえ…)』

「もうすぐ影時間が明けます。貴方からもお願いしますよ…。彼らの“説得”を」

『話を総合的に聞くと、どちらも譲りそうにないですよ？

私は1人でのんびりするのが好きなの』

(つか、いつ説得する事が決まった!?)

“話が終わった”と言わんばかりに病室から出て行ったストレガを見送り、つつい『何なんだろうね?』チドリに問い掛けてしまった。

…“私”も帰ろうかな。

お食事会。いやった〜！

今日も良い天気！しかし、もうすぐ台風が来る。

授業が終わってから暇人だったうちは、料理部に居た桜に特攻をかまして、一緒にケーキのスポンジを焼いている。

焼き上がるまで、雑談タイム。向かい側のテーブルでは風花がお米を研いでいる。

「それでね、荒垣先輩、一緒に晩ご飯食べてくれるんだよ。何気なく奢ってくれる…って言うか、お金払わせてくれない？みたいな」

『うちにもあった！加入した日に桜達つてば先に帰ったでしょ？あの後に“特製”ご馳走になってさ』

「あはは…、ごめんね。佳織、すっごく難しい顔してたからなんて声掛けたら良いかわからなくて」

チーン！

『お、焼けた焼けた。よっこらせつと』

「わあ、良い匂いだね。流石2人共！」

「『褒めても、ケーキしか出ないよ風花？』」

こんがり焼き上がったスポンジの前に、生クリームやチョコスプレー、フルーツで飾り付けをする。

出来上がったのは、鮮やかなフルーツケーキ。

『ん、上出来!』

「初めてじゃない感じがするよね!」

満足げにケーキを切り分ける佳織。1切れずつ食べて至福の時間を堪能した後、片付けてから一緒に下校した。

「ただいま〜!」

「あ、お帰りー。あれ、桜、その箱って何?」

寮に帰った私を出迎えてくれたゆかりに「内緒!」と笑いかけて、荒垣先輩の所に向かう。

「(先輩、この間の約束、忘れてないですよね?)」

「何コソコソ話しかけてんだ。……そうだな、今夜にでも作るか?」

前に先輩とした約束は、“今度、皆に料理を振る舞う事”。

覚えていてくれた先輩は、「何にすっかな…」と考えながらキッチンに。

途中で、風花に料理を教えるつもりみたいで風花もパソコンの電源を落としてキッチンに入った。

既にラウンジには誰も居なくて、良いタイミングで皆が上がって来て良かったと思う。一応、サプライズだしね。

「あ、そうだ！」

鞆から携帯を出して、ある所に掛ける。

(出てくれるかな……)

ー プルルルル、プルルルル、ガチャ。

《『あ、桜？どつたの？』》

「こんにちは佳織。さつきぶり！いきなりだけど、今から2時間くらいしたら、寮のラウンジに集合ね。遅れちゃ駄目だよ！」

《『えええ！？何、作戦会議？』》

「秘密！ちゃんと来てね！」

《『うん、とりあえず分かった。2時間後ね』》

ピッ。パタン。

「これでよし。っと！」

ヒョコツとキッチンを覗くと、風花が悪戦苦闘しながら材料を焦がす炒めていて。

荒垣先輩は、風花の手伝いながら“余分に眼があるんですか”とツッコミたいくらい手際良く作業を進める。

何て言うか、おっちょこちょいな弟子と師匠って感じで微笑ましいんだけど、正直

「いいなあ〜…」

と思ってしまう。

「わ、何か良い匂い！」

「シンジ、何作ってるんだ？」

しばらくすると、ゆかりと真田先輩が降りて来た。2人共、美味しいご飯が食べられるので嬉しそう。

「これ、余らないか？」

「バカかテメエ、どう考えても13人分はあるだろ」

そんな先輩達の会話をBGMにしながら、降りて来た順平とゆかりが食器運びを手伝ってくれた。

2時間後、テーブルに“これでもか”と言わんばかりに並べられた

数々の料理に目を輝かせた順平が早くもつまみ食いしようとして、ゆかりにど突かれていた。

『こんばんはー……………』

そろそろ来るかな。と思っていたら、ちょうど良く佳織がやって来た。

けど、テーブルを凝視したまま動かない。どうしたんだろ？

「何で入らないのー？つて、佳織〜！？」

クルツ、バタン！ダダダダ……………！

「あれ、さっきの佳織さんですよ。帰っちゃいました？」

階段の踊り場で首を捻る天田君。既に玄関は閉まり、追いかけてようと一歩踏み出した時に

『サプライズすぎるっ！！』

そんな叫びと共に再び、バタン！と扉が開いた。

ちなみに、佳織の手には先程は無かった一眼レフカメラが。

「佳織〜、扉がギイギイいつてるから『桜、何で教えてくんなかったの〜！？』えっと、ビックリさせたかったから……………」

大股で歩み寄って来た佳織から若干距離を置き、説明。ビミョーに涙目になってる訳が分かりません。

『……荒垣先輩の手料理……風花のドジツ子……ああ、美味しいネタが
あああ………!!』

「か、佳織？もしもし、佳織生きてる……?」

顔を横に向け、口を押さえてブツブツブツと何か言っている友人がちよつと心配になる。

——変な電波でも受信してるんじゃない……。

一瞬だけそんな考えが浮かんだ。けど次の瞬間には杞憂に終わった。

『いゝやったああああ……!!』

桜有り難う〜！持つべきは友達だね!!』

「わっ、佳織痛い、腕千切れるって!!」

ガシツと掴まれた手をブンブンと上下に振られる。いかにも「喜んでます」って体現している分には、サプライズ成功とみていいみたい。

「おい、じゃれあうのはその辺にしる。飯が冷めるぞ」

『わっかかりました〜!!』

ピヨーンとテーブルに跳んでいく佳織に、ゆかりや美鶴先輩が苦笑いする。

荒垣先輩も「はしゃぎ過ぎだっつーの……」とか言いながら、口元が緩んでいた。

『ムグムグムグムグ……。先輩、おかわりお願いします！』

「シンジ、俺もだ」

食べ始めて15分。佳織と真田先輩は、もう5回目のおかわりに突入してる。

学校で風花と一升炊いたご飯が、4合分は2人の胃袋に消えた筈。

「明彦も高瀬も、一体どこにそれだけの量が入るんだ？」

のんびりとお茶を飲んででいる美鶴先輩。視線は酢豚を食べている2人に注がれている。

『だって先輩、酢豚もオムライスも何もかもが美味しすぎるんですって！』

そうやって食べ進める彼女の隣には、大きなタッパーが鎮座中。余りそうなのを持ち帰る気満々らしい。

「そんなに詰め込むと、つつかえるよ？」

「でも、佳織ちゃんの気持ちは分かるな。荒垣先輩って本当にお

料理上手なんだもん」

『うん、今なら窒息死とかしても天国逝けそう』

エビチリのエビを箸で摘んでいたら、天田に「物騒な事言わないで下さい」「って注意されてしまった。

(……………ム)

ヒョイヒョイヒョイヒョイ…トンッ。

「……………えっと、」

『ちっこいんだから食べなよ。そこまで量は多くないだろ?』

空いていた皿に乗っかるだけ料理を乗せて、天田の目の前に置く。決して、嫌がらせとかではありません。

天田の将来を気にしたからこそその気配りです。

『美味しいんだから、頂かないと損。分かった?』

「あ…はい、頂きます……………」

『それでよし。っと』

箸を取ったのを横目で確認。ついでに料理人の顔も見た。

(うーん……………ムズいな。さり気なくを装ってはいるものの、上手くはいかないか……………)

斜め前の順平と真田先輩が唐揚げの奪い合いをしている。2人が睨み合った瞬間を狙って、パツと箸を伸ばしてかっさらった。

「ああ、オレの唐揚げ！」

「なつ、横取りは卑怯だぞ高瀬！」

『知りませーん、漁夫の利ですよ？』

外はカラッと揚がって、中はジューシー。

流石は、荒垣先輩。そのスキルを分けて欲しいよ！

「ワン、ワンワンッ！」

ふと椅子の下を見ると、コロマルが尻尾を振りまくりながらアイギスに何かを伝えていた。

「ふんふん、了解です。」

美鶴さん、コロマルさんからリクエストがあるそうです」

「ん？何だ、言ってみろ」

「“唐揚げを食べてみたい”との事です。可能でしょうか？」

「そつだな……荒垣、出来るだろ？」

既にキッチンへと消えた先輩が、サクサクと唐揚げを切る音が聞こえてくる。

て言うか先輩、美鶴先輩に名前呼ばれるより前に2、3個唐揚げを小皿に乗せて席立ったし。すげえな3年組。

食後、桜が冷蔵庫から箱を取り出した。中身は学校で一緒に作ったフルーツケーキ。

ケーキはかなり好評で、桜は荒垣先輩が「美味しい」って言ったのを聞いたら顔を赤らめていた。

可愛いなあ、コンニャロ〜！

それと、うちも色んな意味でホクホクしている。

カメラで撮った写真は、28枚撮りフィルム3本分。いやあ、ゴチです。

「佳織ー、荒垣先輩ー、紅茶が入りましたよー」

皆が満足してくれて、それぞれの部屋に帰ってから後片付けを済ませた。

今は桜が淹れてくれた紅茶を飲んで一息ついた所。

さっきから桜は先輩に学校での様子を身振り手振り踏まえながら話してる。

「それで、クラスの男子が枕投げについて語り出したら佳織が『じやあ、予行演習でもしよっか？』って言いだして…」

『あははは、あれは楽しかった。順平とか良的になったくれたしさ。……………まさかアイギスが加わるとは思わなかったけど』

「あの時は初めて佳織とアイギスが意気投合したんです。幸い？順平が避けてもすぐに被弾してくれたから終了したんですけど」

『もうちよいでクリティカルだったのに、惜しかった。次は体育着の袋じゃなくてハリセンにしようかな……………』

そこまで話した桜が、急にハツとして慌てだした。

「すす、すいません！臨場感を出そうと思ってつい……………！」

わあああ……………！と顔を覆う我らがリーダー。

不意にくっくっ、という笑いが聞こえてきた。前を見たら、腹を抱えて笑っていた荒垣先輩。

(……………楽しそうですね、先輩)

長くは続かない幸せ。彼は自分自身を戒めている。寧ろ、呪っているのかも。

けど、ぶっっちゃけ気に入くないんだよね。何だかんだ言っても、先輩だってうちらと大して年も変わらない。

気持ちは分からんでもない。だけど、うちは先輩の言い分は一切聴かないつもり。

思考回路をグルグルと回っていると、「じゃあ、先輩も学校行きま

しょう！」そんな言葉が聞こえた。

「はあ？お前、俺は学校行くために戻って来た訳じゃねーぞ」

「いいじゃないですか、大型シャドウも残り3体ですし！」

『ちよい待ち、桜。先輩がどれだけ学校行ってないと思う？単位とか出席日数とか、色々問題有りなんだよ？』

苦笑しながら告げた現実問題に、またハツとした様子で

「あああ…じゃあ、“留年で！”とか言えないよ…！！」

と頭を抱える桜。

『そんなんより、まずは目先の事じゃん？しっかりしてね、リーダー！』

「うん！…って、どうしたんですか先輩？

あつ、もしかして眠い？」

「バーカ、そりゃお前達だろ。いい加減戻れ、もうすぐ影時間だろ」

言いながらポケットを漁るが、先輩の顔が曇った。

（お、時計イベント来た？）

あれは桜が見つけるべき物だよな。さて、帰りますか。タッパーとカメラを抱えて、立ち上がる。

「お、帰んのか」

「また学校でね？」

『じゃあね桜。荒垣先輩、美味しかったです。御馳走様でした！』

「――必ず、また学校に行きましょうね。いえ、行って下さい。」

満月の大型シャドウ戦！ 運命&剛毅 1

10月4日早朝、安息庵前。朝靄の中佇む、2人がいた。

「ーー今日、なのか……」

『はい。桐条さん、以前お願いしたものは……』

「ああ、心配ない。影時間までには完成するさ、放課後にでもラボに来てくれ」

『重ね重ね、すみません。有り難う御座います……』

片方は深く頭を下げ、安息庵へと帰った。

さて、冒頭部分で分かったと思うけど、今日が天田の“復讐イベント”の日。

あれから色々考えたけど、シャドウ討伐には行かない。

『《月原凧》……かあ。あーあ、凧怒るだろーな、勝手に名前引用したんだし』

元々うちが偽名を《風》って名前にしたのは、あいつの事を忘れて
くなかったから。……………あー！何か湿っぽい、止めだ止め！

『学校行こ！』

『はよーーッス！』

ガラアッ！

手首にスナップを利かせ、思いっきり教室のドアをスライドさせる。
朝から桜の席で固まって話をしていたらしい3人が、いきなりの事
に驚いてこっちを見た。

「どうわっ、ビックリした！」

「どうしたのよ佳織、何かいつもよりハイテンションじゃない？」

『ま〜ね！』

「何か良いことでもあったの？」

桜の問い掛けに、ノンノンと首を振りながら机に向かってポイツと鞆を放り投げる。

ドサツと音を立て、何とか机の上から落ちずに踏み留まった我が鞆。

『桜、時間貰って良い？』

手招きしながら、廊下にリーダーを呼ぶ。

「何？急に深刻そうになって…大丈夫？」

『今日は……行けない。代わりに、コレを……と思ってさ』

渡したのは、銀に光る…S・E・E・Sの証。

「ちよつ、ちよつと待って、何で召喚器を…！」

『ごめん、今は言えない。隠して悪いとは思うけど、無理なんだ』

本当、ごめん！頭を下げて手を合わせる。

そのまま教室に戻り、気まずい空気を感じつつ…放課後。

桐条第2ラボ前。門柱に翳したカードを読み取り、扉が開いた。

「お待ちしていました。総帥よりお伺いしております」

小さな紙袋の中には、前から頼んでいた物が入っている。

佳織は両手で受け取り、一礼してから駆け去った。

巖戸台駅商店街。そわそわと落ち着かない順平に、油断無く辺りを見回すアイギスが話し掛ける。

「順平さん、落ち着いて下さい。今はシャドウ討伐に集中すべきです」

「いや…分かってんだけどさアイちゃん、何かこう……落ち着かねーんだよな」

(荒垣先輩も天田も居ねー、佳織だって来ないんだぜ?)

大型シャドウより、実はそっちの方が気になる彼だが、前線に選ばれた事により思考を切り替える。
が、不意に桜の左腰にぶら下がる、もう一つのホルスターに気が付いた。

「じゃあ、前線は私とコロマル、ゆかり、じゅんぺ」なあ、ちよつといいか?」何?」

メンバー選出も終わり、さあ行こうと意気込んでいた桜の言葉に順平が割り込んだ。

不思議に思う桜だったが、彼の視線が自分の腰に注がれているのに気が付き、苦笑した。

「学校で渡されたの。“今日には行けないから”って言った」

「だが、おかしくないか？彼女は何の為に、君に召喚器を託したんだ？」

美鶴が、ジーツと佳織の召喚器を見つめる。そして何かを言おうと口を開くが、2つの砲孔により叶わなかった。

「チツ、あちらは待ちかねているみたいだな！」

「私達はどこに居よう。神崎、頼んだぞ！」

「はい！」

桜達が大型シャドウ「フォーチュン」&「ストレンジス」と戦っている頃、ポートアイランド路地裏では1人の少年が、槍を手に佇んでいた。

目を閉じ、待ち人が来るのを待つ。

やがて耳に聞こえてくる足音に、ゆっくりと目を開けた。

数メートル分の距離を空けて、立ち止まった臙脂色。
振り向く事なく、天田が口を開いた。

「やっぱり、来てくれましたね……」

「……………」

荒垣さん。と小さく名を呼ぶ天田には……いや、恐らく荒垣も気が付
かなかつただろう。

第3者が、2人を見ていたことに。

満月の大型シャドウ戦！ 運命&剛毅 2

「もうっ、焦れたいなあ！ティターニア《メデイラマ》！」

「風花、フォーチュンの方は！？」

《依然、反応は消失したままです。多分、ストレンクスにある程度ダメージを与えれば……》

風花の声が、僅かに焦りを帯びる。逃げていた桜達は体勢を立て直して再び向き直った。

そこへ、何かが降ってきた。それは…巨大なルーレット。

全員が警戒する中、姿を消していたフォーチュンが中心に立っている棒に飛び乗る。同時にカラカラと回りだしたルーレット。

何が始まる…？と身構える桜達の前で、ルーレットは青で止まった。

一瞬辺りが眩く光った後、様子がおかしくなったストレンクス。

《“恐怖”状態です！今なら畳み掛けられます！》

「皆、やろっ！」

「フオーーン…！」

「よっしゃあ！行つくぜえ、ペルソナあ！」

「お願い、イオ！」

氷、炎、斬撃、風が次々に襲いかかる。
フラフラと後方に下がるストレングスの前に、今度はフォーチュンが躍り出た。

《フォーチュンもストレングス同様、光と闇を無効化します！》

「分かった！もう少しだよ、頑張ろう！」

桜に鼓舞され、4人は武器を構え直して走り出した。

『あっちゃあ〜………修羅場発見』

変装してから、色々とバタバタ（主に彷徨っていた雑魚シャドウの駆除）してしまつて遅れた。ポーチから双眼鏡を取り出し、下を覗く。

『うん、まだOK。間に合ったか』

天田が荒垣先輩に向けて「お前が殺したんだ！」って言い終わったところ。タカヤが出て来るまで少しだけ猶予がある。

……他人の家庭事情なんか知ったこっちゃないけど、1発殴って教

えてやんないかね。

『あ、とか言ってる間に出やがった』

背中に天田が庇われた時、うちはビルから飛び降りた。

右手にはペルソナのカード。手筈通りにいくかは運次第…かな。されど、タカヤが拳銃を取り出し、照準を天田に合わせる方が早い。

(集中しろ…狙いは銃弾の軌道を逸らすこと。やるなら…今!！)

チツ、こいつが出るたあ思わなかったな…。しかも天田は、俺を殺して自分も死ぬつもりだったのか!冗談じゃねえ!

「さあ、楽におなりなさい」

「フザケンなツ!」

引き金に指が掛かった、迷ってらんねえ…!

——《ガルダイン》——！！

「なっ、ぐおっ！」

「天田！！」

タカヤの奴が吹っ飛んだが関係ねえ。咄嗟に天田を抱え込んで、暴風からの盾になった。

「え…荒垣さん、」

「ちげえよ、俺じゃねえ」

未だに渦巻く大気の中から誰か出て来た。一体何なんだ…？

月高の制服、肩までの茶髪……。一瞬岳羽かと思ったが、違う。こいつは……！！

『（今は黙ってて下さいね、荒垣先輩）』

！

間違いねえ、高瀬だ！

「え…佳織さ、ムグツ！」

「（馬鹿やろう、喋るな！）」

理由は知らねえが、さっきのはこいつの仕業らしい。天田の口を塞いだまま、どういう事だ？と聞く。

苦笑いしてるが、背後に向き直ると腰のポーチから何かを腕に着けて、狙いをあいつに向けた。

「ククツ、完全に想定外でしたよ。まさか貴方に邪魔されるとは…」

『あんま良い雰囲気じゃなかったしね。…何をしているの？』

「私はただ、彼らを“救済”しようとしていただけですよ。人は早かれ遅かれ、死ぬのですから」

『救済？殺す事が？……………ハッ、ばっかじゃねえの？』

アホらしい。そう吐き捨てた高瀬は雰囲気ガラリと変えた。

「おや、貴方は…。なるほど、今まで我々を騙っていたのですか」

『いい加減気付いた？なら、隠す事ないか』

「“彼女”は仮の姿だった…という訳ですか。高瀬佳織」

『素直に騙されてくれてサンキュー。意外とやりやすかったしな。』

…………… 2人は死なせねー！』

「貴方も愚かなのですね。いつでも私は貴方達を殺す事が出来ると

いうのに」

スツ、と銃口の狙いが高瀬の胸に定まる。危険だと思ったのか、天田が声を上げた。

「ダメだ！佳織さん逃げ『へーきだつて、心配しなさんな』……………」
それに、と高瀬が笑う。

『右手首が吹っ飛んでいいならどうぞ。こっちはその方が楽だけだね』

「あつ、銃口に何か挟まってる！」

「ありや、石か…………？」

影時間の月明かりを反射する黒曜石の破片が、銃口に詰まっていた。確かにあれだと銃身ごと暴発する。

「全く、邪魔をしないで頂きたいですね」

『するに決まってるでしょーが。まとめて仲間2人も殺させると思っただ？』

「ここは引き下がります。また、お会いしましょう……………」

『ばーか、金輪際出て来んな』

ゆっくりと闇に消えるタカヤを見送り、ほっと一息ついた。

2人も立ち上がって、先輩は安堵しているみただけど、天田は表

情が優れない。

天田の前まで行って、しゃがんで目線を合わせた。

『うちが来てたら邪魔だった？』

「あ、あの……」

俯く天田を軽く叩く。思わず『無事で良かった』と言つと、恐る恐る天田が顔を上げた。

『最初に言つただろ？“後悔する”つて。』

あのままだったら、間違いなく荒垣先輩があんたを庇ってた。もしかしたら死んだかも知れない』

「だけど、それじゃ母さんは……僕が何のた『天罰じゃー！』イ
タツ！」

乾いた軽快な音が、辺りに響いた。

前置きもなく、天田の脳天にクリティカルヒットしたのはハリセン。
いつぞやのツッコミハリセンだった。

『ア・ホ・か！！あんたアホだな、アホだろ、アホ決定の三段活用
』！』

「うっ、いきなり叩かないで下さい！」

『断る。今から説教タイムだ馬鹿やろう！』

あんたは気付かなかつたかもしれないけどね、荒垣先輩も真田先輩も美鶴先輩も、滅茶苦茶あんたのこと心配してたんだぞ！？大体だな、あんたのやる事、単なる自己満だろ！子供がその歳で犯罪やる

んじゃねーよ。そんなん天田のお母さんだつて望まないぞ！親が願うのは子の幸せつて、相場は決まってるの！！』

一気に言いきつて、肩で息をする佳織。

勢いに圧されたのか、口を嚙む天田に対してゆっくりと問う。

『仮に：先輩を殺して復讐を果たしたとして、本当に胸張ってお母さんに会いに行けた？お母さん最期、どんな顔してた？』

……自分の危険を省みないで銃の壁になつてくれた、先輩の気持ちも考えな？“生きて欲しい”つて望んだからこそ、ここに居るんだ』

普通なら、殺されるつて分かつてたら来ないよ。
と寂しげに呟いて立ち上がる。

「もういい、止める高瀬」

『ハア、先輩つてほんとに……。！天田、こつち来い！』

「え……うわあつ！」

首根っこを掴んでうちの方に引つ張つた。直後、天田の居た所のアスファルトが踏み砕かれた。その形は……馬の蹄。

えー、皆さんこんばんは。只今全力で逃げ回っている佳織です。何から逃げているかというのと、絶賛暴走中のカストール。

『うわっ！暢気な事言ってる場合じゃないか！』

あれからカストールが倒れた先輩を襲おうとしたから、威嚇に《ジオダイン》をやつといた。

んで、とりあえず天田を安全そうな所に下がらせ、うちは気を引こうとワイヤーで攻撃しまくっている。

幸い、ターゲットを変えてくれたらしく、今は先輩をギリギリ視認できる場所までカストールを誘導して足止め中。

まあ、暴れまわっているカストールに建物の壁とか電柱とか壊されてるのが心苦しい。

ついでに言っと《月原風》として来たからペルソナはセイリユウしか持ってないんだよ！

他？アース以外はカードとしてベルベットルームに預けちゃったの！！

こんなん、予想外ってレベル越えてたっつーの！ホントにどうしたら…！

とりあえず、器物破損とかで賠償金を請求されないのを祈ります。

『つつても、いつ美鶴先輩達が来るか分からない状況下でワイヤー

だけはキツイ…。のわっただたっ！』

動きを止める為に右前脚に絡ませていたワイヤーが強引に引きちぎられたたせいで、ガクンと前につんのめる。

しかも、そこに《デッドエンド》が来ちゃうもんだから前方に転がって何とか回避。

これはまずい、頭に喰らった日には頭蓋骨陥没しかねん。頭があった位地のアスファルトが粉々に砕け散るのを見て、肝が冷えた。

あと1秒でも遅れてたら、頭蓋骨陥没してたよ……！恐っ！

（そもそも、物理スキル使ってくるのって考えたらやばいよな……？）

只でさえ先輩の体力は残り少ない筈。

《暴走 掛かる負担は相当でかい。》

って推測が成り立つ気がする。

ワイヤーは使い物にならなくなったから、射出装置ごと外してカストールに投げつけた。（意味無いのは承知の上。）

が、案の定馬の頭が横に振られたことで地面に叩きつけられて御陀仏。

『どうすれば丸く収まるかなあ……。桜、ヘルプミー』

とにかく時間を稼ごう！と奮起する佳織だったが、カストールの様子に動きを止めた。

異様に長い嘶き。次の瞬間、カストールは――消えた。

『!?!?』

目の前から消えたことで佳織は、まさか荒垣の所かと思いい体を反転させた。

しかし、荒垣は依然と地に倒れてまま。肩が動いているのが見え、生きていると分かって小さく安堵の息をつこうとした。

しかしそれは叶わず、代わりに口から出たのは――大量の血。

そして視界の端に見えたのは、自分の胸を貫いた金色の角。それと、宙に浮く自分の足。

『ッ……あ、が……!』

(うそ……だ……る……!?!?)

カストールが首を振り、ワイヤーの射出装置と同じように地面に叩きつけられた。

意識を失う前に、聴覚が捉えたのはコロマルの鳴き声と、天田の悲鳴……だったと思う。

《討伐完了です。お疲れ様でした》

「今回の厄介だった〜！皆お疲れ様！」

「まさかルーレットで有利不利が決まるなんてね。それにしても桜、どンドン強くなってる」

弓を手入れしながら、ゆかりは素直に桜の成長速度に驚いていた。この場には居ない残り3人の事も気になったが、残りは後1体。もうすぐ戦いが終わると考えると嬉しさが込み上げてきた。

商店街前で合流し、さあ帰ろう！となった時、真田の足が止まった。

「おい、今日は10月4日だよな？」

「そうだが…どうした明彦？」

当たり前だろう？という表情をする美鶴に対し、分からないのか？と言いたげな目が向けられる。

「美鶴、まずいぞ。今日は…天田の母親の命日だ」

「！しまった、そうか！」

ハツとした美鶴に、ゆかりが「どういうことですか？」と訊ねる。沈痛な面もちで口を開こうとした美鶴は、あるものに目を向けた。

「神碇、召喚器がー」

「あ、佳織のですね。どうしたんだろ…？」

桜が今にも消えそうな淡い光を放つ銀色を手に取り、目の高さまで上げると、

「……パキーン！」

全員が、突然の召喚に驚く。しかし、それだけではなかった。蒼をまとい、現れたのは……

「アース……？」

この場に彼の主は居ない。にも関わらず、彼は閉じていた瞳を開くと残光を残しあらぬ方向に飛び去ってしまった。

「な……なんで？佳織は居ないのに……」

「行くぞ、明彦。君達もだ！走りながら説明する。彼を追うぞ！」

言うや否や、アースの向かった跡を追って走って行く3年達。状況を把握できずに順平が狼狽える。

「何？何スか！？ちよつと先輩達……！」

「桜さん、私達も追跡しましょう」

「それに、何だか嫌な予感がする……皆、急ごう……！」

「佳織さん、しっかり……しっかりして下さいー！」

どうしよう、僕の……僕のせいだ。僕もちゃんと戦っていれば、こんな事には……！

自分の血でできた池に沈む佳織さんの傷口に《ディアラマ》をかけ続けるけど、一向に血が止まらない。

彼女の呼吸も、ヒューヒューっておかしな音を出してる。顔も青白いし、早く助けないと出血死してしまう。

「荒垣さんに……貴方も！何で僕を庇うんですか！母さんの所に行きたかったのに……どうして!？」

さつきから暴走しているカストールの事なんか目に入らない。

そんなことより、目の前で誰かが死ぬっていう恐怖を、また味わうのだけは嫌だった。

「、ひっ……！」

大人の拳より大きなコンクリートの塊が、こっちに飛んで来る。思わず佳織さんを守るように覆い被さったけど、数が多い。

これじゃあ、いつか当たっちゃっ……！

一際巨大な塊が飛んで来た時、つい応急処置の手を止めてしまった。

(ああ…当たるのかな…)

そう思った。

けれど、その瓦礫は当たらなかった。

寸前に、蒼いものがそれを叩き落としたから。

「え…」

その姿は、佳織さんのペルソナだった。彼は1度僕らを振り返ると、カストールに向かって行った。

まるで、暴走を止めようとするかの様に。

『アー、ス…？』

「！佳織さん！良かった意識が、」

「シンジッ！」

掠れきった佳織さんの声が聞こえると同時に、真田さんの声が聞こえた。

「シンジ、おいシンジ、しっかりしろ！」

「先輩！」

「荒垣さん…！」

「ウン…」

「何か、血の匂いが……佳織っ!?!」

「!?!?!」

荒垣に駆け寄った仲間が、桜が一番にその姿を認めて青ざめる。他のメンバーも、血塗れで倒れる佳織と天田を目に留め言葉を失った。

「皆っ、佳織さんが、荒垣さんも…僕を庇って……!」

立ち上がるうとした天田のパーカーを、小さな力が引き止めた。

『!?!?!』

パシヤリ、滑り落ちた右手が血に染まっていく。

彼女は、また意識を失ったみたいだ。眼が再び閉じられた。

「いやあああ、佳織!?!?!」

ゆかりさんの悲鳴がこだまする。

僕は「失礼します」と断り、佳織さんのポーチを腰から槍で切り離した。

中は黄色の紙袋が入っているだけだった。

けど、これが僕に託された物。

“『荒垣先輩は助かる、先輩達に!?!』”

震える手でギョツと握り締め、真田さんに投げ渡す。中身を確認し、驚いたようだけど、即座にそれを――注射器を荒垣さんに注射した。ユラリ、と姿が薄れ、消えていくカストール。同時にアースも消えた。

「これで、多分シンジは大丈夫だ」

「佳織っ！」「佳織ちゃん！」

「この傷…どうやったらこんな刺し傷が……」

一斉に佳織さんの所に来る桜さん達。服に血が染み込むのも構わず、回復スキルで応急処置を施す。

けれど、僕の時と変わらない。どんどん体温が低下していく彼女の手を、桜さんが力一杯握る。

「やだよ！佳織死さないで！」

「そっ…そうよ！また一人で突っ走って、無茶するなって言ったの忘れたの！？」

「病院…病院を……」

「2人共、すぐに運ぼう……」

「桜さん。恐らく、傷の位地から考えて左の肺を大きく損傷しています。」

「このままでは手遅れになりかねません。」

淡々と容態を述べるアイギスの言葉に、全員が息を呑んだ。それに、とアイギスは続ける。

「今は影時間です。明けなければ病院も機能しません」

「そんな…！間に合わないの…！？」

「違うよっ！！」

絶望的な状況の中、桜が声を張り上げた。

その瞳からは涙が溢れていたが、同時に堅い意志も見受けられた。

「間に合わない”じゃない！”間に合わせる”の！！」

佳織はしぶといんだから、きっと大丈夫だよ！」

「確かに、な……」

「なっ…シンジ、動くな！」

倒れた体を何とか起こした荒垣が、桜達の方に体を引きずりながら進む。

真田が支えようとするのを力無く断った。

佳織の側で片膝着いて、今にも倒れそうな体に力を込め、彼の視線は天田に向いた。

呼吸すら苦しげにする様子を、仲間達は不安げに見守る。

「おい…天、田…」

「……………」
「こいつと、何があったか知らねえが…。
憎しみを、すぐに捨てなくていい。力にすりゃあいい…。
お前は、まだガキなんだから、こっからだろ……………」

「僕は……………」

顔を背け、俯いてしまう少年に、彼は尚も語り続ける。

「高瀬の言った事も…少しは、考えるよ。
あそこまで怒鳴られたこと、無かっただろ……………」

下を向けば、嫌でも目に映る赤。

それは命と共に流れ、いずれ佳織を死へと誘うだろう。

静まり返った緑色の中、荒垣の声が途切れ途切れに響く。

「大体、こいつ、前に言ってたしな…。
“自己犠牲とかは単なるエゴじゃないですか？うちはゴキブリ並みの生命力が欲しいんです”ってよ。
こんな所で…逝っちまうつもり、1ミリもねえだろうな」

「……………皆。私、佳織を死なせたくない。影時間が明けるまで、何が何でも保たせよう……………」

色々と言いたい事もあるし、目が覚めたら1発殴ってやるんだからね！

「（まさか、制御剤をこいつが持っていたとはな……………）
ワリイ、アキ。ちよっと休む、な……………」

「休む…って、シンジ！」

グラリ。

倒れる荒垣を慌てて支える真田は、順平に「手を貸せ！」と怒鳴った。

「は…はいッス！」

バネ仕掛けの人形のように荒垣の元へ走る順平。その顔は不安げなもので、懇願するように小さく「2人共死ぬなよっ…!!」と呟いた。

自業自得？因果応報？……耳が痛い！

こういう時に思う事。ベルベットルームは“精神と物質の狭間”なんて中途半端なところからは抜け出すべきだっ！！

「佳織様、聞いていますか？」

『はい聞いています。しつっかりきっちり聞いていますのでペルソナ全書を開くのだけは止めてくんない…マジすんません！ごめんなさい！忠告無視した私が悪う御座いましたーっ！！』

ここで、現在の状況を説明しよう。

あれから意識を失ったうちは、気が付いたらベルベットルームに呼ばれていた。

そしたら突然、エリザベスから不穏な空気を感じたもんだから『用ないの？』と訊いた。…これが、命取りだった。

どうにもこのトンデモエレベーターガールさんは、今回のうちが見過ごせなかったらしい。

イゴールに半ば脅は……強引にお願いし、うちを呼び込んだ。(イゴール談)

んで、延々と時折(実に恐ろしい)笑顔で「聞いていますか？」って全書をちらつかせながら、説教されている訳よ……！！

イゴール Help!

半泣きになりながら椅子の背もたれに隠れた状態で、悠々と高級感のあるソファアに座る爺さんに助けを求めるけど、

「今回の無茶は、私も前もってご忠告したはずですがな？」

くそう！至極まともに正論言ってくるから悔しい！言い返せない！しかし、うちは見逃さない。イゴールの顔がビミョーに引きつっているという事実はね！

「…エリザベス」

ひいー！…！といつまでも怯えて隠れている佳織を見かねてか、イゴールは彼女の名を呼んだ。エリザベスが残念そうにしながら全書を閉じたのを確認し、やっと椅子に座り直せた。

「僭越ながら、少しお話を聞かせて頂きたかったのですがね」

「話も何も、完全に不意つかれたんだ…」

で、でもさ！死んではいけないよね。死んだらここには来れないし！」

だから全書を開閉するの止めて下さいっ！

「貴方様の無茶振りには、脱帽でございます。そもそも、ペルソナを何体もお預けになられる時に私は幾度も念を押させて頂いた記憶があるのですが」

『ごめん。何にもないかなって、鷹を括ったのも謝るよ。それでも、うちなりに考えたんだよ。』

風花にサーチされてバれるのは避けたかったし、如何にも“たまたま通りかかっただけ”って見せた方が怪しまれずに済むかなって…』

今思うと、そっちのが余計に怪しいか。

ズルズルと椅子からずり落ちそうなほど力を抜く。今頃病院では皆が大騒ぎかな……。 (死にかけた人間の言う事じゃない)
人間片方だけ肺が無くなっても生きられるらしいし、その辺は運次第な気がする。

「とにかく、ペルソナはお返しします」

再び、パキンという音と共に戻って来た力達。何だかんだで、やっぱり安心するね。

『あー…え〜っと、エリザベス？非っ常に言いにくいんだけど、怒らないで聞いてくれる？』

「……………私は“怒り”という感情は抱いておりませんが。何でしょう」

『 (今の間は嘘だ、絶対怒ってるって!)
あと…2、3回かな？無茶するから多めに見てくれると嬉しい。
勘違いしないでよ？死ぬつもりなんか毛頭無いし、いつかあんだ達とは死なない程度に手合わせしてみたいと思っただりするからね。
だからその、これからも助けてくれると嬉しいです！』

頭を下げたうちを、ちよつと面食らった様にエリザベスが見下ろす。
イゴールは何も言わず、微笑を称えて目を伏せた。

しばらく時間が止まった様なベルベートルーム内には、神秘的な歌声だけが響き渡っていたが

「もとより、そのつもりでございます。私は、己の役目を見失う事

はありません。

それは、弟や姉にも言える事……」

銀髪がさらりと揺れ、彼女は自然と頬が緩まるのを感じる。

目の前の少女は、真っ直ぐ道を行かんと奮起するものだから、ついからかいたくなってしまった。

(私も、まだまだでございます……)

『(良かったああ〜！)

有り難う、エリザベス。あんたを選んで良かったよ』

OKと承けとった佳織は、笑い返してから立ち上がり身嗜みを整える。

そろそろ帰ろうと思った。何となく、呼ばれてる気がしたしね。ついでに、1回電話しとこうかな。

佳織と荒垣が運ばれ、目を覚まさないまま1週間が経過した。

医師の話によれば、荒垣は“意識は戻っても、元通りの生活を送れるかは彼次第。”佳織は“S・E・E・Sから離脱させ、1ヶ月は病院で絶対安静が必要。”と告げられた。

あの日、影時間が明け、集中治療室に運ばれていく2人を廊下で見送ったメンバーは、しばらく誰も口を開かなかった。

病院に着いた時、佳織は自力で呼吸ができなかった。容態を見た医師は“生きているのが奇跡だ”と、とても苦い表情で言っていた。本来ならショック死や出血多量で死んでもおかしくない。焼け石に水程度だった応急処置が、ギリギリ命を繋いだのだろう。

あれから1週間。放課後、交代で見舞いに行きながら回復を祈る日々。

「佳織、元気になるよね…？」

ラウンジで、桜が零した不安。暗い顔の彼女の手を、コロマルが元気づけようと舐める。頭を撫でるその手は、未だに震えていた。

「遊びじゃねーって分かってたけどよ…。実際に傷付いて、先輩もあいつも倒れちゃった。

どうすりゃいいか、分かんなくなっちゃったよ……」

「順平くん……」

「…私、佳織のお見舞いに行ってくる」

「待て岳羽、彼女はまだ目覚めていないんだ。目覚めれば医師から連絡が来る。

それまで「先輩は、心配じゃないんですか!？」「っ……」

テーブルを平手で叩きつけたゆかりが立ち上がり、美鶴を睨んだ。涙が零れそうになるのを必死で留めている。

「落ち着け、何も美鶴は心配していないとは言っていないじゃないか」

「けどっ…！」

顔を背け、辛そうにする美鶴の肩に真田が手を置く。恐らく一番責任を感じているのは美鶴だ。と真田は感じていた。

緊急で搬送されていく2人見ながら、すまない。と何度も呟いていたのを隣で聞いていたのだ。

天田が戻っても暗い雰囲気は完全には無くならなかった。皆“すぐに意識が戻る”と 自分に言い聞かせ、表面上は明るく振る舞っていた。

だが、不安は消えない。

と、美鶴の携帯が着信を鳴らす。

「私だ。…！ああ、そうか。なら、明日向かおう。頼んだぞ」

「先輩、もしかして…？」

パソコンを閉じ、窺うように訊ねた風花。美鶴は一息ついて「高瀬が…目を覚ましたそうだ」と告げた。

「良かった…！」

ホッとした空気に包まれるラウンジ。

「だが、しばらくは安静にしなければならぬ。医者も驚いていた

よ、凄まじい回復力だな」

「後は、荒垣さんだけツスね…」

「大丈夫だ、シンジは簡単にくたばる奴じゃない」

順平の言葉に、しつかりと芯のある言葉が返される。彼を誰よりも知る真田だから言える。

ここに荒垣が居れば「立ち止まってんじゃねえ」と湯を入れただろう。

と、今度は桜の携帯が鳴った。

誰だろう？と画面を見た彼女は一瞬息を呑み、慌てて携帯をスピーカーモードに切り替えた。

「佳織っ！」

電話が繋がると同時に、桜の声がラウンジに響いた。

全員が驚き、彼女の傍に集まる。

弱々しくはあったが、聴こえてくる声は正真正銘、佳織の声。

《『ちよつと、声聞きたくなつてさ…。そっちは、大丈夫？』》

極力抑えているだろう息遣いが、苦笑いしながら電話に向かう姿を連想させる。

“ーバカ！”

そう怒りたくなる気持ちが込み上げてきたが、今は安心感がそれを上回った。

と、横から誰かに電話を奪われた。見なくても分かった。ゆかりだ。

「あんたバカ！？重病人が一体何やってんのよ！」

電話越しに思いっきり叫ぶ声が響くのか、順平が耳を塞いだ。

しかし、誰もゆかりを止めようとはしない。泣きそうな彼女の眼が、どれだけ心配していたかを物語る。

《『ちよ、ゆかり声でかい…頭キーンって…』》

「知らないわよ、そんなの！ねえ、何で？何で何も言ってくれなかったの！？知らない間に突っ走って血だらけになって！心配するこっちの身にもなりなさいよ！」

私って…私達って……そんなに、頼りない…？もうちよつと、頼ってくれたっていいじゃない…！」

最初は勢いが良かったが、すぐに涙で邪魔される。自分達の知らない所で、佳織が何を考えているのかを知りたかった。

沈黙する電話。言うつもりが無いのか、言えないのか。

どちらにせよ、何かあると全員が感じていた事だった。

《『あちゃー……やつぱ怒られた。』》

皆いる？居たら伝えて、ごめんなさいって。まだ伝えられない。考えがまとまらないし、うちの身勝手だけど、目的が果たせてないから……』》

何が、と聞きたかったが、電話の向こうで看護婦が注意しているのが聞こえた。

《『あ、すみません…。』

ごめん、ゆかり。もう戻らないと…。』

それと、信賴してるよ。嘘じゃないから』《

じゃね。それだけ言って、通話は切れた。

何か、あるのかな…。

荒垣先輩と佳織が入院してから、学校の生徒達はある話題で盛り上がっていた。

“不良による暴行事件”。

表向きはそうなってるけど、真実は私達しか知らない。放課になる度に、あちこちから勝手な憶測が聞こえてくるから無視を決め込んだ。

さつきも、廊下を歩いていたら別クラスの男子生徒達が笑いながら通り過ぎて行った。

「荒垣って、あの不良だろ？」

「ろくに学校には来ねえらしいな。留年すら出来ねえじゃん！」

「けど噂じゃあ、夜中にポートアイランドでうちの女生徒と会ってたって話！」

「マジかよ、おっかねえな！そんな奴らは、いない方が気楽だぜ！」

「…何それ、いい加減にしてよね。何も知らないくせに、何も知らないくせに…！」

得意な授業でも、全然集中できなかった。

ノートにシャーペン先の先端を力の限り押し付ける。ポキッと芯が折れても気付かなかった。

気分悪い。胸の奥で怒りとか情けなさとかが混ざり合って、自分の感情がよく分からない。

「ねえ、桜ちゃん。聞いてもいい？」

数日後の図書室で、詩織と2人きりの時だった。いつもと違った声の調子に、本を棚に戻していた手を止めて振り返った。

「私には…今の貴方が悔しい思いをしているみたいに見える。何かあったの？」

「…舞台の裏方ってさ、本番が始まるずっと前から準備するよね」

ぼつりと出てきた言葉。感情が、堰を切ったみたいに言葉となつて溢れ出した。

本番を成功させようと1から頑張つて、走り回つて些細なミスも見逃さない。

私達S・E・E・Sとは別に、佳織はたった1人で“何か”に向けて奔走している。

だけど、1人じゃ手に負えなくて。あんな大怪我をしてしまった。

私達がするシャドウ討伐が日常の“裏方”なら、佳織は“裏方の裏方”。こんな表現がピッタリな気がする。

「文化祭は台風で駄目になっちゃったし、皆…今までの準備が無駄になったって、残念がってたよ」

「うん、今年は運が悪かったのよね。けど、来年はまた盛大にやれるわよ！」

優しく笑う詩織。私が“文化祭をやれなかったから悔しい”って思ったって考えたのかな。——ごめんね、違うの。そうじゃない。

「例えば…次が無かったら？どうしようって思う？」

視線を、何の気なしに本棚に移す。視界の隅で、顎に手を当てて考える友人。

その姿を見ていると、ここでのある記憶がふわふわと蘇ってくる。

前に佳織と図書室に来た時。

目当ての本がギリギリ手を伸ばしても届かなくて、佳織は意地でも側にあつた踏み台無しで本を取ろうと躍りになって…結局10分後には折れたんだ。

“日本人平均以上は欲しい…！”

そう齒噛みしていたその手に収まっていたのは、

《人生の大勝負は、どうすれば成功させられる！？》

何だか、ギャンブルじみた題の本だった。

変わった本だね。って言ったら、

“今年は、うちにとっての大勝負が3回あるからね！あ、内容はシークレットで！”

って返された。あの時は何の事が分からなかったけど、思い返したら引つかかった。

あの上に美鶴先輩達から聞いた、天田君の過去。決意を新たにしたら、天田君から聞いた佳織との初めて会話した時の事。

“びっくりしたんです。僕の考えが読まれたのかな。って”

“彼女には、今のS・E・E・Sとなる前の事は話していない”

どこで知ったかは分からない。もしかしたら荒垣に聞いたのかも知れないーと。

「退院したら、聞きましょう」

ゆかりが提案した。でも、先輩達は首を振った。理由は、教えてくれなかった。“もう少し時間を置こう”としか言ってくれなくて。

「ーちゃん、桜ちゃん？」

「あっ…ごめんね、ぼーっとしちゃった」

思考の迷路から意識を前に戻す。質問した事すら一瞬忘れていた。

「詳しくはよく分からないけど…何か大変そうだったら、少し強引にでも荷を持ってあげるべきだと思う。もし次が無いなら、誰でも“絶対に成功させないと”って思うから。肩の力が入りすぎると、失敗しちゃう」

ね？と同意を求められる。確かに、今は無理でも話を聞くチャンスならいくらでもある。

「有り難う。少し気が楽になったよ」

「良かった。桜ちゃんも暗い顔してたから心配だったの。笑ってても、心は遠くに置いてきたみたいに感じたから」

カウンターに戻って、仕事のやり残しがないか確認。校門まで一緒に行って、そこからは走って寮に帰った。

「君か、おかえり」

「先輩、今夜全員をラウンジに集めます！話したい事がありますから」

「…そうか。心配は杞憂だったようだな」

洋書を膝に置き、優雅に紅茶を口に運ぶ美鶴先輩。

「あ、おかえり」

「うーっス、遅かったな桜ツチ！」

2階からゆかりと順平が降りて来た。

「ただいま。と返事をする間もなく寮の玄関が開いて、コロマルが走り寄って来る。後ろからはアイギスが。」

「あ、アイギス。絵馬はちゃんとやってくれた？」

「はい。コロマルさんに教えて頂いたので完璧に」

「じゃあ、次は買い出しだな」

「真田さん、プロテインばかりは駄目ツスよ？」

「とんとん拍子で進んでいく話についていけずにいると、天田君がこっそり教えてくれた。」

「もうすぐ佳織さんの面会謝絶が解かれるみたいなので、皆でお見舞い品を持って行くこうって話していたんです」

「アイギスさんとコロマルには、神社に願掛けに行ってもらってました」

「今までは行けなかったから、こういうのもいいかなって思ったん
の」

姿の見えなかった風花がキッチンから顔を出した。

「…… 禍々しい黒い物体の乗ったお盆は視界からシャットアウト……
の前に止めないと。入院患者に暗黒物質は駄目だよ！」

「風花、まさかそれ……」

ゆかりが引きつった顔で訊ねる。コロマルとかラウンジの隅っこに逃げちゃったし！

何か、グラタン…に見えなくもないけど、ゴポゴポ泡が立っているのに加えて、異臭がすごい。おまけに表明は黒…を乗り越して若干炭化してる。

「やっぱり荒垣先輩が教えてくれないと難しい…。ちょっとは成功かなって思ったのに」

「ーそれで!？」

風花以外のメンバーの気持ちと同じになる。どうやら風花はお見舞いにそれを持って行くらしい。

「風花、病院だから鶴とかさ、別のにしない？」

それは廃棄。と言外に告げるゆかりの言葉に、うーんと数秒考える暗黒料理人。

「あ、オレっち思い出したんだけど」

「どっした伊織？」

ポン、と手を打つ順平。

聞けば、順平は佳織から伝言ぽいのを預かったとか。詳細はメールを見せてもらった。

《『風花と庵に行つて、うちの部屋にあるパソコンを覗いて見て』》

「パソコン…？それより、何で順平なのよもっ」

「へっ？オレに聞くの？」

メールを睨んだまま、不満そうに口を尖らせるゆかり。まあまあ。と宥めつつ、影時間にはタルタロスに行こうかなと考える。

テオの依頼も溜まってるし、更に力を付けないと！

（全員集まってるし、今夜召集しなくても今言えば…）

「皆、話があるの」

視線が集まる。1回目を瞑り、開く。

これは私の独断。不満を言われるのは分かってるけど……文句は無しだよ、佳織。

「佳織を、S・E・E・Sから離脱させます」

病院って…暇！

「だいぶ傷も塞がっています。これなら、すぐに面会許可が出せますね」

『どうも。そうだ先生、1つ訊いてもいいですか？』

病室に往診に来てくれた先生に、心臓停止から蘇生する可能性はどれくらいかと質問。

「明確には分かりません。本人次第ですからね。ですが、確率としてはかなり低いですよ」

『……………なるほど。それと、荒垣先輩はどうなんですか？』

「未だに意識は戻りません。今まで使用してきた制御剤の副作用も影響しているので、いつになるかは…」

『早く、目を覚まして欲しいんですけどね…。往診有り難う御座いました』

「はい、また来ますね」

先生が病室から出て行き、後から来た看護婦さんが点滴を替えているのを観察。時折、話相手になってくれたりする。

入院してから、2週間が経過。怪我自体は治りも良好、呼吸も日を迫る毎に楽になってきた。

『死ななかつたとはいえ、我ながらなんて回復力。たまげたつつうか、あり得ねー…』

何度目か忘れたばやき。よっ、と軽く身を起こすと左胸辺りがズキリと痛んだ。

『いつ…つうー…。まだ早いかな…』

ベッドに倒れ、備え付けのキャスターの引き出しから携帯を取り出す。

不在着信1件。番号を確認すれば、なんと相手は幾月。

『……着信拒否設定完了。あいつ、どうして人の携帯に電話してんだよ』

話す事なんかねーってば。

アイギスも助けないといけないけど、この調子じゃ暴れらんないし…困った。

寝返りを打つと、今度はメールが。

『えーつと…お、テレツテじゃんか』

《「とりあえず、お前の母さんに部屋教えてもらったから今から入るぜ」》

『《はい了解。お好きにどうぞ》…返信』

しっかりメールを受け取ってくれたか。良かった良かった。

風花がいれば、うちがパソコンに掛けたロックも解除可能な筈。そうすれば自動でファイルが1つ開くようにしてある。

中身は携帯に添付可能な解除プログラム。以前うちが作戦室のコンソールに仕掛けたのより強力なもの。

これが、幾月を叩きのめす切り札になる。

皆には悪いけど、まだやる事は山のように残ってるから、うちの事は秘密。

「ーコン、コン。」

そこまで考えた時、ノックの音で思考が途切れた。

『?はい、どうぞ?』

返事をする。すると一瞬躊躇うような気配がしてから、ドアが開いた。

「佳織、具合は?」

『あ、母さんじゃん。だいぶ良いよ。不良沙汰に首突っ込んでごめんなさい』

自分で言ってなんだけど、母さん…森本さんも騙している事になるんだよね…。

若干の心苦しさを感じながら、平然とした態度を貫く。最初に目が

覚めた時は鼓膜が破れる程怒られた。

けど、何か今日の母さんは様子が変。どこか他人行儀だし、（いや他人だけどね）視線があちこちウロウロしてる。

「さつき、お医者さんの所で話を聞いて来たわ。あと1週間位で退院できるみたいよ」

『マジ？うわ後1週間も入院してなきゃいけないの？』

退屈。と言いながら母さんが剥いてくれた林檎をかじる。

1つ、2つと食べて様子を見るけど、やっぱりおかしい。

『ねえ、何かあったの？』

「ー別に、何でも無いのよ？佳織こそ、早く食べて寝なさい。回復しないから」

ピクツと動いた手の動きを隠すように、また林檎を剥き始める。

（こりゃ、何かあるな…）

今は追及するしないけど。

その後、母さんはすぐに帰って行った。挙動不審っぷりが怪しいけど…まさかね。

『止めよ。物事はマイナスじゃなくてプラスに捉えるべきだよね』

小さく呟き、また布団に潜り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8360q/>

ペルソナ3 ポータブル 《異邦人の記憶》

2011年10月13日05時46分発行